チベット巡礼探検家

求道の師『能 海　寛』

隅 田 正 三　著

波 佐 文 化 協 会

チベット巡礼探検家

求道の師　　能　海　　寛

隅　田　正　三

は　じ　め　に

仏教研究と英訳経典を世に出し、世界宗教会議所なる統一した拠点を創り出すために身命を投じてチベット巡礼探険に赴いた学僧・能海寛は、僅か33歳の生涯の中で、知恵と英知を振り絞り精一杯の生き方をし、人間の極限の可能性を知らしめた人物である。

能海寛は、島根県浜田市金城町長田、真宗大谷派浄蓮寺の出身である。彼は、京都の普通教校在学中(明治１９年１０月２３日)に、チベット探険を公言して以来、用意周到に、１１年の歳月をサンスクリット語、英語、チベット語、中国語を学び、『世界に於ける仏教徒』なる著書を著し、日本で最初にチベット派遣僧として、自らが企画立案して、東本願寺へ嘆願し、実現となった。言わば、チベット探険の先駆者である。

自らは、「不動」と「弥陀如来」の２尊を信奉するという。中国西域ダルツェンドにおいて、「般若心経」、「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」、「西蔵語ボン教」等のサンスクリット語経典、西蔵語大蔵経典を入手して、梵・蔵・漢・英語に直訳して南條博士宛、日本へ送り届けた。亡くなる前に出した彼の判断は、「仏教研究は、西蔵学の研究が何よりも重要である。」という結論であった。

世界の屋根と称されるチベット自治区(チベット高原)は、長い間、秘密のベールに包まれていた。私が能海寛に関心を持ったのは、今から４８年前の昭和４３年で、その頃の私は、民俗資料の蒐集に青春を賭けていた時であり、当時は、今日のようにチベット関係の情報や資料は乏しく、非常に困難であった。当時は、明治１００年に当たり、島根県における「偉人百傑」を選出するイベントが組まれ県内の偉人１００人が選ばれた。蓋をあけると我が故郷からは島村抱月が選ばれた。しかし、能海寛はノミネートされなかったのである。私を能海研究に駆り立てたものは、百傑に落選した時からスタートしている。採用されなかった理由は何であるか、自分自身では、幼年期・青年期の履歴の欠落であると反省して、爾来、４０数年間に亘って能海の資料発掘と研究と顕彰活動を行ってきた。21年前からは、全国に研究者を呼び掛け、「能海寛研究会」を立ち上げた。多くの研究者の研究成果により、世に知れる存在となりつつある今日、『能海寛著作集』(全１７冊)も完結し、「能海学」なるものを構築するために研究が進んで来るものと確信している。

昭和６０年より季刊『なわて』第７号から第１５号まで連載したものを集大成して２７年前に「チベット探険の先駆者『求道の師・能海寛』」として発表した。その後、平成８年に２回目の資料発見があり、内容を改訂して平成２２年に、「チベット巡礼探検家『求道の師　能海寛』」の発刊となった。今回、２回目の改訂版として、ＰＤＦ版として一般公開します。

(2016. 2. 4 記)

チベット巡礼探検家　求道の師　『能海　寛』

目　　次

表紙写真　「能海寛顕彰碑」

は　じ　め　に

Ⅰ　求道の師　『能海　寛』…… 隅　田　正　三

1.　生い立ち …… 1

2.　向学心に燃えて …… 2

3.　京都・普通教校時代 …… 4

4.　慶応義塾時代 …… 7

5.　哲学館時代 …… 10

6.　チベット探検の具現化を目指す …… 12

7.　高島での僻地教育の試み …… 14

8.　東京修学時代 …… 15

9.　婚約・新婚時代 …… 17

10.　探検への旅立ち …… 18

11.　第一次探検（川蔵公路コース）…… 23

12.　仏典の翻訳に業績 …… 25

13.　第二次探検（青蔵公路コース）…… 26

14.　第三次探検（雲南コース）…… 28

15.　能海寛の横死情報を巡って …… 29

16.　顕彰活動の推移 …… 33

17.「能海学」として後世へ伝える …… 34

注　釈　　参考文献　　能海寛研究会での発表　能海寛関係講演記録

Ⅱ　『ロ　代』…… 能　海　　寛　51

Ⅲ　能海寛チベット文献将来品 …… 53

大谷大学博物館所蔵「能海寛請来品目録」

Ⅳ　補 助 資 料 …… 67

学資金ニ付訂約書　嘆願　入蔵予定　履歴書　『阿里のまん満雲枕』の「発情俗作」より　遊学資料萬覚 能海寛編纂浄蓮寺蔵書目録函記号「思想の変遷」(M33.12.22 記) 井上円了博士あて　友人への書簡南條文雄博士あて最後の音信など

Ⅴ　能海寛中国大陸旅行地図 …… 79

あ と が き …… 81

チベット巡礼探検家

求道の師『能海　寛』

1.　生 い 立 ち

能海寛（のうみ　ゆたか）は明治元年（1868 年）５月１８日、島根県那賀郡東谷村（現・浜田市金城町長田）天頂山浄蓮寺にて１２世住職父・法幢、母・ユクノの次男として誕生した。寛は、３人の父（徳言、法幢、謙信）と兄弟６人、兄=千代摩（法言）、寛（法流）、斉（斉入）、ハツ（初子）、義妹のスエ（末子）、登（皆乗）。(注 1) 実際には、もう一人の兄が出生時に死亡している。また、末子は、謙信師の連れ子である。ここでは、戸籍上での兄弟を表している。

浄蓮寺は、真宗大谷派に属し、由緒は、中世に天頂山長福寺と称する真言宗の寺院があり、永禄年間に零落して廃寺となった。その後、永禄１１年(1568 年)に、今日の浄蓮寺が建立された。浄蓮寺の前身は周布川の下流、青尾（浜田市弥栄町）京羅瀬と称する所に真言宗京安寺という寺があり、乃美蔵之助（洞円師）という僧がいて、１０数キロ上流の三艘舟（浜田市金城町波佐）という所に移り、再び現在地の天頂山に移り改宗して浄蓮寺を開基した。

浄蓮寺の開山当時は、浄土真宗本願寺派であったが、真宗の安芸門徒といわれるように、宝暦６年(1756 年)一夜にして東派本山へ転派帰山した。明治に入ってから苗字を乃美から「能海」に改めて今日に至っている。

能海寛は、浄蓮寺の南方に立ちはだかる西中国山地の大佐山（１,０６９ｍ・国定公園）の四季折々に変化する自然を強く心に焼き付けて幼年期を過ごした。後に、和歌を詠み、尺八をたしなむ風雅な人へと成長していった。

明治５年(1872 年)に、浜田地震(注 2)が石見地方を襲った。引き続き、翌６年の風水害で、波佐地方の稲作は凶作で大飢饉となった。地震、風水害により井戸水が枯れた。このため父法幢は、井戸掘りに明け暮れ、夏風邪を患い、明治８年(1875 年)８月１６日に急逝した。寛は、この時、室屋谷（医師宅）まで風邪薬を取りにいっていたので父の死に目に会うことができなかった。

浄蓮寺は当時３９０戸の門徒を有する寺院であり、当然に住職不在では到底なりたたず、明治８年１２月４日に３人目の住職を有福村大金（現・浜田市大金町）の谷家から佐々木謙信師を入寺させた。謙信師は九州の中津の照雲寺の松島善譲師のもとで宗学を学び東本願寺派の布教師として活躍した人である。

寛は、父法幢の里・専光寺（広島県山県郡北広島町刈屋形）で養育されることとなった。寛にとっては、伯父の里ではあるが。他人の教育ということになる。伯父の安本円海師は寛に宗教者としての最初の教育者であった。

明治１０年(1877 年)６月１２日には広島小教校（進徳教校・広島市寺町円龍寺内）へ入学し、３年間漢書を学び予科２級を卒業した。

明治１２年(1879 年)１０月２８日、寛は、京都本山において得度（大谷光勝法主より本宗僧侶浄蓮寺宗徒仍授牒）した。この時、満１１歳であった。得度に当たっては、１０月２日より兄法言と２人で京都へ上京し、３週間ばかり在京して得度の教育を受けた。この時、「得度御利刀式嘆願」の控えによると、「私共、先般得度御調査相済候以来、御利刀式、今以て御沙汰無之候に付、心苦不少候得共、数日、在京仕候處、彼是(かれこれ)困却之廉も御座候間、何卒至急得度式被成下候御取計被下度此段連署を以て奉嘆願候也」と記し、一緒に得度を受けたのは、石川県鹿島郡上町村本浄寺衆徒中畠聖地玄、石川県河北郡高松村発願寺衆徒小池田大宣、島根県那賀郡長浜村明清寺衆徒上野覚十郎、兄の能海法言、能海寛の５名であった。上京する為の往復経費を「得度ニ付道中及入払帳」に克明に記録している。母、兄、門徒より２７円３８銭の収入金に対して、得度に要した経費は１１円４３銭。その他主な支出として、印鑑(「寛」の一文字の印)、数珠、記念写真、宿代、舟代、汽車代などに要した経費１０円１４銭５厘であった。寛は、この時から生涯にわたって几帳面に出納帳を書き続けた。几帳面な性格は親戚縁者からも信頼され在京中は師弟の後見役もきちんとこなしていた。

明治１４年(1881 年)に再び郷里へ帰って来た。浄蓮寺では教導師としての義父・謙信から将来性を見込まれた寛は後継住職としての期待を担い漢籍、宗乗などの教育を受けた。郷里にあっては４年間法務に専念する傍ら毎年(１５年、１６年、１７年、１８年)の夏場には浜田町（現浜田市）の石見学場（明清寺・浄慶寺、正楽寺など６カ寺）(注 3)にて宗教家としての基礎的な勉強をした。

明治３１年(1898 年)５月には、これまでに使用した仏門関係の総経費を詳細に記録している。先ず、明治１２年得度入費１１円４３銭５厘、明治２８年余間継席１０円、院家整理１０４円、明治３０年法衣新調５０円、明治３１年法服七条１２５円５０銭、法衣新調７０円、合計３７０円１３銭５厘。学業などでは、明治１８年から３１年４月までの経費９６７円６５銭５厘。総合計１,３３８円５９銭。と几帳面に記録しているのである。やはり、幼年期、７歳からの他人の教育が寛の人間形成につながったものと思われる。

2. 向学心に燃えて

明治１６年(1883 年)に九州から高塚和上師が島根県石見地方へ講演に来訪、師の講和を拝聴し感銘した兄の法言と寛の２人は高塚師が帰国される折に九州へ遊学に赴きたいと発起した。しかし、遊学するに当たって障害が起こり、兄は志しを止め法務に専念するも、寛は機あれば遊学したいという気持ちを持続させていた。明治１７年には「到底時を待っていても自ら出ざるに非ざれば、その時期のあらざるを証り」と九州へ脱走(注 4)を計画するも金銭の目途がたたず、また一年を経過した。この間も「毎日、毎日、一日も遊学の途に就かざらずと、心の内にのみ不平不満にて暮らし居て、忘れることなかりし……」と、募る思いに金策と遊学の相談を檀家総代の石田喜三郎氏へ頼み、この考えを父

に伝えて貰った。しかし、父からの快い返事の沙汰がない。思い余って父に尋ねると、父は、「郷に居て不学のもの他郷に居て何をなす……。」との一言で、取り付く島もなく、石田氏に再度相談したところ氏は寛の心を読み取り「広島を目指して出るべし……。」とアドバイスした。

明治１８年(1885 年)９月に再び専光寺、１２世安本円海師（寛の伯父）に自分の進路の相談に行き、仲介して貰い、９月１０日「品行正しく勉励すべし。」と誓約し、父と檀家（門徒）総代の了解を得て同月１３日に再び広島教校に入学した。広島教校では、高僧和讃、三国伝、通縁起、十八史略などを学んだ。

しかし、１２月２０日の試験をもって京都の普通教校へ統合することとなり、寛は退学した。この時の理由として後に記述しているメモ書きによると、広島教校へ入学するに当たっては『内密に荷物を送り出して置き、いずれは上京し勉強する目的があった。』という。目的を遂行するための賭けであった。

同月２１日より大手町６丁目桑門巌宅(注 4)へ寄留して越年し、明治１９年１月１５日まで過ごす。帰郷したのは１９日から２２日の４日間であった。２３日には広島迄と偽り浄蓮寺を発った。この時、寛の手持ちのお金は１１円余りで父から１円戴いていた。途中、専光寺で２泊、庄原喜作宅で１泊、桑門宅で３泊した。２９日夜、広島港からサヰキ丸に乗船、３１日朝、大阪着、正午に京都・新町の友人桑門巌宅へ寄留して３月５日、京都普通教校への入学を待った。

入学してから３月１７日までは、車中筋御前道上ル分舎宿、１８日から本舎寄宿となり東寮３号室で伯耆の垣山清、近江の蚊野遷次郎、紀伊の小池智覚の４人が同室であった。

５月２９日、寛は「反省有志会員」(注 5)第８５号として入会している。会の大意は「一　禁酒ノ事一　猥褻ノ場所ニ立入ル可ラス」とある。反省会発足当初から参画していたものである。

６月１１日、コレラ(注 6)の流行により、学校は閉校となり、寛は一時、帰郷するため１２日、大阪港を発ち翌１３日広島港へ到着。３丁目野田宅で２泊、道中庄原で１泊、専光寺で２泊、１８日に帰郷した。

寛は、帰郷中に義父の謙信や檀家総代へ学資金の援助を申し出た。この結果は、明治１９年(1886 年)１１月『能海寛学資金本寄附米』によると、檀家全戸が現米で明治２１年まで納めている。学資金の援助を約して、学校が再開されたので、９月１０日出発した。広島までの途中は都志見（現北広島町）で１泊、１１日、加計から川舟で丁川（よろがわ）の運河を出発し太田川を下り、６時間かけて慈仙寺の鼻（現在の平和公園）といわれる広島の船着場に着く。１２日夜、広島港から乗船、１４日朝大阪港着。京都桑門宅で一泊して、１５日に普通教校へ帰校した。

１０月１０日、反省会へ「誓約書」を出し永久会員となり、その後、活発に活動する。学校が再開され、「宗乗余乗」、「普通学」を学んだ。ここで、後に寛の生き方に強い影響を与えた恩師となる南條文雄博士（明治２１年６月７日に文学博士となる）に出会い、梵語学研究の触発を受け、１９歳でチベット探検を公言し探検家「能海寛」としての旅立ちが始まった。

西寮２号室の親友蚊野遷次郎から「活眼を開けて、君が成業を待つ、勉めよや、勉めよや。石見一傑士能海寛貴兄」宛という激励文を受け取っていることから判断して明治１９年１０月２３日に南條博士や同僚にチベット行きを公言したことが伺える。もっとも、南條博士も『能海寛遺稿』能海寛君略伝で「１９年本願寺派の普通教校に入りて、……君の西蔵探検の志は已に此時より発起せり……。」と述べている事からも伺える。

１年半年も前から寛は雑誌『教学論集』(注 7)第１５編（無外書房刊・明治１８年３月５日発行）から購読しており、南條師が明治１７年にヨーロッパから帰国して以来の論文掲載を全て読んでおり、南條師の考え方を把握熟知していた。南條師がチベット探検への必要を吹聴されていることに共鳴したからであろう。単なる思いつきでチベット探検を公言したのではないことが、寛の生涯をかけての

行動が全てを実証してくれるのである。

3. 京都・普通教校時代

寛は、明治１９年(1886 年)１１月２３日「ニュー・ナショナル第３読本」(注 8)３０章までの英文を学習している。引き続き第２巻を１２月３１日に終えている。この頃の寛は、英文力を高める努力をしていた。この頃から友人との手紙のやり取りは全て英文でと、申し合わせていたのである。

寛の記録した「学科點表」により英語力の発達過程をたどることができる。明治 19 年 10 月、英学平均点 68 点。１９年１２月の臨時試験英学 76 点。本科生となった２０年 3 月の英学平均点 91.8 点。20 年 12 月臨時試験では、音読 90 点、会話 75 点、書取り７０点、英学平均点 78.3 点。21 年 7 月前期試験では、英訳 75 点、書取り 95 点、音読 100 点、平均点は 90 点。また、文典 96 点、英作文 80 点、会話 70 点、平均点 88.7 点という記録が残されている。これらを精査すると 20 年 1 月から急速に英語力がついてきたことが判る。これは、前年に学んだ「ニュー・ナショナル読本」の成果といえよう。

『普通教校人士』(注 9)の沿革記によると「明治１８年４月１８日をもって西六條に開学する。教校の精神は僧俗を問わず宗派を分かたず遍く佛弟子を教育して広く同胞の拡張せんとする。仏教学校に外国人を聘用する。２１年(1888 年)１２月２５日大学林例の発布により学生の多くは四方八方に分散した。ましてや文学寮に残れる者は甚だ少なく……」と述べている。明治１８年開学以来８２３名の学籍名簿を見ることができる。この名簿の中には備後国の小林洵（後の高楠順次郎）、肥後国の東温譲、紀伊国の古河勇、越前国の中臣（梅原）融などの同窓生がいる。

寛のチベット行きは、単なる思いつきではなかった。『世界に於ける佛教徒』第十三章の「佛典翻譯」で理路整然と次のように述べている。「英国の布教に於いて、最も必要なるは佛典の翻なり。……普及せる言語に由りて、翻譯を初むべし。……国語多き中、予は、その第一着は英文に譯するにある。……全世界人口の１０分の１以上に及びなかんずく英国中屈指の強盛なる英米の語なれば、これ最も必要なり。オルコット氏(注 10)の佛教問答の如き、英文を以って、成る故、已に１５、６カ国の文に訳せられたり。かくのごとく、一度仏典も英文に訳せられるときは日ならずして、又諸国の語に訳せられるべし。……」と、釈迦直伝に最も近いチベット語大蔵経を入手して英訳経典を世に出して世界５億仏教徒の結束と世界総会議所の設置など広大な考えをもっていた。又仏教を訳すには梵語と英学の２つに精通すべきであるとも述べている。

１８年頃から寛は宗教雑誌『佛教』、『教學論集』、『日本の教學』などを購読しており、その論文の主なる執筆者（南條文雄、大内青巒、小栗栖香頂、井上円了、島地黙雷、石川舜台など）を見ることができる。寛は当時の宗教界を担う人達に大きく触発され、自分も勉強して、将来は、これらの雑誌に寄稿したいものと考えていたことが伺える。

１９年の寛の宗教観「歎異抄」の抜書きと「改悔文」の一節を解説し、「政府と宗教は身と心の守護」として、六道を通して、「安心、報謝、師徳、法度、初めに安心の中に初に正しく安心を明し、次に領解」と記している。「文類聚抄遊豊録校抄」は、寛の自論を展開して、七高僧（龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞和尚、道綽禅師、善導大師、源信和尚、源空聖人）の教えを客観的に表現している。このことから宗教家としての基礎知識を身に着けていたと考えられるのである。

爾来、目的達成のため周到に語学と訓練に勤しんだ。明治２０年(1887 年)３月３日、寛は本科初年級へ編入となる。普通教校は英学に力を入れていた 一週間の学科授業時間数 29 時間中、英学は 14 時間と、半分の時間を費やしていた。英人ポールドウィン、英人セッパード夫妻、和田義軌、手島春治らの英語教員を雇い教科書は、英語の原書を使っていた。普通教校がいかに英語を重視していたかが伺われる。

寛は、学年度の区切りを利用して明治２０年７月１３日、午後より摂津国島下郡吹田村の光徳寺（直海玄祐）を頼って吹田村を訪問している。８月１日には大阪に行き、お金を落としたこと。８月１１日野畑村の桜井義肇君を訪ね美濃の瀧に遊び桜井宅へ泊まる。９月４日、大阪へ直海元祐君と２人で行く（1 泊 2 日）。このように思い立ったが吉日の如く旅が大好き人間であったのだろう。友人を頼って方々の旅に出掛けることは、まま良くある事であるが、一方、別な見方をすれば、寛にはたいそう友人が多いいという証しでもある。

実はこの時から書き始めた手帳型メモ帳によると同年１２月２７日に普通教校の教官セッパード夫妻に招かれ洋食をご馳走になり喜びの様子が記されている。この時の心境の変化なのか数日後に、自分の名刺を２ページに漢字と英字表記してKawan Noumi としている。一年前はYutaka Noumi としていたのである。またメモ書きには「予カヰケンニ２０里アルクトオモヘハ ７、８リノトキ足イタム １５リトオモヘハ１０里比カラ足イタムハ学問モ同シ １０枚トオモヘハ ７、８枚ヲタイギ 大學林卒業トオモヘハ中学校位ヒ也」と２０歳の自分の気持ちを書き記している。

寛は、明治１９年(1886 年)７月から吉谷覚壽師（一乗院）より「観心覚無抄」、「因明大疏」などの宗教学を学んでいた。『令知会雑誌』に毎号寄稿している吉谷覚壽の論文に目を通すことで、吉谷の目指していた宗教学の方向性が見えてくる。２０年１月より小永井小舟氏より「文章軌範虫記」などを学ぶ。２０年３月より小栗栖香頂師より「侖教」を学んでおり、『教学論集』第４５号の「哲学館開設の旨趣」設立者井上円了著や『教学論集』第５３号の「哲学館講義録」の広告に館外生の制を設ける旨を見て、寛は、２１年より哲学館館外員となり３年間学んでいた。また、２１年より２年間梵･英・蔵を学びながら英学も学んでいた。

寛は、仏教を英文により発信したいと考え、普通教校の同級生４７名を束ねて E.C.S(English Composition Society)即ち「英文会」という組織を立ち上げ、２１年(1888 年)１０月１４日に週刊機関誌『NEW BUDDHIST(新仏教徒)』を創刊し、毎週日曜日に校内で発行した。翌年４月発行の２８号まで続いた。この頃、寛は、『弘法大師一代記』を読み感化を受けたと記している時期でもある。

この「NEW BUDDHIST(新仏教徒)」の表紙にパーリー語で、「NAMO TASSA BHAGAVTO ARAHATO SAMM` ASAMBUDDHASSA.」（翻訳）「彼の世尊・阿羅漢・正等覚者に帰命します。」という冠頭言を表記している。寛は、新仏教徒運動の目的は、「諸君は、仏陀の偉大な愛によって生まれた。全ての衆生と喜びを享受し、真理の樹から因果の果実を摘み取り、モラルの庭園で手ずから美味を味わうために。ECS はそのような新仏教徒の目的を成功させるために組織したのだ。」と記述している。

E.C.S　Purposes（英文会の目的）1. Translation,（.翻訳）2. Correspondence,（文通）3. Magazine or News,（月刊雑誌・ニュース）4. Fonrigne Culturs,（文化・教養）5. College of 1,2,3,and 4,（1,2,3,4 の団体）としている。

考えを表現することで大切なことは、第一に書くこと、第二に話すことである。雄弁さより文章の方が利するところ大である。しゃべる人はその場かぎりである。著述はどこにでも飛んでゆく。」と著述家を目指しての理想を掲げている。これを実践したのが『世界に於ける仏教徒』の自費出版であり、生涯に亘って紀行文や日記を書き続けたのである。

明治２１年１２月、大学林例が設置され、普通教校、大教校は閉校となり、普通教校は文学寮に、大教校は内学院となった。明治２２年(1889 年)１月２８日、寛は文学寮本科第２年甲生へ編入となる。２月１日には第３６号「文学寮在学中豫備金」３円也を納めている。文学寮生は元々禁酒運動を提唱したが、内学院生は、それを嫌った。互いの学生は、気質が違い、食堂を舞台に学内紛争となった。

このような中に、オルコット、ダルマパーラの来日中に、ダルマパーラが京都において病気で倒れた。寛は入院中のダルマパーラを 2 月 25 日から 3 月 5 日まで見舞った。その内容は、手帳記録に英文で次のように表記されている。

H.S.Olcott American Buddhist Dhamapala Hevavitararen India Buddhist. 25to 5th from February to march 22nd . Meiji I he Keep. Mr.D.H public Kyoto Hospital.
アメリカ仏教徒のヘンリー.スティール.オルコット、インド仏教徒ヘバピタラナ・ダルマパーラが来日中に、明治 22 年 2 月 25 日から 3 月 5 日まで、寛は京都の公立病院で、ヘバピタラナ・ダルマパーラを介護した。

寛は、３月５日までの 9 日間の介護中にダルマパーラと仏教談義を行いお互いに触発しあった。その後は、反省会のメンバーの沢井、秦らが交替で見舞った。寛は、学資金が底を突いたため、学業紛争に巻き込まれることを避けるように同年３月１１日から故郷へ帰郷した。帰郷中の日記にも英文での書き物も頻繁に出てくる。オルコット氏のことも記述しているが寛が帰郷中にも京都の病院で滞在していることを案じて、英文で記述したものと思われる。

帰郷している寛宛に級友からいろんな手紙が届いた。５月３日、文学寮生の河野始治、島津正人より書簡。５月７日付け笠原松二良氏から「真宗に能海あり……。」という激励の手紙を貰う。１３日、英文会員の平山より英文書簡。２５日、英文会員の竹下より英文書簡。２９日、西依金次郎より「英文会の消長は必ず貴慮を患はすならん。然るに無異に消光不在候間休憩い下度候」との書簡を受け取り、この書簡をもって、「NEW BUDDHIST」の発刊を休止したものである。5月３０日付け大学林文学寮からの手紙は「当地寄留人として徴兵に応じ当地域の補充員規則によりて、１２月まで当地を去ってはならない。」と通告を受けている。７月１９日付け西依金次郎氏からは「貴君この頃困難の地に隠れ良師を得て仏教の奥義を討究せられ居り由、羨ましき至り……。」７月２７日付け摂津国の上田繁丸氏からは突然の帰郷による真意を知り「貴兄は将来必ず社会に知られる人となりて、以ってまさに西山に衰滅せんとする仏教をして、今日の基督教の如く仏教をして東山に尽力せんとする一人なりと余は常に信ぜり。」と激励している。

帰省中の寛は、６月１日から石見学場(浜田の浄慶寺)において、「佛説観無量寿経」海老原静寿師の集中講義を受講していたので、西依氏の文面にある「良師を得て」を指しているのである。

どうしても大学林高等科を卒業したいと考えを持つ寛は、故郷の檀家一統と「後継住職」となる契約（「学資金募集ニ付訂約書」）を９月４日付けで結び、向こう４年半の学資金の支援（２７０円の確約）を得た。「学資金募集ニ付訂約書」は、寛と浄蓮寺檀家総代と交わした学資金の調達に対する契約書である。「・・・予学問成就ノ節ハ浄蓮寺後継ト成リ佛祖崇敬ヲ始メ檀家布教ヲ本トシ寺内和合シテ子弟ノ教育ヲ尽力シ決シテ他ニ移転等ノ不道徳ナルコト致スマシク盟言如斯候」と、後継住職になることを条件に学資金を認めてもらっている。 この訂約書が後々のチベット行の支障になって来るのである。

学資金のめどが立ち寛は、再び上京した。９月１４日文学寮北寮第６号室に入寮する。同室者は５名で、美濃国の久冨米次郎、播磨国の村上寅吉、筑前国の西原荘十郎、阿波国の平尾一夫であった。

９月１５日の日記では１週間のカリキューラムを書き残している。その中で英国人教師のセッパード氏、ランベート氏などの名前を見ることができる。９月２２日、寛は「河口君と会い『英文会』のこと一寸話す」と『春秋日記』に記している。「NEW BUDDHIST」の継続発行を相談したものと思われる。１０月１３日に「NEW BUDDHIST」２９号、２０日に３０号、２７日に３１号（能海が手掛けた最終号となった）が発行された。寛は年末に上京するため京都での「英文会」の後継者に前田得念と河野始治へ引き継ぎを行った。

このことは、大学林紛争の煽りを受けて、この際、上京して東京の大学で入学しようとする「英文会」のメンバーが、次々と上京していく中で、寛も学資金の目途がつき、年が変われば、寄留拘束が解けるので、自分も上京して、東京の大学で学びたいと考えていた。そうした中で、事前に、引継ぎ

をしたいと考えたものである。

4. 慶応義塾時代

明治２２年(1889 年)には、友人たちが次々と東京の大学で学ぶために上京して行った。寛も郷里の支援を受け学資金の目安もできたため、明治２２年１２月１７日に友人の西依一六、松島静寿の３人で上京した。能海と松島は一足先に上京していた山中逸、古河勇と合流して芝区三田四国町へ 4 名で転宿した。東京に出て慶応義塾に入学するに際しては日本橋小網町４丁目７番地の豊島勝太郎氏が請人（保証人）となった。数年後、父謙信に宛てた「懺悔(ざんげ)の親書」(注 11) で父に丁寧に詫びを入れているのでことの経緯を知ることができる。

明治２３年(1890 年)１月１７日付け父謙信からの手紙によると「慶応義塾への転学は世評として浄蓮寺住職としては宗学に志しなきは畢竟、檀家教導の志しなき証なり等檀家総代始め世評不聴。住職たる証が必要……」と、学資金を拠出してくれた檀家からの突き上げで、父の苦しい立場を伝えている。父の書簡を受けて寛は、自らを釈尊の弟子と位置づけ、大無量寿経下巻の「勤行求道徳」、「行道進徳」、「不識道徳」、「不達於道徳」、「教語道法」、「不信道徳」等道法に背くな、道法を守れと自戒している。また、小林洵の言葉を借りて 「信ヲ先ニシテ後ニ余暇ヲ以テ真理ヲ研究スベシ」 小生は信を先にして学問を第二になすと心に決めているからご安心くださいと述べている。即ち「信後の行」ということである。

明治２３年の『春秋日記』第四号によると、１月１９日、午後 1 時から築地で松山氏の日本仏教青年会設立と普通教校出身者が参加して「経緯会」の母体が産声を上げた。此の時の参加者は、今村、古河、弓削、吉野、藤本、富山、橘、小原、良甫、吉住、菊池、能海等であった。古河勇が中心的に尽力した。１月２５日、寛は慶應義塾に近い三田豊岡町の龍源寺（越渓宗逸）へ転居した。１月２８日の記述では「英文を作り主義を述せんとす」と記し、翌２９日の項には「英文を以て主義とすべし」と実践を開始して「Wisdom ＆ Mercy」(『智恵と慈悲』) という英文機関誌№.１を草稿（毎月発行）している。１月３０日～３１日の『春秋日記』の記述によると「６時、この予は独り段々考え実業も盛んになるに、又必要なるに金のみ使うて、長々勉強せしめて末へ望みなきかな。一層哲学館に入り来年は卒業せしめ、よければ福沢の大学（慶応義塾）に入りやめれば帰る。又哲学の方なれば金安く仏友も出来種々よし。福塾(慶応義塾)も大学に入る目的なりは。何は予に望みなし。予はこれに入るは、只一寸位置のみ得たきなり。年限も、およそ５～６年は必定なれば……井上（哲学館）に行けば兄にはよし。内へも。但し、哲館を悪く言うか。」翌３１日には、「今朝４時過ぎより眠られず、只将来の方針のみ考え、一考す。案ずるは、決め、哲館に入るべからず。やはり福の大学を卒業すべし。文学寮に対しても、又将来の目的についても父母有志へ対しても２６年には充分卒業すべし。何も小生に案じて哲館に入る考え出せしや。今後４年は郷より資本出す約束、後２年は本山に仰ぐのみ勤めよや、つとめよや。その為には予科にもよろしく。正科に入るべし。来月は其決心。」と記述している。「哲学館か、福沢の大学か」と、父の手紙を頭に持ちながら迷ったあげく慶応義塾に決している。しかし、慶応義塾は５～６年は必定と問題点（檀家との約束の４年間をオーバーすること）を挙げている。

２月１日漸く慶応義塾で試験を受け、３日には「豫科二番の一」に入り授業を開始した。「…福沢塾の后ヨリ富士ヲハルカニ望ミテ実ニ白雪在派人彼レノ如ク秀デザル可ラス……」と環境を記している。

２月１０日の項では「予学成就ノ上ハ佛教大学ヲハ設立シ諸宗合同シテ南條君ヲハ校長ニ命シ文学科ヲオク撰科ヲヲキテ佛学専門トナス生徒ハ僧俗ヲ撰バス資本ハ本山及ビ仏徒トス」と将来展望も描いていた。

２月１９日「エドウヰン・アーノルド令嬢(注 12)ト共ニ福沢先生等数名来……。」、午後３時より演舌堂で化学の授業を受ける。この日に古河勇が寛の下宿先に転入して来た。２０日「クライブ伝１０から音読ロイド」。２１日「クライブ伝１０より音読ウヰリアム氏」。２４日「物理クライブ會話（今日はWeston(注 13)英国人ニシテ種々話タリキ）……」。この日に勤惰表が出る。２５日「物理クライブ音読（今日ハ Francis と云宣教師ニシテ首ニ金ノ十字ヲカケ教授セリ）……」。この日は、英作でＥ・アーノルドより「亜細亜の宝珠」について考える授業も受けた。２６日「物理クライブ音読（ウエストン君）……」。２８日「物理クライブ音読（ウエストン新聞ヲモチ来リ追々ニハ日本モ英字新聞ハ盛ニナルコトナレハ読ミナルベシトテ良文ナリトテ英国ノダービシャー縣ノ新聞ヲモチ来リヨマセシコトヲ語々ハナス）……」。これらを総合して考えると、福沢氏は慶応義塾に外国の宣教師を招き授業を行わせていたことが判るのである。W・ウエストン（英国人）及びＥ・アーノルド（英国人）については、「英文機関誌（月刊）」（「智恵と慈悲」）で詳細を述べている。「Wisdom ＆ Mercy」No. 2 発行。

寛は、慶応義塾において福沢諭吉から大学を設立した本質について直接薫陶を得た。教官W・ウエストンにはクライブ伝を学び授業中に世界の共通語としての英語の重要性を再認識させられている様子が『春秋日記』に記述している。Ｅ・アーノルド卿は、麻布赤坂今井町４１番地に住まいしており、個人的に親交を深め寛の漢詩を英訳して添削を仰ぎ４箇所に添削を受け、アーノルドからは３月３０日に日本の宗教に関する感想を述べた英詩文（『世界に於ける佛教徒』に記載されている）を頂戴している。アーノルドから戴いたノート用紙にペンで書いた英文の詩の裏に寛は次のように書いている。

「英国大詩人アーノルド伯日本渡来東京滞在ノ節予も
在京中ニテ飯倉之寓居ヲ訪ヒ数語之後天下和順之経文
英訳ヲ示シ此詩を直ニ作リ予ニ与ヘラルゝ
モノナリ伯ノ直筆ニテ有難き物なり」能海寛誌

と、記載されており、戴いたものは「直筆にて有難き物なり」と裏側に添え書きをして、弟の斉入に譲り渡していた。また、Ａ・ロイドからは英文を学んだ。これらを総合して見ると寛が従来考えていた世界に共通する英語をマスターすることと、外国人と直接生きた英会話を学ぼうとした姿勢が読み取れるのである。

２月１９日から古河勇と共同の自炊生活が始まり、紀伊国出身の古河を「木」、石見国出身の能海を「石」と表し二人は、「木石書院」と名付け、新仏教徒運動を「経緯会」と位置づけ、互いに国内外で活動することを約した。

３月３１日、「Wisdom ＆ Mercy」No. 3 を発行。慶應義塾 4 級生 21 名（会員：平山、竹下、綿谷、垣山、清谷、梅田、笠原、橘、宮、川口、堀、植田、荒木、後藤、佐治、吉田、加藤、島津、久富、橋本、能海）で東京版の英文会を立ち上げた。

４月１６日、「Wisdom ＆ Mercy」No. 4 を発行。中西牛郎著「宗教革命論」を論説。「二河白道の比喩」の英訳を取り組みなどを掲載。

4 月 22 日の歌が記載されている「梅古木集」によると、この頃の寛は、東京に上京して 5 ヶ月目で慶応義塾に在籍しており、2 月には、慶応義塾でエドウイン・アーノルド卿の講演を拝聴し、授業も受けていた。3 月（1 ヶ月前）にエドウイン・アーノルド卿の自宅を日曜日、毎に 2 回訪問している。1 回目は英文の添削指導を受け、2 回目はアーノルド卿から自作の英詩をプレゼントされている。実は、2 回目の訪問のときには先客があり、待ち時間中に令嬢と日本の桜の花について親しく会話を交わした事があった。自宅のスケッチも残されている。

梅三月 あやめは五月 さひて年とる うめの花
梅と桜を 両手にもちて それか梅やそ 桜や舞し

寛が『春秋ノ日記』2月末日の日記の巻末に歌を三首詠んで水墨絵と共に記録している。これらの一連の関係を考えると、英国の詩人アーノルド卿との出会いが「梅古木集」を作らせるキッカケとなったものと考えられる。1ヵ月後に詠まれた梅と桜の歌が有るが、これも令嬢との会話した桜のことで、何らかの影響を受けたものと思われる。

５月１日、「Wisdom ＆ Mercy」№.5を発行する。仏典翻訳を指導する学校を造りたいと考える。

６月１日、桑門至道の子息桑門典と三田寺町の西蓮寺（白山兼致）へ転宿する。家主の白山兼致と子安善義は同級生で、白山宅において三人が知り合ったのがきっかけで三人とも慶應義塾で知己となり、能海と三伽会を作り、将来にわたって親友関係がつづいた。同年１０月より、子安は南條博士の下で食客となり、梵学を研究していた。２４年１月から能海は、哲学館在学中に本郷町から、白山は三田町から南條博士の宅へ通いマクドネルの文典や大経の梵本を数年掛けて共に読み［大経」読了時に記念の写真を撮り、能海の帰郷に合わせて、三枚にそれぞれが自著して分け合った。この時が、明治２６年７月７日である。

２３年７月には、「東北紀行」を行い、親鸞聖人が浄土真宗を開いた、常陸国稲田郷を訪れた。この時は、筑波山にも登山して、山頂の小体宮で「筑波山社図」の木版刷りを入手している。

この東北旅行中に、「満もぼろし」の記述に詐欺のように期している。

「棒地（ふるさとの傍示峠のこと）の瀧に石峯山、石峯堂を造り（高き処に）上を堰きて湖に、両側に瀧、茶所を置き、茶位いは作る。橋を茄し、本尊は、ダルマパラの名を（南條）文雄の額、（Ｅ・）アーノルドの書、名所の図や名物。旧１月 15 日を年の命日とし参詣を開き英文を研し囲りをとり上げ段や橋を架く。山を石峯山と称す。」※ダルマパーラは、英文で「護法」と訳せる。「石峯堂にて独学、布教、学校積法、西依を呼び、詩、歌、文、画、好きずきを為へ、楽しく村の名所を記録発刊し、人に与え天頂山石峯堂がよし、浄蓮寺には石峯館を立て、夏休みの如きは、仏書生を誘い佛を教え、又生徒を募り共に学び寺と堂二方に校を置き、普（通学)、佛学を為す。安く下宿す。志は友遠方より来る。又楽しからすや、己む知らざるを門を見ず人を知らざるをウイムの志之を発布して友を求む。名物に御寺寿し（御ばばの手際を顕す。ぜんまい、しいたけ、かんぴょう、みょうが、わさび、山椒等、波佐生そば、生うどん、他には、□生正なるはなし）もち（日本もち）切附を作るか、樽床の瀧の図や歌を広くす。」常日頃考えている郷里を思う気持ちがこの文脈で読み取れる。

１０月１４日、「Wisdom ＆ Mercy」Ｉを発行。創刊３年とＥＣＳ（「英文会」）の将来を記述する。

１０月２５日、能海ら英文会のメンバーが中心となり、新仏教徒運動を推進するため、慶應義塾で「土曜会」を組織した。会員数約 30 名。各宗の僧侶が集まり、運動、スピーチ、作文を行った。

１１月５日には、「英語夜學会」に入会している。入会金壱円、授業料壱円、校費拾銭を支払って英語学習を精力的に行っていた。

１１月１４日、「Wisdom ＆ Mercy」Ⅱ。１２月１４日、「Wisdom ＆ Mercy」Ⅲを発行した。

能海の所有していた慶応義塾での教科書は、ウィリアム・スウィントン著『五人目の読者』、ジョージ・ギッシング著『蜘蛛の巣の家』、H.A.イェシュケ著『蔵英辞典』、サミュエル・ジョンソン著『アビシニアの皇太子の履歴』、ジョン・スチュアート・ミル著『自由に関して』、『学校イングランドの歴史』、『ガリニャーニの新しいパリ・ガイド』、『衛生的な生理学』、『初歩の文法書』、ロスコー・エンフィールド著「基本の化学の授業、無機で有機」、Ormsdy.M.ミッチェル著『人気の天文学』ニューヨーク・M7 年刊海軍蔵書の払下げ品を入手、クエッケンボス著『英語文法書』（作文修辞書）など。これらは全て洋書であり、普通教校で培った寛の英語力が忍ばれる。

明治１９年１０月改正の『慶応義塾社中之約束』によると正科（学業）を「豫科」と「本科」に分かつ。豫科終わりて後本科に入らしむ。「正科」卒業まで凡そ５ケ年とし、１年を３学期になし、１学期（１月１１日～４月２５日)、２学期（５月１日～７月３１日)、３学期（９月１１日～１２月２５

日）とす。寛は１２月２５日の学業の区切りを以て慶応義塾を中途退学したのである。また、教員の職務の項に、「毎期の末大試験を為し其期間中の勤惰表を編成す。」とある。

５か年の修業期間が、慶応義塾を退学して哲学館へ転学する要因となり、最終的には、門信徒からの強い要請を受けた形で、父謙信の「檀家にも住職たる証が必要」との手紙の内容を受け、広島教校時代にお世話になった桑門至道師(注14)からも哲学館へ転学するようアドバイスの手紙により最終決断したものと思われる。

5. 哲学館時代

能海寛の『春秋日記』(注 15)明治２４年(1891 年)１月１日の記述を見ると、「本年は純潔タレ、品行方正タレ、道徳人ヲ感服セシムルニ至レ、学問学理大進栄タレ、故ニ勉強怠ル勿レ、精神正確タレ、気性活発タレ、疾病近ヨルナカレ、社界者タレ、高僧タレ、一大聖人タレ、文章家タレ、文学家タレ、記シテ歳暮ノ良果ヲ期ス。」と、このように、哲学館に転学する意気込みが感じとられると共に、自分の進むべき方向が定まってきたことを暗に記述している。寛の生涯を通しての記録物を目のあたりにし、彼の文学性に富んだ文章に触れるとき、不断の努力があったことが伺えるのである。

チベット行きを目指す寛は本分とする東洋文化史を学ぶため哲学館（現在の東洋大学）へ明治２４年１月１５日に月謝を納め、１６日から転入学し３年間学んだ。哲学館では井上圓了館主に見込まれ生涯に亘って親交を深めていった。

寛の筆記している『講義口述録』（明治２４年～２６年）には「起信論達意」、「馬氏思想学」、「開化及幸福關係論」、「應用心理學」（明治２５年９月２１日）、「忠孝活論」、「教育宗教関係論」、「妖怪學」、「実験教」など井上圓了博士の講義を記述したものがあり、特に『妖怪學』（明治２６年４～５月）の口述では「妖怪ハ学科ナルカ何科ニ属スルカ学術ノ原理ヲ応用シテ未明ヲ説明スルモノユヘ学問之チツ序組織ヲ要ス之ニ就テハ従来一ケノ学科タラザルユエ他日立派ノモノナルベシ。」とあり、妖怪学が将来は確立することを念願していたと思える。寛は井上博士から民俗学的な考え方や影響を受け中国に渡っても旅行日記には民俗学的な記述が多いいのもそのためと思える。『春秋日記』第十六号の３月１１日「雪ニ寸斗リフル麹町行ヲヤメ欠席セリ出時風邪　昨日、井上圓了の巡回（北海道）ノ話シアリ……」。４月１８日には、井上圓了曰く「学問ハ即チ品位高尚ニナスナリ」と講義の様子など日記に度々井上博士の名前が出てくる。

寛にも２０歳の青春期に、淡い恋心を抱く心の葛藤があったようだ。義父の謙信師の連れ子である末子は、寛にとっては義理の妹であった。エッセイ風に、ダジャレて綴った『焼野貫八略伝』を読むと、寛の心境が伝わってくるのである。義妹の末子を愛おしく感じていたことは、後に、末子の従妹の佐々木静子と見合いをして一目ぼれしてしまうことに繋がっている。

『春秋日記（第九号)』によると、明治２４年(1891 年)１月２５日の日記に「斉入より書面受く、学問方針のことあり。あわれむべし、妹みの里の姉おすえ（末子）去る１３日死去せられ候。嗚呼なんとなんとかなしくあわれなきものぞ。南無阿弥陀仏浪阿弥陀仏。この報のかなしみいわんかたなし、いかなければこそ、かくはかなきものぞ。はかなきものぞ言語のべつくす能ず……」突然の悲報に驚嘆している内容である。又、最愛の妹を無くした、心の葛藤との戦いの様を半年後に次のように詠んでいる。

やがて死ぬ　景色は見えぬ　蝉の声
無き人の　小袖を今や　土用ぼし
夏痩と　人に答えて　涙かな

ふけてまてども来ぬ人のおとづるものは年ばかり
数ふるゆびのねつなきつわしやてらされて居るはいな

この歌からも寛の心情が図り知れるのである。

同年７月２２日から夏の休暇を利用して「東京西南紀行」（南房総、身延山、富士山）を行い、南房総では日蓮上人の生誕地、身延山は日蓮宗聖地、富士山へ単身登山を行い、山頂で野営して尺八を吹いた様子を次の和歌を詠んでいる。そして、八王子、朝霞を経て８月１８日に帰宅している。

富士の峰に　去りなき月も　見る人の
ふく笛の音も　いまは絶へなる

富士山登頂記念に「富士山頂八峰内院関連見図」の木版刷りを買い求めている。富士山から下山すると、それまでの悲しみに決別し、この旅行中にチベット行きを模索し決意したものと思える。

明治２４年(1891 年)３月２日付け父謙信からの送金された手紙の余白に寛は「この書面仏説也頂拝敬礼す」と受領後に書き込み素直な気持ちを表現している。哲学館に転学したことを特別咎(とが)めなかった父に内心安堵と感謝の心が素直に表されている。兄法言からの手紙も同封され「慶応義塾転学を惜しみつつも哲学館は是非卒業を……」と伝えている。

７月１日には哲学館「普通科」の聴講を修了した。

同年９月２日の日記に、先月１６日、「予が父法幢(ほうどう)師１７回忌祥月命日にて実に大切の忌日精進に当日を守るべき処心に思うも如何にせん旅行の途次にあり不得止請日に送光することを得ざりしは実に遺憾の至り。由って本日、漸くに忌日として朝大経上巻、午後、同下巻を音読す」と宗教家として固辞するものを抱いている。

１０月６日には哲学館内に「哲學研究會」が設立され寛は、第一期会員として入会している様子が「證票」第１５０號により確認できる。

明治 25 年(1892 年)3 月 18 日以降、寛は、英文会の発展を図る考えで、来る 4 月８日を以て 「新仏教徒」、『英文雑誌』が誕生できるよう宣教会、文学寮、内学院大学寮、高中、尋中、南條文雄、井上円了、友人などへ書簡を送付・面談して働きかけていた。友人の白山謙致、桑門環、梅原融、大久保良俊、菅学應、弓削俊澄、吉野精順らに呼びかけて西蓮寺（白山謙致）で準備会を開き、４月８日に、慶應義塾で「釈尊降誕会」を開催した。元々、寛が慶應義塾で「新仏教徒」運動で周辺を触発して、２３年１０月２３日に「土曜会」を結成させたものを更に発展させたものであった。

７月１日には「高等下級」の聴講を修了。８月には夏期休暇を利用して「東京南島紀行」（8／3~8／26）で伊豆七島めぐりを行った。

明治２６年(1893 年)２月４日には學話を聴講し『純正哲學自解』などを著述している。

７月７日には「高等上級」の聴講を修了して、卒業記念写真を小石川植物園において井上館主や教官、同窓生の総勢５２名で写真に納まっている。

７月２１日、帰国に先立ち、鎌倉（東部会場）と二見（西部会場）で開催される、日本仏教青年会に立ち寄り、それぞれの会場で大内青巒氏の前座で「西蔵探検の必要」を発表し、チベット行きを発表し支援を要請した。後日、大内青巒氏から日本仏教青年会からの礼状が書簡に同封されてきた。

哲学館館外員の時から通算すると６年間にわたって哲学館で学んだこととなる。寛の「予と西蔵」（明治３０年記録）によると、「哲学館で人類学を学んだことがチベット探検へと興味を増長させた」と記している。哲学館で学んだ人類学者の坪井正五郎氏の授業を受け感化されたのである。

6. チベット探検の具現化を目指す

明治 15 年 2 月、専光寺に赴き法務の 1 席から 13 席を聴講する説教要旨の中に「無上富士山は 1200 丈、印度のヒマラヤ山は 2830 丈、西蔵国の須弥山(カイラス)八万由旬(14Km)・・・」と『時教要授』に記載している。情報の乏しい時代に、チベット周辺の知識を吸収していた。その後、浄蓮寺に帰ってから『大唐西域記』を読み、ますますアジア西域に関心を持っていった。

２０歳頃のエッセイ「焼野貫八氏略伝」は、ダジャレ風に記載しているが、最後は、マケイシュラという印度の婆羅門の本尊（造物神）で締めくくっている。２０歳頃の記述として見ると既に梵語を学んでおり仏教に関する基礎知識がしっかりしていることが読み取れるエッセイである。

能海寛は明治２６年(1893 年)１１月に哲学書院から『世界に於ける佛教徒』(注 16)を自費出版し、内務省の版権登録を取得した。発行部数は 1,000 冊で、『仏教』など 3 誌へ雑誌広告をなし、哲学書院を通して、全国の主要都市において、委託販売がなされた。本誌には大内青巒氏が序文を寄稿している。大内氏は、この序文の中で、能海が提唱する「新仏教徒」運動を「世界海」（味の違う河の水であっても海に入れば一味となる）に例え、目的は一つであると新仏教徒運動を称えている。

この『世界に於ける仏教徒』の著書名が、当初は、『新仏教徒』と考えていたが、古河勇ら友人の助言により『世界に於ける仏教徒』に決まった経緯を述べている。このことは大内氏が同じ仏教徒として寛の論考に共感する内容があったからであろう。

『大谷派本願寺事情聞書』は、明治初年から 10 数年間の大谷派本山の宗会議の顛末が議事録の形で記されている。能海は、これらの内容を熟知した上で本山政論を認め改革論を展開しているのである。後に出てくる「住職検査」というのは、『大谷派本願寺事情聞書』によると、「寳会株主募集段取ノ如キハ寳会開設ハ外教防禦ニ外ナラサレハ此事ヲ実行スルニハ僧風釐正教学策進トノ名義ヲ設ケ各地方ニ派遣シ卒爾ニモ住職分僧侶ノ検査ヲ挙行シ之ヲ恐嚇セシニ末寺ハ検査ノ壓制ヲ恐レ不承不承ニ株金加入ヲ引受然ルモ今回ノ検査ハ教学策進ハ表面ニシテ其事実会ニ加入セサル者ハ外教防禦ニ精神ナキ者ト誣ヒ株金加入ヲ促スノ策・・・」明治十三年頃に始められた施策であったと考えられるのである。

この『大谷派本願寺事情聞書』は、『能海寛著作集』第八巻（一部分掲載）に登場する一連の本山改革論争を知る上では必要不可欠な記録書である。

寛は、「旧佛教破壊的文字」の文中において、『世界に於ける佛教徒』の「第６章道徳上の佛教」並びに「第１７章本山政論（理論の方)」を特に重要視していた様子や「固ヨリ、一宗、一派ニ就テ論スルニ非ス」と数年後に述べている。また、「第１３章巡礼」で、聖地の巡礼の必要を述べ、自らは、伝教大師の高徳を慕い比叡山に参詣し、日蓮上人の遺徳を慕い身延山に登り、板敷山を越え親鸞聖人の旧蹟、真宗の開の地である稲田の草庵に詣で高僧の遺徳を得るなど正に聖地巡礼を実地追想済みである。

慶応義塾、哲学館在学中に「東北紀行」（２３年７月)、「富士山単身登山」（２４年 8 月)、「伊豆七島めぐり」（２５年８月）などチベット行きを想定しながらの訓練と体験を積んだ。寛は、富士山登山以来、精力的に、西蔵国の調査を再開した。また、明治２４年(1891 年)から２６年(1893 年)までの哲学館の時代は、南條博士の私宅において学外勉強として梵語学に着手していた。

「予と西蔵」(明治３０年５月９日付)に「西蔵入蔵目的ハ仏教経典ノ原本ヲ得ルタメ」、「原本考究、歴史ノ探索ハ実地ニスベキデ、トクニ釈尊正伝アルイハ仏説ヲ明ラカニスルタメニハ仏教ガ滅ンダ印度ヨリモ、ムシロ西蔵ニ行クベキデアル。」という。「印度ニ赴イテイル仏教研究者ノホトンドハ入蔵ノ志シヲモッテイルガ、成功シタ人ガイナイ。自分ハコレト違ツテ四川省ノ道カラ入蔵ヲ試ミルノダ。」（仏教が伝播した逆方向からたどることの意義を説く。)」。「欧米ノ学者ハスデニ西蔵仏教ヲ盛ンニ研究シテイルケレドモ日本ノ仏教者コソ、コノ方面ノ研究ニ取リ組ムベキデ、早急ニ西蔵探検ヲシナケ

レバナラナイ」。「国際紛争ノ中デ西蔵ハ危急ノ渦中ニアリ、コレヲ救済スベキハ同ジ仏教徒ノ日本人ダ」と説く。「英・露・仏・支ガ衝突スレバ西蔵ハ滅亡シ、千年ノ伝統ヲモツ文化モ廃レルダロウ。人類学見地カラ人種、言語、風俗、政体ナドヲ研究スルタメニ西蔵ニ行カナケレバナラナイ」と述べている。明治２０年以来、時代の機運は盛り上がり、そうした風潮に影響され、自分もチベット探検を決心した。と記述している。

探検家の立場から世界の地理学上から最暗地帯のアフリカ中央部アジアの中央部であったが、アフリカは探検されたので、残る中央アジアのチベットこそ探検されなければならないと述べている。

寛は、『世界に於ける仏教徒』の発行後に表紙の見開きに裏書を次のようにしている。

「名誉の遠く及ぶは光明也、信用あり尊敬せらはは智徳也、此書、将来佛教徒の予言者たるを得ば幸いなり。」と書き込んでいる。宗教革命の時至れり、大乗経、宗教判釈、道理判釈、佛教の三大変遷（奈良・京都・東京）、梵学の将来、西蔵国探検萬紀、因果争論、親鸞伝篇、佛教史発行、大乗非仏説論、肉食論、仏弟子古今の事跡、開教局欧文新誌、大谷派本願寺問題、根本的破壊文字、世界主義、新説教論。これらを新規に追加する考えで、続編を帰国後に出版する考えであったと思われる。

明治２７年(1894 年)１月３日、寛は人生の岐路に立ち郷里の寺で正月を過ごした。「口代（くちがわり）」という遺書にも代わる和綴じ本にチベット探検の心情を１４項目にわたり切々と記した。表紙の裏には「明治２７年２月２７日　剪髪其毛ヲハ後ノ為メニ紙ニツツミ箱ニ入レ置予無事帰国セバ吉祥若シ業ノ為ニ死セハ遺体ト思ヒ御葬送ヲ……」（原文）とある。決死の覚悟であったことが伺える。

明治２７年夏に京都へ上京して、東本願寺の桑門至道氏を通じて本山のチベット派遣僧の企画を上申していたが、日清戦争の勃発により、止む無く断念して帰郷した。

チベット探検の夢を断ち切れず故郷にあっては法務の傍ら地域の青年集団を集めて「波佐倶楽部」(注17)を創立させ、自らは庶務を掌り地域の学習活動を根付かせた。中世・近世の郷土史年表『私史考中世年表』(能海寛著)の作成や倹約貯金を奨励し、読みにくくなった寺の過去帳の書き換え作業や浄蓮寺系図の整備など。特に、『輿地誌略』を教材にして村内地域を組毎に割り振り世界各国の研究と発表を、させていたことは、正に国際化の先駆け、そのものであった。友人にも海外に羽ばたこうと触発したのである。そして、自らはチベットへ、触発された友人の佐竹旻氏、稲垣氏はアメリカへ、弟の春谷登はハワイの東本願寺別院へ渡航して行ったのである。

波佐倶楽部の会員は、中村文作、佐竹要助、古和文一、岡本重昌、三浦文龍、佐々岡延蔵、三浦廣三郎、石田常四郎、春谷保次、佐田謙三、栗栖駒三郎、竹田千代太、藤本豊太郎、澄川文三郎、肥塚柳吉、岡田利喜太、小森兵市、小坂熊五郎、山田平太郎、中田忠左エ門、岡田為吉、酒井十平、青木茂吉、能海国右エ門、森岡庄太郎、西林清一、岡本虎太郎、小林半兵衛、酒井早太、小笠原秀兵衛、小林久太郎、能海寛、中田竹治、水野斎入、能海皆乗の 35 名である。

能海寛によって国際化学習の推進で、波佐は、欧羅巴(佐竹氏英国、三浦氏獨逸、小竹氏伊太利、石田氏土甘古、古和氏露西亜、岡本氏佛国、佐田氏合衆国)。横谷は、亜弗利加、鍋瀧は、亜弗利加内地。漆谷は、西比利亜。落谷は、印度。後山は、満州。長田は、南米亜米利加。柚根は、蒙古。徳田は、支那。深笹は、南洋。小国は、日本。田ノ原は、朝鮮。この様に、各人、各地域を割り振って世界各国の学習をさせていたのである。

「報恩講巡回日記」によると、明治 28 年 10 月 6 日から広島県山県郡山廻村高野の法務に廻っている様子が記されている。特に興味を持つものに、「タタラ」についての記述があることである。「大谷は戸数 14、5 戸。場所 25 戸あり、政府の直轄にして、官より月給取り着てなす。この所にて、金穴（かんな）を洗い、直ちに鑪にて吹く。便利の地也。鍛冶屋は無し。金穴 5 年ぶり位に洗う。タタラ吹かさるゆえ也。月に 4、5 回吹くという。」と聞き書きしている。年間 50 回位操業している勘定になる。

このことは、タタラ操業で技術者の移動が県境を越えて交流していたことが判るし、門信徒の法務

範囲が宏大であって、年一回の報恩講回りも大事な仕事であった。

7. 高島での僻地教育の試み

明治２３年『春秋日記』第２４号の２月１日で、「雪積ルコトハルカニ壱尺五寸余　能海寛　法名ヲ法流ト号ス　尓レトモ洞達叉ハ神通　航雲トモ称セントス字ハ石峰、石岳、清陽、等ト称シ寛ヲハ尭寛ト改メントス　寛、尭寛、法流、神通、洞達、航雲、航天、天頂山、石峰、石岳、清陽、心月堂主、自脩社、ノ主タラントス　雷音モ予ノ名……」これに記述しているように雑誌『佛教』第百貳拾八號（明治３０年７月１５日）では、「西蔵國所傳釈尊入滅考異説」、及び同誌第百三拾五號（明治３１年２月５日）では「苦楽逆諫」と、それぞれ「天頂山」のペンネームで寄稿している。

明治２７年１月７日付け子安善義氏からの手紙で「留蔵２年……西蔵行きのご都合如何深く計等を運び大成を期したまへ急行は顛躓の恐れありと知りたまへ」と激励している。２月１０日付け子安氏からは「１月２０日南條宅から帰山した旨の報告と、寛の西蔵探検の大目的のためには充分なる勉学をして多少の延日は終生の大事業のために必要」と述べている。また、４月８日付け三隅の岩本普満師からは「急がば回れの古諺を容して、住職補任を望むならば速やかに住職に任じて後代理を命じ、ご自由に遊歴を企て……」とアドバイスをしている。

明治２８年(1895 年)５月２日には本山へ整理献金をして寛は浄蓮寺餘間（院家）となり、父謙信を補佐して副住職を務める。同年７月１２日に郷里を発って島根県益田市沖の離島・高島に渡り「寺子屋」を開いた。寛の理論は、僧侶は全て教壇へ立てと、「教えることに依って、教える側が磨かれる。」と論文でも述べている寛自身の理念の実践であった。高島へ渡るとき島民への手土産として、お酒２升と子供たちへはお菓子５個ずつを持参したと記している。

石見潟　千浦に出る　漁火を　みはたしつくす　高島の人
石見潟　名も高島の　島人は　地方ながめて　日を送る
うらうらに　夜な夜な出る　漁火を　見て夜をふかす　島人や
石見潟　あちらこちらを　見わたせば　どこへ行くやら　帆かけ舟
石見潟　名も高島の　島かげに　磯うつ浪に　心くだきて
日の本の　すへはなくとも　君か民　安く月日を　送る島人
ありがたや　月はいづくも　照らすなり　高島人も　同じ詠めを

これら７首の和歌を７月２４日に詠んでいる。また別の手帳には次の３首の和歌を詠んでいる。

石見潟　そのうらうらの　漁火ぞ　見はてもつきぬ　高島の里
大君の　めぐみいたらぬ　里やある　安くそくらす　島浦の民
高島や　ちりなき風に　雲はれて　清き月をぞ　ながめらるなり

日中は子供たちに体操なども教え、夜は地区民に説教をし、島民と交流した。このことは、島根県における僻地離島教育の先駆けであった。次の記録は能海寛の高島での観察記録の一部である。

七名所　七寄

①　ヘソノ下タ　②ほとけ岩　③千畳シキ　④姫落し　⑤ヌウチノセ　⑥明神　⑦？

高嶋之七驚

1　全島周囲断崖絶壁港湾濱皆無漁舟碇泊所ナキコト
2　家屋廣且ツ良ニテ濱浦的臭気ナキコト
3　漁業三分ニシテ農業七分ナルコト
4　元禄時代米山氏高嶋傳歌記存傳セシコト
5　人情風俗言語殆ント大差ナキコト
6　時々海馬上陸ノ日ブリリヲナスコト
7　貧富生活言語風俗ハ本土ト大差ナキニ地方（じかた）ノ人々ヨリ「島ノ者　島ノ者」トノヒンセキ軽ベツセラルルコト

雑驚七寄

1　水場へ（二丁）、舟置キ場へ（八丁）、神社へ（五丁）、海へモ（一丁）、へ遠キコト
2　きゅうり、ナス、其他野サイ、イモ、きび、アワ、ボーフラ、ムギ、別シテ多作リ、ヨク出来ルコト
3　桑、楮、アリテ養蚕ヲナシ多キハ原低一牧モ飼ウモノアルコト
4　ハマヤバノ木ウスビター、タチコードー、ホノ木アリ大松風ニカレシヤカキノ葉変成木ノコト
5　寄島居リ叉一度猪海ヲ渡リ島ニ来リ島人手モノヲモチオヒタルコトアリ叉子ズミ多キコトモアリヘビナドゴミノ大流レニ乗リ島ニ渡着スルコト
6　材木ナド家具ナド流レテ島人ヒロウコトアルコト
7　陸地大水ノトキ水ノミ□ノ上ヲ流レテ島ノ方へ向テ流レ来タルコト一キワタチテ見ヘルコト

８．東京修学時代

明治２９年(1896 年)１月１１日付け南條博士からの手紙で寛に「子安善義氏ハ３月マデニ東上梵学専門ニ研究シ筈ニテ小生方ニ同居シ約束ニ御座候。貴氏モ同様ニ梵学専門生ニ相成リ十分共ニ研究ニ成候」と子安氏と寛の二名を南條博士は寄留させたい意向である。文面では、「小生本山ヨリ受取候手当テノ内ニテ毎月 10 円宛相渡シ其内ヨリ食料３円ニテ相賄セテヤト存候。貴氏モ同居ナラバ右食料引去リ七円宛ハ御渡シテ・・・。」梵語辞書編纂の大事業を南條博士が取り掛かっていることが記されている。先進学院へ通学中の白山謙致氏も少しは手伝ってくれると書き添えてある。

南條宅へ住み込み方の依頼と西蔵行きの予備にも梵学の勉強をと上京を促す内容であった。この書簡を受けて、３月１日、寛は再び上京して、恩師の南條文雄博士宅へ寄留し、梵語とチベット語を学ぶ傍ら明治３０年４月１日からは、麹町牛河町の宮嶋大八氏の「私立支那語学校」(注 18)の豫科で中国語を学んだ。

明治２９年５月７日付けで、本山渥美契縁執事宛てに、西蔵国仏教探検の任命の「嘆願書」を提出し保護を訴えている。添付書類の「入蔵予定」によると、

第１　方法　先ず清国に渡り凡そ１ケ年滞在し西蔵に関する参考書を求め、叉入蔵の手順を正し、同伴者を求め喇嘛僧と成り、商隊に混して、進蔵す準備致す目算に御座候。
第２　順路　先ず清国北京に着し、凡そ１ケ年の後、四川省に入り、夫より打箭爐、察木多等を通過して前蔵、後蔵の首府に到着する予定の段に御座候。
第３　年限　凡そ往復及び滞蔵合計５年の予定に御座候。
第４　目的　地理、国体、仏教、言語、経典、仏具等の研究を主眼に致し居り候。

第５　入費　渡清１００円、在清１５０円、参考書１００円、入蔵１００円、帰途１５０円、合計６００円。

と綿密な計画を知ることができる。

この頃の本山は、渥美派と改革派の間で、改革論で大揺れの時であった。改革派は、京都白川村に「教界時言社」を設立して 10 月 30 日に『教界時言』創刊号を発刊した。この改革派は、白川派と称されていた。12 月 29 日に渥美契縁氏は執事を失脚したのである。そして、大学改善構想を提唱し、海外傳教を推進する石川舜台氏が復権したのである。石川氏の育英構想により海外で学んだ南條等の愛弟子たちが石川氏の推進する教学・海外傳教を支援する中で、寛も大きく羽ばたいて行くのである。

本山白川問題が過激の最中、寛は、中立的な立場を貫いたのは、チベットへ向けた大きな夢の目的達成の為であった。

能海寛は、「明治２９年３月２９日『虎枕日記』(自４月１日至１２月３１日)於東麹庵天頂山石峯誌」の書き出し文章に「昨、夢曰、予跋渉、亜細亜之中原忽値干千里之虎。嗚呼、汝以不敵之勇猛横行、蹂躙尤邉之原野。予、今去東海之孤島、我身放干大陸之中枢。予、佛謄何分汝勇猛……(略)」とあることから、２８日の晩に虎の夢を見て日記の題名を付けたものであろう。また、水泳法が四種類記されている。「１、亀泳ぎ　亀のように手で水をかかせて足を打たす事。　２、手繰り泳ぎ　胸郭を開ひて手で円形を画き足は水をふんで行く。３、早抜手泳ぎ　左右の手を交々水上に掲げて水を掻き足は前と同しく水をふむ。４、立泳来姿勢を直立して左右の手を水上に揚げ両足は開いて交々に水をふむ。」とある。能海寛は、明治 24 年に房州で覚え、25 年夏には、海水浴を日課(水連)として水泳をマスターしていたことが伺える。

同年５月９日「予と西蔵」を草稿し、「西蔵国大蔵経目録」概要を訳出し、翌１０日に反省会へ「西蔵国大蔵経目録」を送稿した。５月２３日には、「ツヲンクハバ伝」を書く。５月３１日には、大蔵経「インデックス」を書く。６月１３日には、「西蔵所伝釈尊入滅考異説」を書く。６月１４日には、「説教改善心理学上より論す」を書く。７月１３日には、「西蔵国問題」を稿了。８月２０日には、「東洋の低気圧」及び「ツヲンクハバの異伝」を書く。８月２９日には、「十鐵批判」を書き『佛教』へ投稿する。短期間に集中して論文を書き残している。

寛は、上京して５月以来、青年仏教会と経緯会へ合流して、新仏教徒運動を推進した。経緯会は、毎月 1 回程度開催され、例会の都度、会費を納めていた。この「経緯会」は、明治２７年に古河勇が発起したが、２８年に古河は発病して、須磨で静養し、後継者は北条太洋が主宰していた。その北条も海外へ外交官として渡航するため、３０年６月１２日、能海が幹事を務めて、北条の送別会を開催した。北条は同月１８日、能海らに見送られ日本を発った。北条の去った後の経緯会は、西依と能海が中心となり「経緯同盟会」とし「会是」、「会員誓約書」を作り立て直しを図った。会場も新たに白蓮社に依頼した。８月 19 日午前、経緯会会是委員会を渡辺、西依、境野、梅田、能海の 5 名で開催。午後から白蓮社で臨時会が開かれた。此の時の様子が「参会者 8 名。会員を定む。大いに議論あり。会費 23 銭。」と記録されている。経緯同盟会の会員は 41 名で能海の記録によると同士の名前、住所が記されている。会員には番号が振られており、順番に表すと、1.北条太洋、2.正木新、3.枚村廣太郎、4.海野詮教、5.境野哲海、6.西依一六、7.田上為吉、8.菊池謙譲、9.小林正盛、10.月見覚了、11.渡辺海旭、12.山口力磨、13.柏原文太郎、14.古河勇、15.大久保格道、16.葦原雅亮、17.伊吹道暉、18.吉田友吉、19.本多澄雲、20.梶宝順、21.花田凌雲、22.梅原融、23.桜井義肇、24.菅学應、25.清川円誠、26.能海寛、27.田嶋擔、28.金義鑑、29.中島裁之、30.木山定生、31.菅真海、32.妻木直良、33.佐々木恵璋、34.梅田謙敬、35.旭野慧憲、36.重田友助、37.鈴木貞太郎、38.高楠順次郎、39.古田復之、40.安藤弘、号外.大宮孝潤。通称は「経緯会」としていた。この経緯会も能海の海外渡航でかじ取りを失い、明治 32 年に境野哲海に新仏教徒運動が引き継がれ伸展した。※この内の１１名が海外経験者である。

南條博士宅へ寄留中の寛は、「朝鮮国全羅道光州に設立すべき実業学校創立費並経常費御補助金御下附願」を起草し南條博士を通じて上申された。「この願書は、1月6日を以って聞済に相成り、半額御下附と相成候。外務省機密費中より出る。」と記載している。この内容は、養蚕道具、桶屋道具、農具類、夜具蚊帳、養蚕小屋、住宅建築用材、日本から木浦までの運賃などが詳細に記され、合計金額1,940円としている。海外布教に各所に別院や支院を建設し在留本邦人の為にも世話をしたいとの思いであった。

南條博士宅で夏場の仕事としては1ヶ月間にわたる博士の蔵書の土用干しであった。寛は「南條書物数凡そ 6,000 冊から 7,000 冊迄の書あるべし。内和書は 5,000 冊 余。外国書 1,500 冊余。」と、記している。

寄留中、チベット行きは頭から決して離れていなかった。『蔵行携行品』として次の物品を上げている。○印は既に入手済みのものと思われる。

『蔵行携行品』

大蔵経目録　　蔵行紀程附地図五枚○

定規綱領○　一　　漢字々引　一

梵名集経○　一　　袖珍字典　一　　英字引　一

十二宗綱要又は三国仏法傳通縁起　一

年代記　一　　真宗法典　　年暦　一

望遠鏡、筆・紙・墨、剪・鏡

四書　唐蒙八宗綱要本末之巻

9.　婚約・新婚時代

明治３０年(1897 年)４月２０日、宇都宮太郎大尉宅を訪問し、福島正則大佐を紹介され、４月２８日、福島大佐宅を訪ね、探検のアドバイスを受ける。９月２３日、浅草の本山にて石川舜台氏に面会して、蔵行きのこと、梵書出版のこと、支那（中国）開教のこと、社界問題などについて意見を交わす。南條博士から新門の話を聞かされ一旦、郷里に帰ってくるよう諭される。南條博士の命を受け寛は２５日、６時に新橋を発ち、汽車不通のため横浜港から朝顔丸に乗船、２６日神戸港に到着したけれども強雨のため船中にて一泊。２７日になり漸く神戸に上陸する。３０日には水産博覧会を見物。１０月１日には水族館を見学。４日、神戸港から隅田川丸に乗船し周防灘を経て門司港、馬関、萩を経由して７日、浜田港へ到着する。

浜田には弟の春谷登が出迎えた。ここで許婚（婚約者）佐々木シヅ（静子）に引き合わされる。そして、浜田漁港を ２人で散歩した。翌日、有福温泉に行き入湯する。９日に帰山（浄蓮寺）した。１９日、南條博士から１１月中には上京されたい旨の葉書が届き、浜田の佐々木静子宛に手紙を書く。３１日静子より返信の手紙が届いた。１１月６日、寛は、浜田へ出て佐々木静子と面会し、共に散歩し婚約後の上京などについて相談した。１２月２日、南條博士と佐々木静子からの手紙を見て上京を決定する。３日、春谷登と相談。４日、静子へ手紙を出し互いの上京を打ち合わす。６日に静子が浜田港から一足先に上京した。１４日、大阪の静子からの手紙が届き。１０日、大阪の静子と南條博士宛に返信を出す。１８日、午後３時に寛は上京のため出発する。広島までの途中、才河内で泊。松原を経由し加計の香川で泊る。２０日、午前７時半、加計船着場から川舟で太田川を下り午後４時半広島に到着する。翌日広島横川駅から神戸駅へ到着。２２日、梅田駅へ着き、直ちに江戸掘南通４丁目の本田治七方へ行き、静子と面会し、晩は縁日で散歩する。２３日、午前９時過ぎ静子と共に梅田駅

発１１時京都へ到着。東山方面へ２人で散歩し、下数珠の池田に投宿する。２４日、石川舜台氏を訪問。婚約者の静子を紹介する。２５日、梅田駅を午前７時５８分出発。関ヶ原は大雪、名古屋で昼食。午後５時静岡駅へ到着。大東館に投宿。静子と１２時まで話し込み、「ネズミ菓子を引く思いする。」と日記で述べている。翌２６日、午後四時新橋駅に到着し、「共に車を雇い南北に別れる。」と記述している。寛は南條博士宅へ、静子は井伊家へ、それぞれ別れて住み込むこととなった。

この頃の寛は、南條博士宅に住み込み「毎朝５時に起きて、仏前の掃除をして勤行、梵語や西蔵文典の書き出し、書写、南條博士の講座を聞く。午後は梵本般若心経の研究、夕方は一時間ばかり散歩、夜、梵文名集経を独習し、午後１０時に就寝する……。」といった日課をこなしていた。図書館通いも日課となり、西洋医学書、東洋漢方の両方を研究して単身探検に対する意気込みを感じさせる。

婚約中の寛と静子は東京においては、心温まる交流があった。明治３１年(1898 年)２月１８日、３月２７日には、井の頭公園、忍ケ池などにおいてデートをして互いの夢や希望を高めていった。百人一首の恋歌を抜書きした和歌と尺八を吹く寛と日傘を差している静子のデートの様子を描いた自筆の絵が残されている。自らも『阿里野まん満雲枕』に記述されている和歌集などには、この頃の心情が読み込まれている。

池上にとまる　　Ｍ３１・４・１２

さいた桜江向嶋　　花の主とハ手をとりて
新橋たって大森に　　さらに池上さしてゆく
明保の楼のなが免るハ　　羽田の海の鴛鴦が
こころ一つに身はふたつ　　まことつくしの水あそび
とふく見ゆる遠げしき　　あの雲こゑて外国の
遠き旅路にたつわが身　　今宵ふしどこひとつねハ
志ざし己られのなごりをし　　羽田の鴛鴦ハ池上の
鐘にゆめをぞさますらん　　森の鳥はとくおきて
あそひさし込む明保のの　　あまどひきあけをき出でて
西と東にユくる身の　　その行末ぞいぢらしや

浮雲の　たよのなき身の　行末に
　　いづくの山ニ　かかりいてなり

この歌に記されている４月１２日から１３日は、寛と静子が池上に行き、一夜を共にして、西蔵行きのことを、静子に情熱を傾け夢の丈を語ったのだろう。「世代入出門記」の出納記録によると、４円９１銭池上行(汽車中等、宿料、茶代、菓子、車代)と記されている。

住職となる契約で学資金を拠出してくれた郷里の檀家（門徒）の思いと英訳経典を世に送り出すためにチベット語大蔵経を求めて「義父の健在な内にチベット行き」を模索する寛とでは大きな隔たりがあった。結婚させてチベット行きを諦めさそうとする檀家衆の強い希望を受け入れ、義父の姪の佐々木静子と婚約中であった寛を早く結婚式を挙げさせてほしいという母ユクノが、一大決心をして２月６日に上京し、南條博士に強い要請をした。南條博士も寛に帰郷を勧めた。

明治３１年(1898 年)４月１８日、市ヶ谷より汽車に乗り、鎌倉へ行く。２１日、白山氏と共に勧工場へ行き、硯と筆を買い求め南條博士へプレゼントした。また国への土産として、かんざし等を求めた。４月２２日、南條博士宅を暇し、東京を発ち、途中京都に滞在して、３０日に広島まで帰った。

故郷の浄蓮寺に帰山した寛は、同年５月２８日付けで入籍し、６月２９日、佐々木静子（２０歳）

と華燭の典を挙げた。浄蓮寺の縁側では寛が静子に習字の手習いをさせていたというエピソード（姪のモモエさん談）もあり、仲睦まじい様子が伺い知ることができる。

結婚後は、寺の過去帳の整理をなし、２,０００余点の「浄蓮寺蔵書目録」の作成と整備。「中世私史考」、「浄蓮寺家寺史」、「浄蓮寺世代記」の編纂。父の里の「専光寺世代」、「岡本家系譜」の編纂などを積極的に行った。「世寶入出守門記」の８月出門によると「６円５０銭、静衣服」とあることから、寛からの初めてのプレゼントであろう。

しかし、結婚後４ヶ月目に本山からチベット行きの許可が下りた。チベット行きを理解して婚約以来満１年目を迎える愛妻への贈り物として、寛の誕生時期に咲く「ハクモクレン」(市指定天然記念物)と旅立つ１０月に実る「柿」の木を浄蓮寺境内などへ記念植樹をした。このハクモクレンは、毎年４月上旬に純白の花を咲かせ、一世紀の歳月を経て寛の気持ちを現代に伝えてくれる。

能海寛手植えのハクモクレン（浜田市指定天然記念物）北側からの写真

10.　探検への旅立ち

能海寛は、結婚後いくばくもない１０月４日早朝、浄蓮寺山門前で親族、檀家衆に見送られ寺を後にした。新妻静子と弟の春谷登は県境の大佐山の麓の「馬ノ原」まで見送り袂を分かち寛は付き人一名（隣家の大河原清五郎氏）と麦生宅（祖母の里)、妙蓮寺（弟斉入の寺）に立寄り、橋山(北広島町)を経て陸行８里で加計町（安芸太田町）へ着き一泊した。

翌５日、午前６時に加計から川舟で太田川を下り広島へと向かった。広島までの川里程は１８里（新道 12 里のところ）で午後 2 時半に慈仙寺の鼻(現・平和公園)の船着場へ到着した。『渡清日記』(注 19)によると、横川停車場を６時５７分の汽車に乗り、翌６日、午前４時 59 分に神戸駅到着。車で弟登の

新宅へ向かい６時半着。午後１時２分、三の宮発、午後３時２０分京都へ到着。池田屋へ宿泊し、渡航許可証を取得する為に滞在を余儀なくされた。

毎日、本山へ参詣するも最終決定がなされず、幾度も伺いを立てた。１ヵ月後に漸く許可が下りた。いよいよ中国へ向けて旅立ちが決定すると、寛は上京して恩師・南條文雄博士や親友に「機が熟せり」

と伝え、１１月９日には神田の宝亭で送別の宴を受けて別れを告げた。

この時に参会した人達は、安藤弘、境野哲海、田中冶六、三石賎夫、三島中洲、梶宝順、渡辺海旭、海野詮教、梅原融、桜井義肇、秦敏之、杣村慶太郎、近角常観、宝閣善教、古田復之、南條先生、高嶋大円の１７名であった。京都の普通教校、文学寮、哲学館、反省会、経緯会、詠帰舎を通しての友人たちであった。南條博士からは、蔵贐と千金丹、感応丸、宝寿などの薬など 71 包。西蔵探検に必要な辞書などが手渡された。

１０日に東京を発ち、翌１１日、京都に着くと本山へ向かい、東京往復１０円７８銭、並びに西蔵探検費千円の内、３分の１の３７０円（重慶５カ月滞在費と出京滞在費を含む）と服を受取り、ダライ・ラマ１３世宛の親書を授かり神戸港へ向かい、同年１１月１２日、神戸港から西京丸(２,９１３トン・船長コンナー氏)にて門司、長崎を経由して上海へと向かった。

ダライ・ラマ 13 世宛親書の内容

謹
上
西蔵達賴喇嘛教主獅座下
大日本本願寺法主大谷光瑩啓

←封筒表面縦書き

明治三十一年十月十五日

←封筒裏面縦書き
(竪１尺２寸　横 5 寸)

西蔵達賴喇嘛教主獅座下恭維
教祺安吉福寿円満曷勝額慶西蔵自古仏教盛行風俗淳僕唯因山河遼遠交通不便未曾聞有
敝邦人到境観光者洵為可憾本寺茲遣派能海寛親問
教主安好并究教法之源流考経文之異同□員始到貴境未通人情風俗而探教求経之業固非
容易如蒙
茲航指導保護遠人俾伊得窺一班則不啻本寺之幸實斯教之幸也粛此佈懇并請
崇安統希
慈照不戩
大日本本願寺
法主　大 谷 光 瑩　　印
大日本明治三十一年十月十五日　　※文面は縦書き

寛は上海の領事館において、「護照」という旅行許可証を頂いた。これには、上海から四川省までの旅行を保障するものであった。長江を遡上するには、寛も相当な苦難の連続であった。

１１月２６日、寛から弟の水野斉入宛て漢口からの便りによると、漢口から漢水を渡り伯芽臺(ぺーやたい)(古琴臺)の古跡、帰元寺(４００名の僧がおり、五百羅漢、文殊普賢、観音等の像あり、蔵経も５,０４８巻あり。この経を日本に一部求めたし。多分、北京に板(版木)あるべし。(梵文の経なし)と伝えている。

この時点で、寛は、既に北京版が存在していると推測していたのである。

明治３２年(1899 年)、元旦は酆都県で迎えた。年が改まり、寛の日記も『春秋日記』に切り替わった。寛の『春秋日記』の「春秋」というタイトルは、寛が 20 歳の時に「孔子」に関する大西祝氏の「孔子の教」(『日本之教学』第２号)の論文中「孔子ハ春秋ノ末ニ生レ先王ノ法度ノ廃レタルヲ嘆ジ当時ノ乱世ヲハ尭舜禹湯ノ治世ニ・・・」というところに着目し、「春秋」を日記のタイトルに使用したものと思える。

明治３２年の『官話記一号』(注 20)によると、１月１９日、宜昌から重慶までの三峡(瞿塘峡・巫峡・西陵峡)のスケッチ５２点を描いている。港に寄港している僅かな時間を割いて描いたものと思われる。また、『渡清日記』12 月 3 日によると、父が国を出る時に戒めた言葉を「自病ノ短気、カンシャクヲ起シハセザルカ」と自戒し、「父ノ出立ノトキノ誠言ヲ忘レハセザルカ」と述べている。この父の戒めの言葉が寛の中国大陸旅行中、常に精神的な支えとなったのである。

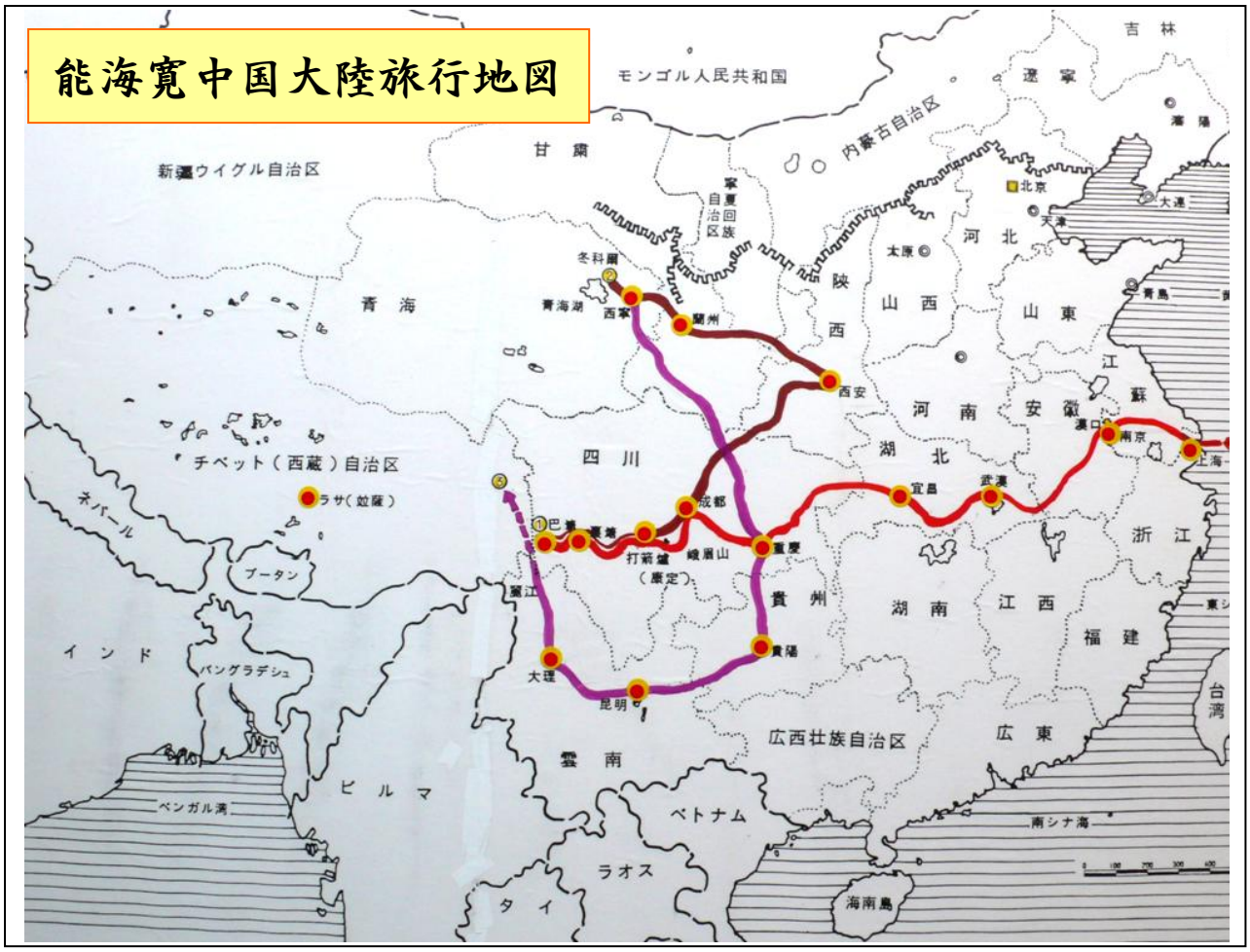
三峡では、灘(注 21)の難所では、１５０間(約２７０メートル)の引き綱を１００人ばかりの人力で曳きあげる大変な作業である。それを指揮するのが、頭取であった。ある時は、曳き綱が切れて船が下流へと流されることもあり、命懸けの三峡遡りであった。

また、現地人は、外国人と一緒に乗船することを嫌う国民性のために、寛は、西欧人と一緒に船を雇い遡上した。旅行中は、服装、通貨、言語、荷物などで大変苦労した。特に、上海から重慶までの入費は５０円位の見積もりが１５０円も要し、残金が２８０円所持という。

重慶では、南條博士より外務次官の紹介状が到着していた。重慶には領事館夫婦、子供３名、書記官１名、通訳官１名、成田氏、井戸川、原田、寛の 11 名で、領事館は非常に大きな建物であるという。広い部屋は１４、５畳の部屋が数１０室有り、支那人ボーイ１０名もおり、家財道具も求め殆んど一家をなすが如くであると驚いている様子である。

重慶領事館で撮影した、寛自身の中国僧姿の写真とポーターの游顕甫氏と２人で写った写真 2 枚を故郷へ送付した。

明治３２年の『飛越関碑記』(注 22)では、表紙に「瀘定橋」(注 23)をスケッチ(５月１０日)し、峩眉県からダルツェンドまの紀行を記述している。この間、本山への上申書を 10 回(上海～ダルツェンド)送付している。4 月 22 日、寛から水野斉入宛の書簡によると、成都では、四大寺(昭覚寺・文殊院・満堂寺・士宝光寺)及び二大道廟(青羊宮・二仙庵)及び武候祠(諸葛武候廟・漢頼昭烈帝陵)あり、大慈寺等を見物し、見聞を広めた。委細は本山上申書に記載としている。４月２２日は、当地を発って嘉定に向



※　赤色が第一次、茶色が第二次、紫色が第三次探検のコースを表す。全行程 12,000Km に及ぶ。

ミラレパ聖人

ヂャンバラ神

マニ輪

カンリン（骨笛）

中国帽子（赤帽）

滅十罪経（西蔵語経典）

かい峩眉山を経てダルツェンドへ向かうと知らせている。

寛の西蔵探検行は、目的は一つ、のみではなかった。仏教聖地の巡礼にも大きなウエイトを持っていた。峩眉山(注24)登山が正に、聖地巡礼と言えよう。『世界に於ける佛教徒』第１３章巡礼、では「宗教上において、教祖の遺徳を追慕し、その霊場を巡拝すること……。」が、巡礼だと述べている。道中に、聖地があれば、巡礼者として立ち寄り、寺院の方丈と面会して、日中の仏教談義を交していた。

４月２４日、ポーターの游氏を伴って、成都を出発。３７０清里、嘉定府に到着。２７日、８０清里で峩眉県に着し、２８日、峩眉山に登る。６０里にして、報国寺、伏虎寺、清音閣、洪椿坪の寺院に宿泊。２９日、８０里にして九老洞、遇仙寺、蓮花石、洗象池、白雲殿、雷洞坪、接引殿、を経て、山頂金殿に到着し一泊する。そこでは、入蔵の支那僧に面し情報を得る。３０日、１２０里にして華厳寺、萬年寺を経て峩眉県に下り泊る。

游氏は体調を崩し、重慶へ返すことにした。石硯１４、５枚と西蔵仏１４躰、西蔵に関する要書等も合わせて游氏に持参させた。范と称する雇夫を雇いダルツェンドへと向かった。

峩眉山へ巡礼登山後、成都市街にて、「普賢金殿記碑」、「永明華蔵寺新建銅殿記碑」、「蜀丞相諸葛武候祠堂碑」(注25)の拓本を入手して、日本へ送り届けている。

５月１２日、ダルツェンドに到着した寛は、日本人３名で西蔵入りするよう本山からの指示で、１、２ヶ月滞在して、寺本婉雅氏、成田安輝氏の到着を待った。

寛は、「出発までは、蔵語研究の心算に御座候。」と、いたって平常心である。寺本氏は、６月２７日に到着合流し、成田氏は、準備整わず７月８日、２人（能海、寺本）で第一次探検として裏塘、巴塘へと向った。

11.　第一次探検（川蔵公路コース）

晩年に寛が、弟斉入に宛てた手紙に、「１．学問時代　２．壮年時代にて広く仏教の為に尽くし、第３．中年時代、一宗一派に尽くし、老年時代、自坊自院の為に尽くさんと考え、・・・。」と記されている。学問時代を終えて、壮年時代に、先ず、西蔵行きを実行に移しチベット語大蔵経を基に「英訳経典」を世に出す目的で探検に赴いたのである。仏教巡礼探検を無事終えたならば、本山へお礼奉公して、晩年には、浄蓮寺の為に住職として仏門へ貢献したいと考えていたようである。

南條博士に宛てた寛の手紙によると、寺本婉雅氏は６月２７日に打箭鑪（ダルツェンド）に到着合流し、成田安輝氏は準備が整わなくて、２名で出発することとなったと述べている。

出発前にダルツェンドで能海寛は「傳牌」という西蔵入国の旅行許可証を取得した。この旅行許可証には、能海寛、寺本婉雅に対して「馬２騎、軍糧府差人１騎、都督府兵士１２騎、ほかに２頭の駝牛および２人の馬夫、合計４騎２夫２駝」を許可している様子が記載されている。

寛の巡礼探検コースは大きく３回に分けられる。第１回は、明治３２年７月８日、四川省成都の西方ダルツェンドを出発し、川蔵公路コースを辿った。折多峠付近で寛は、チベット犬に襲われ９カ所（右足３箇所、右手３箇所、外に傷３箇所）、大傷は衣服３枚を抜きなお１・５センチの負傷を受けた。寛は求道僧として護身銃などはとうてい持ち得ずに自分を護るのは腕っ節に頼る外は何もなかったのである。幸いにも同行中の寺本氏の治療を受け一命を取り留めたのである。

７月５日、南條博士あての書簡で「デーゲと称する地に大寺有之、西蔵蔵経千珠爾、丹珠爾凡そ二千両にて求められ候。本山より資出も不明に付、本山へ別に上申申不致。当地出発致候。・・・」と述

べており、資金の無さがデーゲ行きを諦めさせたものである。

『不毛寒冷の地にて、ダルツェンド以西は風俗、地理全く異なり……』と言うように、牧畜を業として「テント」での生活。また『実に野蛮の辺境に御座候』と言うように、山賊が出没するので、警戒を要する。山を越え、牧山を過ぎて７月２０日に裏塘（りたん）に到着した。裏塘は、一大平野で、四面の山は低く、低地は一面牧場にして、穀類菜類を産せず。牧牛羊馬が数万頭放牧されている。裏塘では、『沿道各地各関所にて、通行切符を売買するに非れば、如何に西蔵人、支那人と言えども通過を許さざるの規定なるが上に、外人は、一切、その関所にて拒絶することに相定居候ゆえ、縦令重慶道台の旅行券ありとも何の効力これ無候。依って、この巴塘より以西奥の通行券買得に付いて甚だ困却仕居候。』と、述べているように、巴塘（ぱたん）までも行くことが難しかった為、２週間も滞在して、８月３日、漸く、ゴルカ使節と同行し、裏塘を出発することが出来た。そして８月１１日、巴塘まで漸くたどり着いたが、あまりにも残酷な事態が２人を待ち受けていたのであった。２人は「西洋人」だ。という遊牧民の垂れ込みにより、チャンカの官吏に足止めを受けた。寛はチャンカの糧台に再三掛け合って直接談判するも聞き入れられず、止む無くリタイヤすることとなる。それでも寛は諦めることなく、一人で、こっそりと餅を腰にぶら下げ巴塘から南下して金沙江の辺の「牛古渡」まで出かけて眼下に金沙江を望んだ。

のぞめども　深山の奥の　金沙江
　　つばさなければ　わたりえもせず

と、無念の句を詠んだ。この時の詳細な記録を寛は手帳に残している。これによると９月２７日、牛古渡にて対岸のチベットを望み３点（金沙江眺望の図、牛古渡途上風景の図、牛古から望む峰々の図など）のスケッチを書き残している。「金沙江眺望の図」には記述時間が１２時半、寛自らの姿も書き込まれている。そして、「牛古渡途上風景の図」には９月２７日、午後１時、前記の金沙江の歌も書き添えられている。探検行中は厳しい警護で身の危険を感じてか、こうした「手帳」という小さい記録物に記録を留めていた。

寛の手紙では、『裏塘（りたん）、巴塘（ぱたん）までは、兵丁の護送を得ているものの、巴塘以西は西蔵へ入ることは不可能で、重慶にて得た道台の護照も西蔵の文字のみありて、巴塘以西は殆ど無効。我々進蔵の準備は、馬具、食品、器具、針、糸、ヒモ等の小間物雑貨品を求める。道中諸買物は殆ど物品の交換となる……』と手紙に記しているように用意周到なれども、巴塘以西は保証の無い旅立ちであった。

この間の様子は、寛と同行中の寺本婉雅氏が本山の谷布教局長に宛てた、手紙によると『沿道高山峻岳にして空気の希薄なる徒歩なりがたく、呼吸の切なる言語に絶し……。』更に『土地柄危険なことから、駄馬人夫賃を多く要求する。その上、１日から３日で交換しなければならず。交換の都度、賃金を多く要求された。毎日天幕を張り野営をしても、夜露をしのぐのがやっとの有様で、盗賊が横行して野営中に駄馬を盗まれたり、天幕内の荷物も奪う有様で、一時の油断もできず、身の安全のため、短銃を枕元に置いて寝る毎日であった。』また『８月７日。二郎湾に宿、凋房なし、天幕を買い無據夜営を張して一夜を明かす。終日大雪山を旅行し高峰剣岳を越え、加之６日は、喇嘛了にて烏拉を交換せんとす。人夫、駄馬を置き去り先行せしかば、不馴れ乍ら、自ら馬に乗り、自ら駄馬を引きつつ雪山を越えたり。途中綱切れ、馬山林に逸し、甚だ困却す。』このように、報告している。これらの手紙の文面から、難行苦行の道程であったことが想像される。

寛の進蔵通信によると、次のとおり記述している。『巴塘に至るや、ゴルカの支那朝貢使節一行と同道進蔵せしに、彼等は予を洋人といいふらししを以って、江卡（ちゃんか）地方土人等全く予を欧米人と誤想し、一犬嘘を吠えて萬犬実を伝へ、土人１００人許りは金沙江辺及び審静山、その他、要所要所に配置せ

られ、この奥へ一歩も踏み入るならば、予は直ちに彼等の捕虜ともならん有様にて、巴塘駐屯の支那官吏武糧台もかつて一度は予の「護照」を見て、進蔵を許可し、２名の兵を以って護送致さんと申しながら、又次回には、巴塘より雲南に出づるを許しながら、再三再四語を渝へ約を違へて、終わりに他の線には一歩も行くことを許さず。又官の手を離れて、予一人単独道を択ばんとするも応ぜず。もと来し道へ引き返すべきことを命ぜり。彼等の土人を恐るることは痛き傷に手を触れしめざるが如く、３年間こともなく職を終れば、跡は野となれ、山となれ、我不関与と澄ましこみおる。至極無責任の拝金宗の官吏なれば、到底道理理屈にて論すべきものにあらず。やむなく５０日間、巴塘滞在の後、一先引挙ぐることに決し、１０月１日に出発して、当地に帰着致し、新旧の越年も致し、今なお、当地に滞在致居候。小生在巴塘中支那僧服にて、ただ一人腰に唯２、３個の焼餅を携へ、徒歩にて巴塘より４０里西、金沙江辺牛古渡を密かに見物せし時の如きは、殆ど、死地に入る心地致被候。…… 』
前述の金沙江の歌の外にもう一句次のように詠んでいる。

泥水に　こがねの砂を　流しゆく
　　幅は三町　岸は高山

当時、巴塘（ぱたん）は当時ダライ・ラマ１３世の直轄地であったことから日本人として最初にチベット領へ入国したことになる。寛が弟斉入に宛てた手紙で「巴塘は西蔵内地に御座候……。」と記述していることから寛は、西蔵頭蔵（康）古代所属地であると理解していたのである。

しかし、中央チベットまでは遥かに遠く危険が潜んでいた。一旦、ダルツェンドに引き返し、同行していた寺本婉雅氏は一旦、日本へ帰国したが、寛はそのままダルツェンドに留まり入手した「チベット語大蔵経」の翻訳作業をしながら次回の入国手段を検討していた。

12.　仏典の翻訳に業績

能海寛は巴塘（ぱたん）からダルツェンドへ退き帰して約半年間にわたり西蔵仏像の研究と仏典翻訳に没頭した。仏像研究は、『丙第五号』(註 26) に西蔵仏像が明治３２年(1899 年)１１月２０日から１２月１６日までの間に、４０点が詳細にスケッチされ、解説が施されている。Ⅰ佛、Ⅱ菩薩、Ⅲ鬼神、Ⅳ鎮守、Ⅴ梵神、Ⅵ国神、Ⅶ人神、と七つに分類している。仏像には西蔵語、梵語、英語、日本語で標記されている。寛が日本へ将来した仏像三点が、このスケッチの中に存在している。「鹿苑ノ釈迦牟尼佛」、「ミラレパ聖人」、「ヂヤムバラ神」である。ヂャムバラ神は、西蔵人が最も信仰する仏像で、ミラレパが深く信仰していたと記述している。ミラレパは１,０３８年に生まれ１,１２２年に亡くなっている実在の聖人である。入手経路を見ると四川省ダルツェンドにて明治３２年１１月１７日に釈迦牟尼佛一点、１２月１６日にミラレパ聖人、ヂャンバラ神 (註 27) の２点を購入した記録が残っている。

仏典の翻訳は、「般若心経」、「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」、「西蔵ボン教」(註 28) などを梵語、西蔵語、中国語、英語に対訳照訳を短期間で実行した。このことは、寛が日本において周到に語学研究をしていた賜と考えられる。また、寛は西蔵草隷の書き及び「干殊爾（かんじゅる）」、「丹殊爾（たんじゅる）」(注 29) の翻訳経西蔵を目の当りにして西蔵の文化水準の高さを正しく評価している。

明治３３年(1900 年)５月１６日付、第１９回本山宛の「上申書」によるとダルツェンドにおいて探検に対する前後策を講じ、次の様な決定をした旨「上申書」に書き記している。

（前・中略）

諸疑題は遂ニ小生ヲシテ左ノ決定ヲ致サシメ候

第１　青海ヲ往テ進蔵ヲハカルベシ　荷物並ニ旅費ノ半額ハ当地ニ遺シ置キ出発シ

第２　青海策若シ成ヲザズレバ、再ビ当地ニ引可ヘシ、萬題中の第一ヲ試ムベシ、第一業タル小路進蔵到底望ミナリト

第３　冬期好時期以ヲテ、雲南ニ業出テ、第二ヲ試ムベシト、依テ以上実行ノ為、明日當地出発新決定ノ論ニ上リ候

就再ヒ成都ヲ経、甘粛、蘭州ニ至リ、青海ニ至ル豫定ニ御座候

或ハ序ヲ以テ松藩内地ニ於ケル喇麻寺ニ西蔵黄教新教ノ開山誕生地ヲモ訪問致度存候

二白、過日、寺務所内南條先生宛金剛経西蔵文葉並ニ譯本、計４冊発送致置候　以上早々

５月１６日　歟在打箭鈩　能海

本山寺務所　布教局御中

このように、滞在中も入蔵ルートを常に頭に置き、時間を有効活用していたのである。また、文末に記述している、南條先生に発送した翻訳経典４冊とは、「般若心経」、「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」の４点を指している。南條博士がイギリスで発刊された梵語文献『南條・ケルン本』に掲載されているこれらの４点は、恩師南條先生にいち早く、仏典の翻訳成果を伝えたかったものと考えられる。

寛の書き残した筆暦を辿ってみると、「丙第拾号」に掲載の「蔵文金剛経　第弐編」は、明治３３年１月３０日に着手して、２月５日に写本の誤写が多いいため鑪版本により２月１８日に訳出を終えたとしている。「般若心経」は、『能海寛遺稿集』に掲載されており、訳出は、明治３３年３月２６日と記録されている。「丙第六号」(注 30)掲載の「弥勒勝願経」は、明治３３年(1900 年)３月２９日に翻訳開始。３月３１日夕食前に訳出を終るとしている。

「丙第九号」に掲載されている「西蔵語ボン教ノ無量寿経」の翻訳は、明治３３年４月２５日に翻訳完了と記述している。邦人としては、最も早くからボン教の研究をした人として位置づけてよいだろう。１０冊あるべき著作物が「丙第一号」から「丙第拾号」までの間で、現存していないものの号数が「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」について翻訳された原本の所在が不明である。

「ボン教」について寛は、「ヂエナバルは、ボン教の主神にして、黒色にして女の相好。一見、緑達拉の形に似る。又古来、西蔵国の鬼神を祭る。コロヲバは刺麻教に反して外に転回す。これ白教もとめ、これを後、刺麻教入りて改めたり。又釈尊をも説く。古来まで釈迦ありと。ボン教の開山の名なく、具さには蔵衛、中部西蔵、恐らくは、支那老子と同じなり。」と記述している。

仏典記録物に「甲」、「乙」、「丙」と分類していることに気付くのである。「甲」、「乙」は、寛が蒐集した西蔵経典やサンスクリット経典を著し、「丙」は、仏典翻訳研究の為に自己が記録した著作物を著している。

経典翻訳で半年間滞在したダルツェンドを出発する日がやって来た。いよいよ第２次巡礼探検へと西安府へ向かい玄奘三蔵が天竺へと向かったと同じシルクロードの旅が展開されるのである。

13.　第二次探検（青蔵公路コース）

能海寛の第２回探検は、明治３３年(1900 年)５月１７日、ダルツェンドを出発、雅州を経て、２７日、成都府に到着。５日間滞在して、６月１日に成都を出発、西南シルクロードを北東方向に進み新

都県、徳陽県、羅江県、梓潼県、紹化県、廣元県、七盤関において四川・陝西の省界を越え６月２７日、西安府に到着した。

西安では、玄奘・義浄などの仏蹟巡礼のため一週間滞在した。臥龍寺に一泊し、方丈と親しく日清の仏教の状況など懇談する。薦福寺には、義浄三蔵の高層塔あり、大興善寺は、玄奘三蔵の道場であり、今は寺地広寛なれども廃退の有様である。大慈恩寺には、慈恩大師の高層塔あり、興教寺は、玄奘三蔵の塔院にして一泊して、古跡を調べた。

７月３日、西安府西門を出発して、咸陽を経て瓦雲鎮（陝西・甘粛の省界）、涇州、平凉、六盤山を越え会寧県、金家崖を経て７月２３日、蘭州府に到着した。途中、風邪を患い、清水なく、苦水を飲むことで大変苦労したようである。蘭州では、天水を用いて茶や飯を炊く、故に一杯の茶も数文の値がつく。涇州、平凉、金家崖地方は阿片作盛んで、通行の頃は花盛りであったと報じている。また蘭州は、「新疆、蒙古、青海に通ずる咽喉たれば、内地の状況に付き見聞する所多し」という。

途中寧夏回族自治区の六盤山を経由して蘭州に至る間の寛の現地の探訪論文「甘粛論」では「……地理、沿革、風俗ヲ知ラント欲スルノ人多カラント信シ、実地ニ見聞セル所ヲ報シ愚見ヲ附記シテ、此論ヲ草スルナリ。……」と記述し、地理、歴史、政治、宗教、風俗、人情、言語、商業、農業、物産など６２項目にわたって記述している。蘭州からは、故郷の友人へ農作物の種子（洋麦・平豌豆・甘粛胡麻・菽米）を送り蘭州の気候と似通っているので故郷で栽培してみてはどうかと述べている。寛は農業にも関心をもっていた。

『在渝日記』(註31) では、支那の農業、西蔵の農業、陝西の農業、甘粛の農業など寛が観察したままを記述している。『西蔵地誌略』では、漢口、打箭鑪、河口、裏塘、巴塘、中甸、維西庁、チャンカ、乍丁、察木多など通過を予定した地域を詳しく記述している。『丙第五号』では、ダルツェンドにおいて「チベット仏像４３躰」のスケッチと解説を記述している。中でも、代表的な仏像、「釈迦牟尼仏」、「ミラレパー聖人」、「チャンバラ神」の３体を入手して将来したものである。

また、『雨夜物語』では、民話「獅子と鯨の話」、「狼と蜻蛉」、「猿と駱駝の話」、「猿と人間の話」などを記録している。寛の探検行を通して、これらの記述を見ると、ただ探検のみでなく広義に表現すると人類学を満喫する大旅行であったとも言えよう。

７月３０日、蘭州府を出発、８月８日、甘粛省の西寧に達した。西寧では、青海横断の準備のためにラマ服を作り、食料の用意をなす。漢・蒙・蕃・回、僧俗を問わず、青海に入らんとする者は、官の許可書が必要となったとの情報により、急遽タンガルまで進むことに決し黄河を渡り青海路を進みタンガルに着いた。

タンガルで寛はチベットへ如何にして入国するかを模索していた。当時のチベットは２つのルートがあり、一つは青海の南方を行く官路と称する路。もう一つは、青海の北側を行く商隊、または西蔵巡礼の通路かあった。この商隊の通路は３ヶ月分の食料の携帯を要した。寛は８月に、この北側から行く商隊に紛れ込むつもりで馬に乗りトンガルまで行き進蔵計画を模索中にタンガルの宿に預けていた旅費（５、６０両？）、旅装品が留守中（８月２２日）に盗難に遭遇し金品が奪われた。不思議にも怒りをあらわに記述したものが見当たらないのである。止む無く断念して、蘭州から回教徒地域を検分するために階州を経由して重慶までたどり着いた。この間のルートは、８月２３日、蘭州を発ち、西寧を経て、循化、河州、岷州、階州、碧口、紹化、保寧、蓬州、順慶府、定遠県、合州のルートで１１月４日、重慶へ到着した。

重慶に着くと早速、「陝甘旅行記」を纏めて本山へ報告すると共に、金策に奔走した。また、１１月１４、１５日、再度ダルツェンドに向うことを一度は発起するも、井戸川氏の勧により断念するのである。支那・新疆域の沿革を調査、蒙古・新疆の調査、古本屋へ行き本を入手、旅行図を作成し、神仏洞・観音厳などの見学や散歩も日課としていた。

１１月２２日、「思想の変遷」を書く。この文面によると英文、梵学等、色々学んで来たが、西蔵文研究こそ真に研究すべき価値ある学問であると結論付けているのである。この項は、寛の学問について回想している重要事項であるので、本稿「Ⅳ.補助資料」において、全文を別途活字掲載する。

同月２３日、ダルツェンドで預けていた荷物が届いた。その５日後の２８日、重慶領事館の石塚氏に預けていた４８両を上海から持参中に、三峡にて、ドイツ汽船が暗礁に乗り上げ、その金と荷物が沈没した。度重なる不運である。寛は、いかなる困難に遭遇するも西蔵探検こそ、総てが楽しい修行であると心得ていたようだ。

こうして、重慶で年末を迎えた。第３次探検へ向けて着々と準備を整え手持ちの７、８０両のみで行動する決心を固めていくのである。

14.　第三次探検（雲南コース）

明治３４年(1901 年)１月４日、寛は重慶滞在中に、第一回探検の折、自筆の「四川・雲南の地図」に、今回の雲南コースを模索した地図を残している。巴塘(ぱたん)から金沙江を越えて直接、江卡(ちゃんか)に入る方法は既に、第１回目に失敗しているコースである。これを見ると第１回の瀘定橋から巴塘までは地図を正確に書き、通過地名、山は毛羽法で、河川は青色鉛筆で記載しているが、雲南地方からチベットまでの地図は、重慶で得た情報により、２コースを描いている。先ず、１コース目は、麗江から中甸、橋頭汎、奔子南、阿敦子(あとんつ)、咱利拉、加泥定、公拉、寧静山、南墩、古樹、江卡(ちゃんか)に至る方法。２コース目は、麗江から中甸(ちょんてん)、橋頭汎、奔子南から巴隆達河、邦多、喀拱、杖橋、奏堆、仁推、ヤーヘーコン河を南下して阿敦子(あとんつ)に向かい、咱利拉、加泥定、公拉、寧静山、南墩、古樹、江卡に至る方法である。

１月２１日付、能海寛が中国・四川省重慶府から弟の水野斉入に宛てた手紙によると、「予ハ２月１０日頃ニハ当地出発貴州雲南ヲ経テ、大理府麗江府ヲ過キ、中甸(ちょんでん)、阿敦子(あとんつ)ノ境ニ入リ更ニ進蔵大□ニ出テ、察木多(ちゃむど)、拉里ヲ経テ、此秋ニハ蔵都布達拉ニ到リ度願ニ候。」と、記述している。この手紙で予告しているように日本に帰還する事なく、第３回の探検に貴陽(くいちょー)を経て雲南省路をとった。

２月２０日付、重慶から南條博士に宛てた書簡で、「小生、明２月２１日、当地出発、雲南に相向い候、前途は只今にては如何とも難計、中甸(ちょんてん)、阿敦子(あとんつ)、江卡(ちゃんか)を経て、進蔵致度予定に御座候。兼て借用の西蔵字書は大事に致し用い居候へ共、今回の旅行は甚だ案じ居候間、若し欧州に於いて得らるゝ事に候へば、本山より一部御購求相成事は叶不申儀に御座候哉。又昨年５月本山宛に送り置候。金剛経、般若心経、外二部西蔵経文直訳、御覧被成下候哉如何、御尋申上候。今回の御書面に由り、西蔵経文の日本に傳はりしこと（寺本氏の将来)、川上氏の渡天進蔵のこと、至喜至慶之二大事件と存候、特に西蔵経文の入りしことは小生多年の願望を成就し、日本仏教の為無上なる幸栄と奉存候。」と伝えている。又寛の描いた印度の地図を見ると第４次探検も視野に入れていたことが、想定されるのである。

弟の斉入に差出した書簡の重慶出発日と南條博士に当てた出発日が１０日ばかり延伸している。あと７、８日遅れて出発していたら四川省の永密県で哥老会(ころほい)一揆に遭遇していたであろう。寛は、３月２７日馬龍州で、この事件を知った。この事件は、寛が貴州を出発した日であったという。哥老会(ころほい)とは、大哥(たーこー)、老二(らおあーる)、老三(らおさん)、老五(らおう)、老六(らおりゅ)、老八(らおぱ)、老九(らおちゅ)、七階あり、大哥は無上の権利を有し、老二、老三は新仏に関することを扱い、老五は総理大臣の如く万機を摂し、老六、八、九、各々、その下にあって職を分かち、同朋相救い、四川、貴州、雲南の地、数十万をもって数えるべく、至る所で勃起し、貴州でも昨年来の飢饉により、国庫より１０万両の補助ある由も、貧民多く困窮しているので一揆騒動が波及する恐れがあると伝えている。

２月２１日に重慶を発った寛は、界石、綦江県、鎮子街、桐梓県、泗渡站を通過して３月９日に貴

州省城へ到着した。２日間滞在の後、貴州を出発し、清鎮県、安平県、安順府、鎮再州、両頭河を経て雲南省界勝境関を通過し、３月３０日に雲南省城へ到着する。

４月４日には雲南省城を出発して安寧州、禄豊県、廣通県、楚雄府、鎮南州を経て沙橋、雲南駅、珥海を経て、大理府まで３,０３２清里（１,５１６キロメートル）の西端に到達した。珥海から眺める雞足山（雲南の霊山）には、前山の五大寺、後山の八大寺、全山６０庵、幾百の僧侶の住せる名山と伝えている。

大理では、日本製のマッチ、蝙蝠傘、毛布の類が見受けられるという。これらの物品は、麗江を経て西蔵の東部にまで輸入されている。また、大理は各人種の博覧場にして、目と歯のみ光り、黒色なる熱帯人、西蔵人、銅色人、及び漢人の数人種が混住して、西蔵人は内地から来る者も多く漢蕃境界の観ある地という。

「今ヤ極メテ僅少ナル金力ヲ以テ深ク内地ニ入ラントス、歩一歩難ヲ加エ、前途気遣ハシキ次第ナレド、千難万障ハ勿論、無二ノ生命ヲモ既ニ仏陀ニ托シ、此ニ雲南ヲ西北ニ去ル覚悟ナリ。」と、本山寺務所教学部長谷了然師宛の文面を見ると覚悟の程が伺える。

そして、一命を投じ求道した青年僧の行方は明治３４年(1901 年)４月１８日付の南條文雄博士に宛てた信書(Ⅳ「補助資料」において、全文掲載)と妻静子に宛てた４月２１日付の鄧川州（大理～麗江間）からの書簡を最後に全ての音信が絶たれてしまった。

寛の旅行日記は、巡礼探検毎にタイトルが付けられているが、中国大陸 12,000Km の大旅行の２年半年の間に記録された「第壱号」(注 32)は、縦書きの１日一行の記述で綴られている。しかも詳細の日記は、別にキチンと「渡清日記」、「飛越関碑記」、「進蔵朝仏記」(注 33)、「第６号」(注 34)などに記録しているのである。

南條博士から教えを受けた梵文によると『無量寿経』、『阿弥陀経』、『金剛経』、『般若心経』など主なる経典は、ダルツェンドで入手して、４カ国語に翻訳も終え、目的を殆んど達成しながら、なお身命を尽くし西蔵探検を継続、実行した寛は、大谷光瑩法主から預かったダライ・ラマ１３世宛の親書（縦１尺２寸・横５寸）に対する返書を戴くことが人間、能海寛の「信後の行」の身の処し方であったのだろうか。彼は、『世界に於ける仏教徒』第１１章「仏蹟回復」、第１２章「総会議所」において、世界５億の仏教徒を一統の基に纏め、印度仏陀伽耶の霊蹟を回復して、その地で世界仏徒の総会議所としたい旨を述べている。また、寛自身がダライ・ラマ法王に接見して、仏教開国と世界宗教会議所の拠点としてのポタラ宮をも構想していたのではないだろうか。

能海寛が蒐集・将来した経典類は、「甲」と表記されている。金剛般若波羅密経、賢劫千佛名経、賢劫経、南無三宝教諏法王「スロンザンガンポー」作（経）、帝王大乗経、滅十罪経、滅罪経、金剛経、佛説大集母逆子菩薩所用経、八千般若、聖文殊相正説、千手観音画像、蓮花菩薩画像、金剛経などを甲第壱号から第九号まで、10 月 26 日から 11 月 24 日までの間に入手したものをサンスクリット語、西蔵語で経典の表題、入手日、金銀写字、完欠の状況、枚数、形状、版元が詳細に記録されている。

現代の我々に最も必要な、「夢とロマン」を具現化する術を彼の生涯に亙る生き様が私たちへ、今なお語りかけてくれるのである。

15.　能海寛の横死情報を巡って

能海寛は、明治３４年(1901 年)４月２１日付、中国・雲南省鄧川から愛妻静子への書簡を最後に総ての音信を絶ってしまった。静子は、１０年間、ずっと寛の帰国を信じて待ちわびていた。こうした中、明治３６年(1903 年)１２月に静子の夢枕に寛が罪人の姿で捕らえられている姿を夢に見て、不安

に駆られた。両親、親戚も静子の気持ちを察して、翌３７年８月に静子を上京させ、南條博士や友人を訪ね、消息を尋ねた。この時の様子を子安善義氏は、「偶ま南條先生の御宅を訪ふ、一婦人あり、私は能海寛の妻ですが、夫の音信は分りますまいかとの事に、先生も能海君の細君と聞きて驚き給ひ、小僧（子安）も驚けり。」と、その時の情景を述べている。

明治３７年(1904 年)９月２８日付、南條博士から能海謙信宛に書簡が届いた。これによると、春谷登氏が先月ハワイ別院に向けて布教活動のため渡航した旨を伝えている。「能海寛君の事は常に心に然り居り候」、「明後３０日には黄檗宗の僧河口慧海氏再び入蔵の為、東京を出立１０月１１日神戸にて八幡丸（船名）に乗込みの由に付、寛君の事を捜索を致し呉度頼み入れ置候」と、伝えている。静子が上京した理由は義弟の春谷登の渡航見送りのこともあり、親族代表として見送りも兼ねていたものとも思われる。

寛の安否を気遣っている郷里の浄蓮寺家族や友人の元へ、明治３８年(1905 年)６月２４日付、同郷の岡田利喜太氏が従軍先で知りえた情報として、同郷の小林久太郎宛に軍事郵便で能海寛の横死情報が届いた。内容の概略は次のようであった。

「（前文略）号外　能海豊（寛）氏は、生死不明ノ為メ御互ニ気遣ヒ居リ候処、当地ノ在勤の軍務署長井戸川少佐殿ハ数年前ヨリ（チベット）地方ヲ巡回セラレタル人ニ付問合見候処折角其の豊（寛）氏の事ナレバ私ニ委細知リ得タリ。能海豊（寛）氏ハチベット界ニ於テ土人ノ為メセツガイサレ死去セラレタリ。自分ハ昨年１月チベットヨリ帰リ掛ケ丁度豊（寛）氏ノ死去セラレタル家ニ宿リシニ大日本帝国島根縣石見国那賀郡波佐村出身能海豊（寛）ト記シカベニ歌ヲ書キノ残シ有シ其ノ歌ノ意味ハ残念ナガラ此所ニシテ土人ノ為メセツガイセラレルトノ意味ナリ。依テ其ノ土地ノ土人ニ就テハ尋子見タル処、一昨３６年１２月中旬ニセツガイセラレタト相違ナキ由ニテ自分モ驚入其ノ歌ヲ自分ノ手帳ニ記シ保存致シ居リ候処分（紛）失シ残念ナリ。尤モ、其ノ田（他）ハ直シ本国へ歌モ記シ詳細書面ヲ差出シ候ガ届カサリシヤトノ咄シナリ。尤モ、私ヨリ井戸川氏へ直接ニ面談スル事ニ至ラズニ付過日モ御報申上候通リ当旅団付従軍僧トシテ濱田町（現・浜田市真光町）真光寺就職大原義謙氏ハ再度面談セラレルニ依リ、仝氏へ依我シタレバ直ニ問合セシコト候処、右ノ次第ナリ。實ニ残念千萬ノ事ニ有シ候トキ尚委シキ事ハ近々私シ方、井戸川少佐殿ニ面談シ御報申上候得共、死去セラレタル事ハ確ナル事實ニ有シ候間、可然御取計イニ下度候。私シヨリ浄蓮寺方へハ羽書（葉書）ニテ只豊（寛）氏ハ死去セラレタル由タシカナル筋ヨリ聞タル旨ヲ記シ悔候文ヲ加ヘテ発送致シ候へ共、土人ノ為ニセツガイセラレタル噂ノ事ハ申送ラズ候。其ノ様御推リノ上御取計イ発表シ下度候。」と、伝えている。

この書簡は、７月７日に配達されている。浄蓮寺へは、葉書で、小林久太郎宛はより詳細の内容を書き送っていたことになる。当然、浄蓮寺と小林氏は勿論のこと、檀家一統と緊急協議されたものと考えられる。

これを受けて、明治３８年(1905 年)７月９日付、浄蓮寺では早速、父の謙信師が、岡田氏の書簡の写しを添えて、南條博士のもとへ「（前文略）西蔵探検の為出発仕居候處、拙者事非常に老衰、法務難運、困入候に付き、日夜相得受居候。案外其筋より正實之通信、別紙写之通り即今到着仕り、驚入愁傷に沈居候、其由不取敢御通信申上候」と、伝えた。

南條博士は、早速関係者やマスコミに情報を公開した。７月２５日発行の東京朝日新聞ほか諸新聞は競って故人の伝記を掲載し、勇壮なる旅行の様子を伝え、当時の人々に感動を与えた。

明治３８年７月１３日付、南條博士から水野斉入宛書簡は、「拝復７月９日の書状を昨１１日午後５時２０分落手披見致候処。御令兄寛君ノ儀一昨３６年１２月中旬西蔵国境ニ於イテ変死ノ儀ノ由確報ノ写ヲ示シ候コト驚キ入申候ヨモヤト存居候処コノ変報ニ接シ何共申様モナキ次第ニ御座候。御両親、御兄弟ヲ始メ御一同ガ哀傷之御事ト御力落シ申候。当方家内一同厚ク御悔ミ申上候……。」と、哀悼の意を表している。寛の院号法名の件、副住職の件について述べ、寛が将来した西蔵経典を預かってい

るが、この経典を真宗大学と哲学館へ寄付することに致した旨を伝えている。

同年７月１６日付、能海静子が妙蓮寺水野斉入宛に差出した書簡によると、前年に上京以来東京に滞在していることが判る文面である。これによると、浄蓮寺より南條博士宛に電報で横死情報を知らせ、南條博士から静子に伝えられて、困惑している様子であり、一度帰国して相談したく近々の内に帰国する旨を伝えている。

明治３８年７月２６日午後三時浅草本願寺にて故能海氏の追弔法会を催し、南條博士が導師を勤め、南條博士が渡清以来の経過を報告、能海氏が重慶より博士の元へ送付した西蔵経文、小塔、鈴などを陳列し博士が説明を加えた。未亡人静子も参列し香を手向けた。哲学館大学長井上円了氏は弔辞の中で、次の漢詩を即席で哀悼の一首を贈った。

君曾決死向西蔵
不報平安已幾霜
一夕悲風傳凶信
痛心難禁涙手行

参列者は、普通教校の同志、桜井義肇、長沢則彦、梅原融。哲学館の同志、高島大円、安藤弘、境野哲海、安藤正純。子安善義、白山謙致、平松理英等友人が多数来会した。散会後、生死について諸説ある中で、井戸川辰三氏（少佐）の新聞報道（訛伝説）を尊重することとなった。

追悼法要が終った後、７月２９日に南條博士は、能海静子氏に「函中物品目録」と「能海寛君所蔵西蔵経典目録写」を手渡した。その内容によると、寺本氏と原田氏に托され経典類と紙函一個を記念物として引き渡すという書面である。現在、浜田市金城歴史民俗資料館に収蔵展示されている資料が、これに該当するものである。

明治３８年８月、井戸川辰三氏から北京順天時報の松島宗衛宛の軍事郵便の書簡内容を要約すると、友人能海寛師の事に付き問い合せについて回答の形で書面を認め送付している。「（前文略）岡田氏の又聞きとなり之に、３６年１２月２０日（小生大理に赴きたるは３６年５、６月頃なり）とか又は石見国波佐……とか、色々のヒレヲ付ケ而シテ小生の談話の様ニして、其を親に違伝せられたるが、この度の訛傳の原因と相成如し事と存候。（以下略）」松島氏はその書簡と封筒を同封して、８月１２日付けで東京本郷区東片町１２０番地の桜井義肇氏（『反省雑誌』主幹）に送付し、ご一覧の上ご判断をとしている。

桜井氏から南條博士へすぐさま知らせが届いた。８月２４日付け南條博士から水野斉入宛に詳細な文面が届いた。

明治３８年(1905 年)８月１８日付で、謙信師は、南條博士宛に次の文面を送った。「（前文略）井戸川氏の回答に接し候へば、横死之事件全く訛傳憶説との説、愁慮忽ち変じて安慰、驚喜相催候。帰国の時期、期待受申居候次第に御座候。此段敬白化候。」と、横死の報せが訛伝であったことでの最悪の状況から脱した安堵感を率直に述べ伝えている。

また、郷里の小林久太郎宛に従軍先の岡田利喜太氏から井戸川辰三氏の訛伝である旨の書簡を同封して来た。井戸川氏は、７月２６日付の「時事新聞」を見て岡田氏へ訛傳臆説であると述べている。

大正６年(1917 年)１月２０日付、寺本婉雅氏から水野斉入宛書簡によると「故能海寛君生死不明本年早や１７回忌に相当候間、小生等南條博士と協議発起人として来５月１８日故人の誕生日を以って…… 」と、真宗大学において、記念法会、講演会、故人の遺物を出版することを知らせている。追伸において、故人の遺物行李、支那の衣服、書籍、携帯品等全て写真に撮影して至急御送されたい旨記載している。

大正６年３月１６日付、西川静子（この時には、既に再婚して西川姓となっていた）から妙蓮寺宛の手紙によると、「（前文略）御院家様（寛）渡清後、本年が丁度１７年(１７回忌)に相成其に付、京都

にて寺本様発起者にして追悼会がつとまる様子何より、何より結構に存じます。又御申越なりました写真ハ、川口（ママ）様渡航のさい南條先生様え御申、其れより川口様へ先生より御渡しに相成りまして御院家様の捜索いたす様にて御待ちになりてより其の後は、川口様も御帰朝になりませず、私も東京よりかえり、只今は他処嫁た様の有様にて……。」と、記しているが、恐らくは、水野斉入氏が、静子宛に、寛師の記念物の所持状況を尋ねた事に対する返信であると思われる。書面の中で、静子の持参していた写真３枚は、南條博士に托して、河口氏に渡された様子を知らせている。寛の記念物は、中国で書き残した「龍と虎」の書を持参しているのみで、京都の追悼会の際に必要ならば、送ります。という内容である。この書は、寛の生まれ年が戊辰歳で、静子の生まれ年は、戊寅歳であり、寛は、自分（静子）が寅歳生まれである事を知って歌に詠んでいることを承知して、大切にしていた記念物であった。書簡の文末に子供が風邪を引き返事が遅れたことを記している。この時には娘の子が１人誕生していたのである。

河口慧海氏の２度目のチベット行きに際して、南條博士を介して能海寛の写真２、３枚を手渡し生死の情報収集を依頼している。

大正６年３月２３日付、寺本婉雅氏から水野斉入へ宛てた書簡によると、能海寛追憶会の発起人は、南條文雄、高楠順次郎、月見了念相続講局長、関根教学部長、白山謙致、子安善義、藤岡了惇学長、寺本婉雅等で、その他、帝国大学の諸博士、真宗大学の教員を特別賛助員として趣意書を作成。諸経費は、南條老師８０円、本山１００円支出あり、総経費５５０円であり、発起人に連名されども何等の助力も無く、差引き残高は藤岡氏と寺本氏で負担する考えであると伝えている。できる限り、遺稿を販売することによって、残金の回収を図りたい考えである。

こうした多くの人たちの尽力により、中国大陸から２年半の歳月に亙り送付された書簡や上申書を中心にした『能海寛遺稿』が出版され、能海寛の求道の真髄が浮き彫りにされた。

昭和１７年(1942 年)８月２０日付、『サンデー毎日』の記事「雲南国境の人柱　能海寛」として大きく報じられた。浄蓮寺能海譲住職は、この記事を大谷派京都教務所長の武田雷雄氏など９箇所へ贈呈した。

武田氏から、『サンデー毎日』８月号の礼状に併せ、「寛師の切続に関し、何分の取計ひ致度しも教務所僧籍簿、本山記録等甚だ不備。何の酌みとるもの無し。第一除籍抄本を附し、死亡届出て居らず、改前生存の形と相成居し、依りて左記大至急御返事折返しお願い申し候。一、除籍抄本を附し死亡届。

一、略歴（僧籍、学歴、事歴等）一通提出のこと。」と、通知が届いた。譲住職は、早速、役場に相談するも死亡の事実、不明の為受理し難く、百歳を経過し居れば問題なく、戸籍面を除く事が出来る。失踪届けを提出すれば出来るとのことについて、住職は、能海寛の辛苦を汚すことになり、遺族としては不本意である旨を武田氏へ伝えた。その際に、寺としては、死亡推定日を明治３４年４月２１日（大理より最後の書信日付）を以って命日とします。と伝えている。

武田教務所長から死亡届の提出不能を了解し、殉教者として大僧都の上申を本山へ出した旨伝えてきた。

昭和１７年(1942 年)１２月５日、浄蓮寺において、故能海寛４０年忌が執行された。本山から派遣された神田執事（武田教務所長の代理として）が列席し大谷瑩潤宗務総長の「大僧都」の辞令が伝達された。これに対して、浄蓮寺では、寺族、門信徒を代表して、能海譲住職より大谷宗務総長あて感謝状が贈られた。

昭和２５年(1950 年)９月２９日付、大谷大学藤岡了淳学長より、浄蓮寺住職宛の書簡を要約すると、「近日能海寛師５０回忌法要勤修あるに付き、去、大正６年(1917 年)に１７回忌法要を営む際に主幹の立場の関係で、南條学長、寺本教授と相謀り法要の開催、能海寛遺稿の刊行を計画、寺本氏と編集に携わり、能海師略伝原稿が自分の手許に現存しており、昨日、文庫を捜し、幸いにも見つかったた

め、御因縁ある貴寺へ拝送すべきが自然と存じ、貴寺で追憶資料として保存されたい。」と綴られ、「寛師支那内地より南條師宛寄贈されたる西蔵経典等は南條師より、更に本学図書館に転贈され、尓後、本学書庫にて研究貴重資料として保存候。」とし、二白、として、「略伝原稿４葉は、南條師の直筆である。」と記されている。そして、浄蓮寺では、寛の５０回忌法要がしめやかに執行された。能海寛の横死情報を巡って半世紀の間に亘り法要を通して、さまざまな顕彰活動が展開されたのである。

その後、能海寛の誕生日から１００年経過後の昭和４４年１０月２０日付許可を得て、１０月２２日に、「年月日時分不詳死亡」として、戸籍から削除された。これを以って横死情報が解決した訳ではなく、多くの謎を秘めたまま２１世紀に課題を持ち越したのである。

16. 顕彰活動の推移

明治３６年(1903 年)、哲学館より講師の称号が寛の生前中の業績に対して贈られた。これは、哲学館卒業後１０年経過した者で、しかも、卓越した業績を挙げている者へのみ贈呈されるものといわれている。

行方不明となった寛の命日は、南條文雄博士宛の最後の音信の日付を以て明治３４年(1901 年)４月１８日と本山で決定された。それ以降、数えて１７年、大正６年 5 月 1 日、故郷浄蓮寺では、寺本婉雅氏を迎えて 2 回の記念講演と１７回忌法要がしめやかに執り行われた。

この法要に先立って、能海寛追憶会（私立真宗大学内）では、『能海寛遺稿』が寺本婉雅氏を中心に恩師、友人など多くの関係者の協力で同年４月３０日に出版され 17 回忌法要に間にあった。大谷大学で行われる「17 回忌追悼法会」は、当初は、5 月 6 日の予定が、南條博士の満州での巡回の都合で 5 月 20 日に延期となった。大学では、追悼会に合わせて追悼記念展覧会が開催され、能海の遺品が浄蓮寺からも提供され厳かに開催された。

昭和１７年(1925 年)１１月４日付、本山より西蔵入蔵で殉死した寛師に対して、『大僧都』の追贈が伝達された。寛の４０回忌法要が同年１２月５日、浄蓮寺にて勤行された。

昭和５１年(1976 年)１１月２８日、浜田市金城町波佐、浜田市金城民俗資料館庭に『郷土の傑人顕彰板（能海寛・島村抱月）』が波佐文化協会の発起で地区民の浄財で建立された。この頃から寛に対する業績が再認識されるようになり、テレビ、新聞等で次第に報道されるようになっていった。

昭和５３年(1978 年)１１月３日、金城町歴史民俗資料館のオープンに伴って能海寛遺品資料の寄託を受け、『能海寛資料』として展示して以来、寛の業績をＰＲしている。昭和５５年９月２４日、ＮＨＫ松江放送局制作『島根人物伝・能海寛』（１５分番組）が放映された。

昭和５６年(1981 年)１１月３日、波佐文化協会主催で『ラマの都チベット写真展』及び『世界の屋根ラマの都を訪ねて』と題して、講師・ＮＨＫプロデューサー上野克二氏による講演会を開催し、チベットに対する理解を深めた。同年１２月に能海寛顕彰会（会長・小森信一氏）が結成され、町内外から多数の協力を得て『能海寛師顕彰碑』が昭和５７年６月６日、寛の誕生した浄蓮寺の境内に建立された。顕彰碑の除幕は、関係者多数の参加のもとで、甥の水野観月氏と姪の能海モモエさんの 2 人で執り行われた。

昭和５８年(1983 年)２月２３日、ＮＨＫ松江放送局制作『知られざる先駆者・探検家　能海寛』（３０分番組）が中国管内に放映された。

昭和６２年(1988 年)３月に能海寛資料刊行会から、『チベット探検の先駆者・能海寛』の絵葉書カラー版（８枚１組）が発行された。また、同年３月２７日には、能海寛の足跡を訪ねるドキュメンタリー番組『中国大秘境』（２時間番組）がフジテレビ系列で全国放映された。これは、日中国交回復１５

周年を記念しで俳優の西田敏行氏が能海寛に扮して、寛が旅行した中国西南部の四川・雲南・貴州の三省が紹介された。

昭和６２年(1987 年)８月２２日、文学部名古屋大学教授（当時）の山口瑞鳳先生を招き、リーダー養成講座『波佐寺小屋セミナー』（波佐文化協会主催）により、第９回講座『能海寛と東洋哲学』と題して、講演を拝聴しチベットの歴史、仏教文化の発達について学習した。この時に、金城町歴史民俗資料館に展示中の能海寛将来品のチベット文献を閲覧頂き文献整理に助言を受けた。

寛の生まれ月、５月を以て昭和６３年(1988 年)５月１日から１２月２８日まで『能海寛生誕１２０年特別展』が金城町歴史民俗資料館て開催された。この特別展はチベット語大蔵経、仏典、仏具、著書、手紙、日記、研究ノート、遺書、愛用の尺八、印鑑、旅行許可証、資料写真、出納帳、参考書籍類、チベットの写真、中国雲南省、四川省などの写真、その他、未公開資料多数が展示された。

能海寛を題材とした、テレビ放送、出版物、卒論テーマ、能海研究にと、今日、多くの人々に活用されるに至ったことは、喜ばしい事である。

17.「能海学」として後世へ伝える

能海寛の生きざまは、現代の不透明な時代を生き抜く指針としても、物の考え方、発想力においても大いに触発させるものを潜めている。仮に、「能海学」として位置づけることが出来るならば、能海寛の西蔵探検行は途切れる事無く後世へ語り継がれるであろう。

能海寛は、宗教家として東洋哲学者、思想家、冒険家、巡礼探検家、経典翻訳家として活動した学僧である。寛の出した最終結論は、西蔵学（経典）の研究に尽きると書き記しているのである。

平成７年(1995 年)１月２２日、波佐文化協会が全国へ呼びかけて「能海寛研究会」の発会式を能海寛のふるさと、浜田市金城町波佐・ときわ会館において開催した。

能海寛の中央アジアでの探検コースを辿って中国１１省府、シルクロード、西南シルクロード、チベットなど中国西域の研究をテーマに、機関紙『石峰』を発行して会員の研究発表の場としている。また、２ヶ月に１回奇数月に開催している定例学習会、年次大会、フォーラム、研修旅行など各種事業を実施し、能海寛の生涯に亙り書き残した論文、国内旅行の紀行文、中央アジア探検旅行記録等を基に、地理、歴史、政治、宗教、風俗、人情、言語、商業、農業、物産など６２項目にもわたる情報が、会員研究テーマに幅広い研究ジャンルを提供している。

能海寛の往復書簡 300 通を精読すると色んな情報が読み解ける。封筒の宛名書き、肩書きによって、差出人との親密度や上下関係も分かるし、その人たちの人間性も如実に表されている。前島密が創業した郵便事業は、20 年を経過して、ほぼ郵便の創業期を脱して、発展期に差し掛かっていた時代である。今日のダイレクトメールに象徴されるような機械的に印字された郵便物と比較して、筆書きの温か味やエンタイヤとしての味わいも一入のものがある。

また、寛のアリバイ証明に書簡が重要な役割を担っている。寛が差し出した書簡は無くとも、相手からの返信により、その時点で何を考え行動を起そうとしていたのかが、ある程度は、判断されるからである。一世紀後に、こんな形で多くの人々に書簡に目が通されるとは考えたこともなかったと思う。対話と違って、書簡は、文字により相手に分るように伝える通信手段、即ち、文章によるコミュニケーションである。一通の書簡の重みが読む人にひしひしと伝わるのである。

明治２２年９月から書き始めた『春秋日記』というタイトルで 10 年間記録した日記類は、関東大震災などで慶応義塾、哲学館、南條博士の蔵書などの歴史的資料が消滅した。能海の日記によって現在改めて当時の状況が判明している。

平成１１年(1999 年)には、能海寛生誕１３０年とチベット壮途百年を記念して数々のイベントやフォーラムを開催しましたが、平成１１年(1999 年)５月には能海寛の全身立像（彫塑）も完成しました。今後は、知的国際交流を目指した「能海寛記念館」の建設運動を推進すると共に、北東アジア、中央アジア、シルクロードの全国の研究機関とも連携して国際交流の輪を拡大していかなければならないと考えるものである。

１５年間に能海研究が進んで行く中で、資料の劣化が一番心配であった。西洋紙は一世紀で酸化が進行し、紙料本体が退化して無くなり磨耗して行くのである。能海寛の資料も、ここ３０年間の経過を見守る中で、その中の一部分で紙自体が磨耗し、折れ目が切れる、閉じ糸が切れるなどの障害が現れ出したからである。今の時点で完全に製本化しておけば、これから１世紀先まで、貴重な文献を完全な形で後世に引き継ぐ事が出来るのである。能海寛資料は、寛本人が、生前中に自分が帰国するまでの間は、資料を自由に活用願いたいという意思により、遍く公平に研究者に文献資料が提供できる様にするため『能海寛著作集』の刊行に取り組み５年の歳月を費やして平成２１年秋に完結した。

今回、ＵＳＳ出版のご支援、並びに歴史家・金子民雄氏の監修の下に『能海寛著作集』全１５巻・別巻(総合索引)（全１８冊）の完結を迎えました。思い起こせば、平成１６年(2004 年)の第１０回能海寛研究会年次大会に金子先生を記念講演のゲストに迎えるに当り、著作集の発刊の提案を頂き、早速、年次大会の総会に図り発刊事業が承認されたのである。あれから５年の歳月の中で、紆余曲折の中、目出度く完結を迎えることが出来ました。この間に、ご支援をいただいた能海寛研究会会員の皆様方に感謝の誠を捧げます。特に「総合索引」を作ったことで、研究導入が容易になるものと確信します。『能海寛著作集』の刊行が能海寛研究の新たなる出発点となり、「能海学」の構築に一層の拍車が掛かることを念願いたします。また、日本は元より、中国はじめ諸外国でも活用されることを期待いたしたいと存じます。

『能海寛著作集』が広く世の中に浸透して来ることによって、所期の目的である「能海学」の定着と発展が期待される。能海寛の僅か３３年間の生涯の中で成しえた業績の過程を検証することで、人間としての生き方の方向性を学び取る事が出来ます。著者も４０余年の歳月を能海寛と向き合い触発された一人でもあります。

平成元年に出版した「チベット探検の先駆者『求道の師　能海寛』」波佐文化協会刊を大幅改訂して「チベット巡礼探険家『求道の師　能海寛』」として、改定カラー版を出版いたしました。今回、電子版（ＰＤＦ）を発行するにあたり、写真データは掲載出来ませんでしたので、写真データは、「改訂カラー版」(300 枚)を参照願います。

まだまだ研究半ばではありますが、『能海寛著作集』も完結したこともあり、この書籍が能海研究に、ご参画いただく方々の導入口の一助にでもなれば幸いでございます。

（能海寛研究会事務局長　隅田正三）

求道の師　「能海寛」の注釈

註１．**能海家の系図・寺歴**は、弘治２年１月１日に青尾京羅瀬(現・浜田市弥栄町)で真宗道場を能海蔵之助が創立が浄蓮寺の開基という。永禄１１年に横谷(現・浜田市金城町波佐)の三艘船に移り洞円と改名した。その後、二男の慶順が東谷村の畑の地へ移転する。慶長２年に現在地の天頂山へ入院して本堂建立し西派下赤名村の西蔵寺下となる。慶安元年７月２２日、市木村(現・島根県邑智郡瑞穂町)浄泉寺下となる。寛文１０年本堂再建立。宝暦６年東派本山へ帰山直末寺となる。安永９年４月２２日、鐘楼門建立。第９世法界、１０世法雲(法界の長男)、１１世徳言(法界の二男)は、前坊守が逝去したため後坊守を丸茂(現・益田市美都町)の光雲坊からユク

ノが入院徳言は、その後、寺務２年で逝去。その為、刈屋形村(現・広島県山県郡北広島町)の専光寺より第１２世法幢が慶応２年に入院、１０年間寺務の後、明治８年８月１６日逝去する。同年１２月４日、有福村大金(現・浜田市大金町)の谷家(佐々木姓)より第１３世謙信が入院する。寛の兄弟は、徳言の子法言(千代摩)、開教(出生時に死亡)。法幢の子法流(寛)、初子、斉入(斉)。謙信の連れ子壽恵(末子)、皆乗(登)である。法言の家内は、有福村大金の佐々木喜代作の娘吉子である。寛の家内は、浜田東屋の佐々木吾市の娘静子である。謙信の連れ子である末子と静子は従妹関係である。謙信や登が寛に姪の静子を許婚者(いいなづけ)として引き合わせたのも理解ができるものである。

２．**「浜田地震」**は、明治５年３月１４日に発生した震度７の激震で、５３７人の死者を出した。強震の区域は、２，２００㎢。消失家屋２３０軒、倒半壊家屋９，４７８軒の大被害を発生させた。

３．**「石見学場」**は、当初旧浜田町（現浜田市）の明清寺など６箇所の寺院を持回りで開講されていた。寛が学んだ石見学場時代は夏場のみ夏期講習会が開講されていた。

４．**桑門巌**は、父桑門志道氏（広島別院）の子息で、寛が広島進徳教校時代に志道氏が後見役として下宿させていたことから親友となった。京都普通教校、東京時代を通して親交を深めた。

５．**「反省会有志会員」**は、京都普通教校を中心に仏事禁酒運動を掲げ組織された団体である。明治１９年４月の創設で、寛は、当初の反省会有志会から参加していた。同年５月２９日付で発行された会員証は第８３号であった。その後、「反省会」となり１０月１０日付で誓約書を提出し永久会員となった。明治２０年７月３日に制定された詳細の内容は、「反省会雑誌」第壱号(明治２０年１２月発行)に掲載され、正会員９９名、賛成員３６名でスタートしたことが記されている。

６．明治１９年６月に、**「コレラ」**が流行し普通教校が休校となり、寛は、その際に学資金調達を兼ねて郷里に一時帰郷した。

７．**「教学論集」**は、明治１６年１２月に、無外書房から創刊された宗教界を代表する仏教雑誌である。明治２２年２月に発刊された第６２号で休刊となり、８カ月後の２３年１１月に第６３号から復刊して「教学会」が引き継いだ。これまでの編集内容が大きく変容した。

８．**「ニュー・ナショナル・リーダー」**第３巻は、京都普通教校時代に本格的な英訳に取り組む基本的な勉強が、この本であった。寛は、表紙に明治１９年１２月３１日、京都普通教校、能海寛と英文で記している。このことが、２年後のE.C.S(英文会)設立の原動力となった。

９．**「普通教校人士」**は、明治２３年１１月１２日印刷された、普通教校沿革記、普通教校人士、職員、教員などの情報を掲載。特に普通教校の沿革で、西山教校を設置後、明治17年８月に普通教校設置の原案が承認され、１８年２月に開業され式典は４月１８日に挙行された。明治19年１月より米国人チヤレス・ヘンリイ・ボールドウイン氏を仏教学校に採用する。翌年より英国人セッパード氏夫妻英語教授となる。

普通教校の精神は、「僧俗を問わず宗派を分かたず遍く佛弟子を教育して広く同胞の主義を拡張せんとするに在り」明治２１年１２月、大学林の発布により１２月２５日に閉校となる。よって１２月１１日に知恩院門前にて同窓の記念撮影（２６０名）をおこなう。

10. **オルコット氏**は、『仏教問答』を発表した。明治２２年２月２８日に横浜へ来日して東京築地本願寺、京都、仙台などで日本の禁酒運動に賛意を表す講演を行った。

11. **「懺悔の親書」**は、明治２３年２月２７日に義父謙信へ宛てた書簡で、寛が明治１８年末に京都へ上京して、普通教校へ転入学した際に、郷里の父へ委細を報告していなかった。また明治２２年９月に檀家一同から学資金の調達を受け、大学林文学寮高等科卒業せずに京都から東京

へ出て慶応義塾へ入学したまでの経緯を詳細に綴り、釈尊の金言を引用して、過去の事績を振り返り父親に懺悔している記述である。

12. **エドウイン・アーノルド卿**が「亜細亜の光輝（こうき）」を発表後、明治２２年１１月頃には日本へ漫遊したい旨の書簡を英国から発信している。来日したアーノルド卿は、明治２３年２月１９日、慶応義塾の福沢諭吉に招かれ来校の際に令嬢を連れ立って現れた。寛は、３月下旬の日曜日に２回、アーノルド卿の住まいする麻生赤坂今井町４１の自宅を訪問して英語の指導を受けた。その際、令嬢と親しく会話を交わしている。その模様の詳細が「Wisdom and Mercy」に英文で詳細が記述されている。アーノルドは、帰国前に寛の紹介で京都の吉谷覚壽師に師従した。

13. **Ｗ・ウエストン**は、南アルプスの父と称される登山家である。寛との出会いは、慶応義塾の教室でクライブ伝の英語教育を受けたことに始まる。明治２３年２月２８日の授業中、英国のダービシャー県の英字新聞を持ち来て「将来は英字新聞を読みたるべし」と学生に勧めた。ウエストンが富士山に２３・２４・２５年と３年間に３回登山していることと、寛が富士山登山を２４年７月に実行していることは、２３年２月に慶応義塾でウエストンに出会い「数々話たりき」という記述の中身にチベットと富士山の標高関係が会話され触発されたものと考えられる。

14. **桑門志道氏**は、広島市大手町の真宗大谷派広島別院の住職で、本山役員として全国で活動した。

15. **「春秋日記」**（Ｍ２２年９月１４日～１０月２４日）

能海寛は、明治２２年８月から『春秋日記』を付け始めたのであるが、鼠の被害に遭い８月１日から９月１３日までの間と１０月２５日から１０月３１日までの間の日記が欠落している。したがって、表紙が無いために書き出しの趣旨が判明しないのである。寛は、１ヶ月毎に巻数を重ね２～３か月毎に一冊綴りとして、号数を割り付けていた。おそらく９月は、１号の２巻、１０月は３巻であったと想像される。この期間は、京都・普通教校に在学中で、９月１４日、北寮６号久冨米次郎、村上寅吉、西原荘十郎、平尾、能海寛の５名同室。９月２６日には、入寮前に写しおいた課業を月曜日から土曜日まで学科と教師名が詳しく記されアメリカ人のセッパード氏、ランバート氏などの名前もある。この頃は、英文会を主宰して『New　Buddhst』を発刊していた。友人との手紙は全て英文でのやり取りを申し合わせていた頃である。

「春秋日記」（Ｍ２３年１月１日～２月２８日）

能海寛は、天蓮、石峯、焼寛、天頂山、洞達、石峰という称号を既に考えていた。寛の寄稿論文は、そういった名称で寄稿している場合がある。注意が必要である。１月１３日に慶応義塾へ双書と履歴書を提出する。この日の日記に寛の請人は豊島勝太郎氏であると記述している。１６日、東君の印度での様子を記述している。１８日、慶応義塾で入学試験を実施、豫科３番に入るも、上位の再試験を望むも聞き入れられなかったと記述している。１９日には「日本博士全伝」を読む。２９日、「英文をもって主義とす。」と日記に書き、「Ｗｉｓｄｍ　ａｎｄ　Ｍｅｒｃｙ」Ｎｏ．１ｓｔを作り、主義を述べんとする。東京で「英文会」の立ち上げの構想があったと考えられる。３０日、寛は学業のことで悩んでいた。「実業も盛んなるに又必要なるに重くに使ふて長に晩強しめ未へ望みなきかな、一層哲学館に入り来年８月卒業してよければ福沢の大学に入りやめれば返る又哲の方なれば金安く佛友も出来種々よし只福塾も大學に入る目的なりは何は予に望みなし予は己に入るは只一寸位置のみ得たきなり年限もよそ５～６年必定なれば……」檀家一統との契約は４年半の年限であることから到底慶応義塾を卒業までの学費が続かないこと。哲学館ならば年限が３年と短く経費も少なくて済むという利点でどちらを選ぶか、相当に迷っていた時期である。３１日、契約と学資金の為には２６年には卒業することが必至であったが、２年間は本山へ支援を仰ぎたいとして「福の大学を卒業すべし」と結論づけている。このことについて、寛は本山に対しても、文学寮に対しても、又将来の目的に対し

ても、父母有志へ対しても６年には卒業すべしと結んでいる。意を決した寛は２月３日慶応義塾に行き、履歴書を出して豫科２番の一に入り早速授業を開始した。２月１０日、「予学成就の上は仏教大学を設立し諸業合同にして南條文雄君を校長に命じ文学科を置く選科を置きて佛学専門となす生徒は僧俗を撰ばず資本は本山及び仏徒とす。」と将来構想も記している。２月１９日、Ｅ．アーノルド（英国人・詩人）が令嬢と共に福沢諭吉先生等数名と連れ立って来校する。Ｅ．アーノルドより午後３時より演舌堂で化学の授業を受ける。２０日、Ａ．ロイド（米国人）より「クライブ伝」音読の授業を受ける。２４日、物理クライブ会話、今日は、Ｗ．ウエストン（英国人）より授業を受ける。勤惰表が出る。２５日、英作、Ｅ．アーノルドより「亜細亜の宝珠」について考える授業。２６日、物理クライブ伝音読、Ｗ．ウエストンより受ける。２８日、物理クライブ音読Ｗ．ウエストンは郷里のダービシャー県の英字新聞を持って来て「追々日本も英字新聞を読むべし・・・」と語ったと記述している。これらの一連の日記には、福沢諭吉が西洋文化と英語力の高揚のために慶応義塾へ外国人の宣教師を登用していたものと考えられる。『英文日記（智慧と慈悲）』の英文を読むとより詳しく記述されているので、併用してご覧いただきたい。ウエストン研究者にとっては重要な在日中の記録となるであろうし、慶応義塾においてもこのようなデータが残されているであろうか。

なお、寛は、慶応義塾在学中に東北方面へ紀行をして、『満もぼろし』に書き記している。

「春秋日録」（Ｍ２４年１月１日～２月２８日）

前年末に慶応義塾を中途退学した寛は、１月１５日に哲学館に転入学し入館金と月謝を納め、１６日より授業を受けることとなった。１月１３日には、郷里の妹スエが逝去していた。この様子が弟の斉入より手紙で知らされたのが１月２５日であった。非常に嘆き悲しんでいる様子が日記から読み取れるのである。富士山登山までの半年間は妹スエの死後も別離の念が強かったのである。３月～８月の半年間の日記が未発見であるが『手帳記録』と関連しているので併用して読んでいただきたい。この年の７月には、単独で富士山へ登山し山頂で野営してチベット行を決意することになる。下山以降、一心に西蔵研究に専念していったのである。この日記は、鼠の害により表紙が３分の１損傷し、尿害で読みにくくなっている。なお、日蓮上人の遺徳を訪ね身延山を登山したことが『世界に於ける仏教徒』の中で記述しているが、富士山と同一方向なので、この時期、一緒に訪問したものである。

「春秋日記」（Ｍ２４年９月１日（２６巻）～１０月３１日（２７巻））

９月２日の日記に、先月１６日、「予が父法幢師１７回忌祥月命日にて実に大切の忌日精進に当日を守るべき処心に思うも如何にせん旅行の途次にあり不得止請日に送光することを得ざりしば実に遺憾の至り由て本日暫くに忌日として朝大経上巻、午後同下巻を音読す」と宗教家として固辞するものを抱いている。１０月６日「哲学研究会」へ入会する。

この日記は、鼠の害にあい表紙が２分の１損傷しており、しかも鼠の尿害により墨字が読みにくくなっている。

「春秋日記」（Ｍ２５年３月１日（第１６号３２巻）～４月１日（３３巻）～５月１日（３４巻）～５月１９日）３月１０日に井上円了の巡回の話があったことを記述している。この頃は「英文会」のことを作文に奔走している様や「志も高く目的もよく執心もあり不得手のものゆへ仕様もなきこと又仏教徒中にても主に青年のものの・・・」夜床につくもねむられず１２時すぎに至る。と記している。３月２０日には三省堂にて「二河白道の比喩」の英文印刷をするために問い合わせをするも、はねつけられ大いに落胆する。４月１８日、井上円了館主曰く「学問は品位高尚になすにあり」と話されたと記述している。４月末には「中央アジア」について研究を始めている。５月以降の日記は、現在、発見されていないが、７月１日には

高等科下級を修了し、８月には「東京南東紀行」伊豆七島めぐりをしている。

「春秋日記」（Ｍ２７年１月１日（第２４号・５４巻）～１月３１日）実は、１月３日に「口代（くちがわり）」という遺書を書き残しているのだが、『春秋日記』では四行ほど寺務のことのみを記入している。元旦には大内青巒氏と南條文雄氏に書面を出しているので寛のチベット行のヒントが綴られていたものと思える。１月４日には東温譲君の追葬勤行をなす。そして、１月２７日には「口代」の表紙の内側に「万が一の時は遺髪を遺体として葬送されたい。無事であれば吉祥」と書き加えている。しかし、当日の日記は白紙である。寛の心中を察するには「日記」と別タイトルで記述されている多くの遺墨との付け合せが必要なのである。１月末には「純正哲学」の展開図式を書いており、後に未発表の『純正哲学』が記述されている。また「御座講中規約」「小寄講中規約」「教社講中規約」の草案を書き記している。

「春秋日記」（Ｍ３２年１月１日～１月２３日）中国で新年を迎えた寛は、元旦の仏壇への供え物などをスケッチしている。異国での元旦の日記の記述には、元旦を詠んだ一首「ゆ免のよも多どるたびじのゆめとてもよきゆめむすべゆ免のなかにも」と前途を詠んだ二首「月と日と我身もともに東よりことしのくれは西におちつけ」「月も日も我身も西に入りてこそ東のそらにまたのぼるなれ」と書き始められている。毎朝起床後は勤行を行っている様子が日記から読み取れる。また中国の人々と年賀を交換している様子や日本の恩師、友人、実家等に手紙や葉書を出したデータも詳しく記述している。１月２３日の項に、「日記帳を新に作る故に其方に記す」とある。おそらくは、『官話記一号』（中国三峡）のことと思える。最後の日記ページ以降には金銭出納が詳しく記されている。先ず出発に際しての国元出発餞別、恩師友人からの餞別や本山より派遣費支出などの総合計で１，０５７円９８銭と詳しく記している。

16. **「世界に於ける仏教徒」**は、明治２６年１１月に自費出版された能海寛著作の論文である。宗教の大革新、新仏教徒、宗教学上の仏教、哲学上の仏教、歴史上の仏教、道徳上の仏教(戒律論)、比較仏教学、サンスクリット(梵学)、仏教国の探検・西蔵国の探検の必要、仏教徒の連合、仏蹟回復、総会議所、巡礼、海外宣教、仏教学校、仏教翻訳、本山政論第一、本山政論第二、の全 18 章からなる。大内青巒師が序文を寄せている。千部印刷され、全国書店でも販売された。この論文が、チベット派遣僧の決定に大きく作用したことは既定の事実である。
17. **「波佐倶楽部」**は、能海寛が郷里の檀家より学資金によって修学したことによる檀家の子息への貢献を含めて、地域の青年等に得た知識を享受したい気持で立ち上げた組織で、自ら事務局を担当して、禁酒運動、倹約貯金を推奨し、世界史の勉強、地方史の編纂を手掛けた。
18. **「私立支那語学校」**は、明治 28 年 9 月麹町区平河町に創立され宮嶋大八氏が主宰する中国語の学校で、詠帰舎と称していた。明治３０年４月１日に寛も入学し南條博士宅から通っていた。
19. **「渡清日記」**（Ｍ３１年１０月４日～１２月３１日）　この日記は手帳形式の青色の薄いタテの罫線が入っている。前半に『渡清日記』、後半に『春秋日記』が一緒に記載されている。チベット探検行の許可が本山から下りて、いざ故郷を旅立つ日から『渡清日記』が始まっている。１０月４日に寛は、午前６時に起床して、勤行終わり、村民多数に見送られて浄蓮寺山門を８時出発。広島県境で家族や愛妻静子に見送られて旅立った。この時に詠んだ「雲を得て　辰身のいまは　是ひもなし　こころは矢竹　寅若れなる」という歌を残している。１０月１３日「西蔵探検見込書」に目的、通路、西蔵、言語、年限、費目、履歴を編纂して本山へ提出。１５日には高島大円師を訪問。小香炉を求めて帰り、夕事を務め「外国にのり出る身のいのりにはくにゆたかなれ波しづかなれ」と詠んでいる。

１０月２３日、本山に参り石川舜台氏を訪問し『世界に於ける仏教徒』及び寺務改正の為の献

白「議案」(12 枚半）を渡す。氏は一々みて受領せり。入蔵難・至急取り運びの事、旅券東上等のことを１時間ばかり懇談したと記している。２４日、「旅券下渡願」「渡航理由書」を総会所へ出す。２５日、「御届」に、昨日正午までに指令をお願いしていたが、沙汰がなく京都での居食を続けることが出来ないため神戸に下り自活の道を相立るので住所を通知申し上げる旨を記して、総会所へ提出した。郷里を出発して早や２０日が経過していた。本山から渡航の決済がなかなか下りないため寛は困窮している様が記述されている。１１月１日、太田氏に逢い「今さら引きあげて帰国する訳にも行かず」と東上の経費の支援を懇願する。６日、東京行きのための経費を頂き、夜行列車で上京した。８日、外務省へ出向き「特別保護」の話をする。９日、「時論社」を訪問して中国滞在の要人の紹介を得る。９日、午後１時より神田の宝亭にて安藤弘、境野哲海、田中治六、二石賤夫、三島中洲、梶宝順、渡辺海旭、海野詮教、梅原融、桜井義肇、秦敏之、杉村広太郎、近角常観、宝閣善教、古田復之、南条先生、高嶋大円、能海寛の１８名で送別の宴を開く。南条先生より餞別や薬７１包を拝受する。１０日早朝、宮嶋大八氏ほか５名の見送りを受けて新橋駅を出発京都に向かう。１１日、本山へ行き服、ダライラマ１３世への親書、東上費往復１０円７８銭、並びに西蔵探検費１千円の内３分１、３７０円を受領した旨詳しく記述している。翌１２日、１１時に神戸港から西京丸で出航した。門司港、長崎港を経て上海港に着く。１７日、領事館に行く

１８日に「護照願」を清総領事代理の小田切氏に出すも刷置きなしのため後日漢口へ郵送されることとなった。上海港から１３か所目が漢口港である。１１月２８日、寛は中国用の名刺を「大日本浄土真宗本願寺石峯」と肩書きを付けて注文した。２９日、反省会へ「西蔵探検の方法」と題して原稿６枚を郵送する。１２月７日、宜昌港を出航。これよりは難（たん）が多く、１１日はあいにくの日曜日で「今日一日はやく坊主の日曜だなどとぬかし馬鹿の頑固の休日を固守し・・・」一刻も早く目的地に急ぐ寛には堪忍袋の紐を固くしめなおさなくてはならなかった。船の中においても本国へ手紙や葉書を頻繁に出していた。年末には四川省酆都県半里上流北岸碇泊の英人の船室にて越年する。

20. **「官話記一号」**(明治 32 年・中国三峡)は、明治３２年１月１９日から２月２３日までの間に中国語の指南を金氏から受け中国語の発音学習の模様を記録している。明治３１年１２月 7 日に宜昌を出発してから西陵峡、巫山峡、瞿塘峡の三つの渓谷を船で遡上する際に５２カットのスケッチを記録している。特に、１５０間(270m)の引き綱で「船を引上げる図」と「頭取と曳子の図」は、とても貴重な記録である。

21. 灘(たん)とは、三峡（西陵峡(せいりょうきょう)、巫山峡(ふさんきょう)、瞿塘峡(ふとうきょう)）には、３つの渓谷があり、船の通行に難所のため人力による引き綱で船を引き上げる箇所の事を示す言葉である。宜昌、狭口、平善覇、南沱など船着場に到着毎に風景を５２カットでスケッチをした。１２月１０日のスケッチに「船曳蟻群曳夫」と記しているように狭谷の難所を難(タン)と呼んでいた。新難では 150 間(270m)の曳綱に蟻の如く曳子が群がり頭取が指揮棒のような物を握って曳子を采配している様がスケッチされている。また、狭い所の難では幅１丁内外と記している。西陵峡は別名で巴峡、黄牛峡とも称していた。

22. **「飛越関碑記(ひえつかんひき)」**(M３２年５月・峩眉山探検行程記録）は、「第八号」と表記されており、「飛越関碑記」に記録が始まっていることから飛越関碑記と名づけている。表紙の裏には５月６日 大象嶺より清渓縣を眼下に見遥かに蛮山を望む図を描いている。９日には大度江と阿片畑を描き、飛越嶺より大雪山を描いている。１０日には大度江谷越えなどの４カットのスケッチを描いている。

５月１日、峩眉県草鞋市街から５月１２日、打箭鑪までの 750 里を工程図に詳細に記録している。

この工程記録は、タテの罫線に中央部に横線を引き都市、街、村の名を大きさに区別して、記号の下部に都市名を書き、河川、戸数、地形、産業、特産などを記録している。上部には、日時、発着時間、山の地形図と標高など詳細に記録している。特に、罫線一行分は中国の１０清里として記録している点に注目したい。

この記録の中で、重慶から成都まで１０２０里、成都から嘉定まで３９０里、嘉定から峩眉まで８０里、峩眉から雅州まで２２０里、雅州から打箭鑪まで５３０里、合計２２４０里としているが、この外に新都県往復 10 里、峩眉山登山上下２４０里、總合計２５６０里と記入している。

打箭鑪に午前１０時半に到着。油海椒、醋米、醋葱、塩、皮饅頭、焼パン、オモユ汁を食べ、午後には市中を散歩し砂糖、小豆を求める。ラマ寺(薩伽寺)に至るも寺の入口に犬の居ることに閉口と書いている。元々犬は苦手であったのだろう。

本山上申書の発送表によると上海から第１回目を明治３１年１１月１８日付で発送している。第２回目は漢口、第３回目は宜昌、第４回～第６回目は重慶、第７回～第８回目は成都、第９回目は峩眉県、第１０回目は打箭鑪、第１１回目も打箭鑪から５月２８日に送付し翌 29 日に

５月３０日には、「干珠尓、丹珠尓のデゲーと称する地(折多より北行１５～６日里程、土司あり)にて３００余の全部１，０００両計りにて買える由」と記している。これは、彼が求めている西蔵大蔵経典がデゲーで日本円１，４００円で購入出来るということである。能海は西蔵派遣費の総額１０００円であり、到底不可能な金額であった。第２回探検前にデゲー行きを諦めた理由が資金不足にあったと思われる。

６月１日、朱氏から蔵語を学ぶ。8 日には拉薩近方図を、９日には清国全地図の大略図を製作する。この頃から西蔵の歴史を克明に調べている。１６日には頭蔵地図の製作。１７日には打箭鑪及び裏塘地誌を偏す。１９日には巴塘(ぱたん)、中甸(ちょんでん)、維西の地誌を書く。２０日には江卡(ちゃんか)、乍了(ちやや)の地誌を書く。

７月１日、軍糧府の使者が来て刺麻寺への紹介はラマ大僧不在、叉寮台劉明府は遠来の佛友に面せざる旨の通告を受け、寺本氏は各地の支那官吏の保護に由りて行かんとし、能海は支那僧風にして入らんとし大いに議論する。６日ハカマ下、毛皮、紙等を買い準備完了。７日第１２回上申書や本国の南條博士や静へ手紙を出すと共に、麻布包の蔵佛泥８躯、観音７躯、釈尊１躯、蔵文経典１６部、(小冊)、蔵寺用風鈴一握(金製)、木塔一個、数珠蔵珠一連・五台山珠一連、針□子見本数ケ、日記帳凡４冊〔第四号(語学)、外に１冊、第七号(重慶・成都間日記)、３１年日記〕。これらのものを朱氏に託して重慶領事館宛てに送付させていた。

「清代疆域沿革」の項では、蒙古四大部①漠南、内蒙古②漠北、外蒙古③漢西、厄魚日特④青海蒙古。「甘粛一班」、「思想の変遷」(学問に付きて)１２月２２日に記述したもの。１.学問ハ何ノ為ニ学ブベキモノヤ　２.普通学ノ必要３.欧米布教策４.英文研究時代５.翻訳ニハ梵学ノ必要ヲ感ジタルコト 6.梵文経典ノ不足ヲ感ゼシ時代７.自動的東洋学研究必要８.西蔵行の感念９.西蔵学ノ必要。の項目で西蔵文の必要を結論付けている。

明治３３年１月７日に第１７回上申・打箭鑪、２月２５日に第１８回上申・打箭鑪、６月１７日に第１９回上申・打箭鑪、７月２８日に第２０回上申・蘭州、１１月９日に第２１回上申・重慶、１１月１２日に第２２回上申・重慶、明治３４年１月１日第２３回上申・重慶、１月１７日第２４回上申・重慶。

明治３４年１月３１日に「温泉ノ八景」を書き記している。そして最終の頁には明治３３年１１月１日から３４年１月２３日までの毎日の事象を罫線一行に納めて書いている。

23.**「瀘定橋」**は、中国四川省の大度江に架かる吊り橋で、「第八号」の表紙にスケッチされている。寛は、この橋を明治３２年５月１０日に通過した。橋の長さ３１丈１尺、高さ５丈、幅９尺と

記している。瀘定橋からダルツェンドまでは２日の距離である。

24. **峨眉山**は、成都の西南に峨眉山市がある。主峰万仏頂の標高は３,０９９ｍで山の形が眉のように細長い形をしているところから峨眉山と李白が名づけたという。後漢の時代から寺院が建てられ、中国では普陀山、九華山、五台山とともに中国仏教の四大名山に数えられている。最盛期は、１００以上の数の寺院があった。清代以後は荒廃し２０余りの寺院となったが、信仰の山として参拝者は多く、麓から山頂まで石畳の山道が整備されている。報国寺は明の萬暦癸卯年（１５４３年）の創建。会宗堂といったが、清代に改称された。現在は、報国寺、伏虎寺、清音寺、仙峰寺、臥雲庵などがある。

25. **「諸葛武侯（孔明）祠堂碑文」**は、諸葛亮（１８１～２３４）字は孔明。山東省近南県の人。劉備の三顧の礼を受けて軍師となる。蜀王朝成立後、劉備の遺児劉禅を補佐しながら曹氏の魏王朝に挑戦しつづける。「武候祠」は、諸葛孔明を祠る。成都の南郊２キロ、武候祠大街２３１号にある。孔明は、名を亮といい、「三国志」で有名な蜀漢の宰相（総理大臣）である。「天下三分の計」を進言したことで有名。おくり名が武候ということから「武候祠」という。碑文の拓本は、大きさは、縦 3.69m、横 1.4m(約千文字の拓本)で、一世紀前の貴重な請来品である。

26. **「丙第五号」**（Ｍ３３年・西蔵国仏像集）は、明治３２年１１月２０日より１２月１６日までの２６日間をかけて、打箭鑪にてⅠ佛、Ⅱ菩薩、Ⅲ鬼神、Ⅳ鎮守、Ⅴ梵神、Ⅵ国神、Ⅶ人神の七つに分類して、４０体の仏像の模写とチベット語、仏像の概略説明を記している。この中には、能海寛の請来品の仏像である「ヂャムバラ神」、「ミラレパ聖人」、「釈迦牟尼佛（触地印)」も含まれている。

27. **「ヂャンバラ神」**は、寛の記述によると「福神にして、大黒天なり。右手に袋。左手に蛇退治の具を持てり。西蔵人の最常信心す。クベーラの形相にして、ミラレパ深く信仰せり。」と述べている。ヂャンバラ神は、「梵神」に分類している。

28. **「西蔵語ボン教の無量寿経」**は、明治３３年４月２５日に邦人として最初にボン教を翻訳したものである。ボン教について寛が次のように記述している。「ヂエナバルは、ボン教の主神にして、黒色にして女の相好。一見、緑達拉の形に似る。又古来、西蔵国の鬼神を祭る。コロヲバは刺麻教に反して外に転回す。これ白教もとめ、これを後、刺麻教入りて改めたり。又釈尊をも説く。古来まで釈迦ありと。ボン教の開山の名なく、具さには蔵衛、中部西蔵、恐らくは、支那老子と同じなり。」

29. 能海寛が賞賛した「干殊爾（かんじゅる）」は、「甘珠爾（かんぎゅる）」と同じで、「丹殊爾（たんじゅる）」は、「丹珠爾（てんぎゅる）」のことである。「テンギュル」（丹珠爾）とは、「チベット大蔵経」の論部を構成する部分で、二つの部分から成り立っている。一部は、「カンギュル」（甘珠爾）で、釈迦牟尼の説いた教典で、仏教の教義と戒律を説いたまの。三蔵の「経」と「律」に相当する。二部は、「テンギュル」（丹珠爾）で、カンギュル（甘珠爾）に対する注釈と三蔵の「論」に相当する。

30. **「丙第六号」**（Ｍ３３年・第三次探検入蔵準備）は、明治３３年５月３日には次回入蔵準備。３月２９日、「弥勤勝願経」の翻訳。各国ノ佛教宗派ハ其支院トナス

１．宗教学ヲ研究大成シ、万国宗教大編ヲ編纂シ之ヲ一統宗乃助依大編トス　２．万国各宗教宗派ヲ以テ一統宗ニ入ル楷梯入門トナシ、宗教学ノ学判ニ依リ各宗教ノ正道発達ヲ謀ル　３．一統宗内容ニハ表ニ哲学、宗教学、歴史、倫理ヲ講シ、裏ニ信心、戒律（新律)、禅定、智慧ヲ修ム。(以上）としている。

31. **「在渝日記」**は、Ｍ３２年・第２次探検紀行記で、日記の中には、中国の高僧４名(玄蔵三蔵、南山道宣律師、慈恩大師、義淨三蔵)の業績と略歴を詳細に記している。

支那の農業については、四川省、西蔵、陝西省、甘粛省、新疆省、青海の農業について能海寛

自身の見聞したものを記している。「支那内地ノ農業ニツキテ予ノ正シク見聞セル所ナリ、予ハ未タ農学ヲオサメズ只日本ニ於ケル農業ヲ見テ支那内地ニ入レハ其見聞スル所ノ異同ヲ発見ス是レ予カ眼耳ニ触ルルママニ随テ之ヲ記スルニ過キズ」と謙虚な文面で書き出している。

先ず、四川省の農業は水田が多く水牛を用いる。水牛は日本の牛の２倍もあるも人には害を為さない。食物も２倍の分量を食べる。道光年中（１８２１年～１８５０年）まで、阿片は上等人種のみが印度辺より輸入するものにして高価なものであったが、この２～３０年の間に暖地における阿片の栽培が適地とあって、１０人の男子中６～７人の割合で、女子は１人の割合の愛飲者がいるという。阿片の栽培が年々増加して田畑の６～７割にも達しているという。四川の好田は阿片園と化せる「喫飲者の顔は青ざめ血色の無きことで一見できる」としている。

水田や阿片畑は水牛で耕し、その器具は、日本の鋤に比べて大きく馬鍬のごとく、その上に乗って曳く。大きさは日本の四倍もある。農法は、中農法なり。田地は２反から１町あり、畑は数十町あり、地質は火山土のごとく赤色を帯び肥料を与えなくても常によく出来る。地層深く粘着あり。農具は日本と同様なりと記している。

水車は、河の水流れを応用して直径３～４０尺の水車を造り水田に引く、あるいは人足にて踏み巻き上げる車もある。また、両人で陣取り紐をつけ遥か低地の水を汲み上げることや堤防で水を溜める方法なども記述している。

このほか物産、茶、水利、材木、市、田、苗植、田植、牛馬、草取り、開拓などについても詳しく記している。

西蔵の農業では、打箭炉より巴塘に至る道中での見聞したことを記している。麦は青稞と称する。一年１回収穫する。秋に種を蒔き半年は雪の下にある４、５月頃より漸く芽を張り七、八月頃穂が出て９月より１０月頃に収穫する。出穂期の七月頃に雹の為に被害にあうことが多く低地は被害が少ない。寛は、五本指にて掴み食事することを奇異に感じている。麺は小麦で、暖かい低地に作り巴塘は、その名産地としている。焼餅、麺は温飩を作り食す。

耕作は、二頭の毛牛にて鋤を曳かせ耕す。あるいは馬を用いる。肥料は殆ど牛馬の糞を与える。毛牛の毛の長さは一尺以上となり色は白、黒、斑で、角は長く屈曲し「い」の字形をなす。常に山に放牧して穀物を与えず。時として碗豆を与えることあり。「寒さに耐え雪中を行く霜夜も野外に寝て平然たり」、角は役に立たず「枯れ木の如し」と記している。皮は荷物を包み西蔵内地の草地を通過するに用いる。西蔵人の常食の一つに裏塘では四千五百人あたり冬期は日々四、五十頭の毛牛を食す。牧畜には羊を放ち、羊毛、羊皮は西蔵物産の主流なり。西蔵で最も恐ろしきことは、蛮犬なり。形大、眼色茶、毛は綿花を被る如く、寒さに堪え常に鉄鎖あるいは毛縄にてつなぎあり、知らざる人来れば鎖を力一杯に張って飛び掛る。他人の内に至ること殆ど出来ず。能海寛もこの蛮犬にはひどい眼にあっているのである。官の保護なき彼等放牧民は自治以て盗賊を防ぐなり。彼等と隊を組むときは、野外へテントを張り宿す。蕃人の家屋は屋根は平たき土間なれば、その所にて麦を乾し、こなす。麦の殻は牛馬の冬の食物なり。干草は多からず。西蔵には一家に牛馬は数１０頭を飼い放つ。

陝西省の農業は、「陝西の地に至れば全く相い異なるは地形なり。四川の水地に引き換え陝西の地は丘陵多く干地多し。」と報告している。

32. **「第壱号」**（Ｍ３２年～Ｍ３４年）は、中国全行程を記録しており、明治３１年１０月４日から明治３３年１２月３１日までの２年余りの間、中国での巡礼探検を毎日の行動記録を一行書きで記録している。明治３１年１０月４日に故郷を出発して６日に京都着。約一ヶ月間渡航準備と本山の許可待ちのため費やす。１１月６日上京して恩師や友人達に面談して壮行される。１０日に京都に帰り、翌日には京都を発ち１２日に神戸港から西京丸にて出航する。長崎港を経

由して、１６日に上海へ到着する。２１日上海を出航して長江を溯上する。１２月３１日までは一覧表にして５～６文字程度の短い文章で表記している。『渡清日記』、『春秋日記』、『官話記一号』で日記の詳細を確認願いたい。

明治３２年１月１日より一行書きが始まっている。１月８日重慶に上陸して日本領事館を拠点にして出発まで毎日午前中は中国語の学習に、午後は体力維持のため散歩かたがた運動のため市街地を巡る。本山への上申書も定期的に発送している様子も記述されている。

４月１日、重慶を出発。４月２８日、峨眉山へ登山し山頂の金殿に宿泊する。５月１０日には濾定橋を通過して１２日には打箭炉に到着。八角桜、裏塘を経由して８月１１日、巴塘に到着。１６日、父法幢師の祥月命日で勤行する。糧台へ行き「護照」を提示して入国申請をする。９月１８日、糧台より江卡土司からの通知書を示され進蔵が許されなかった。再度、交渉するも叶わなかった。その間にも西蔵里程図を作成。２７日、往復６０里の山道を一人で金沙江を見に行き「のぞめども　深山の奥の　金沙江　つばさなければ　渡りえもせず」と歌を詠む。

１０月１日、巴塘を出発裏塘、折多を経由して２２日に打箭炉に帰着。半年間滞在中にラマ寺院巡観、西蔵経典の収集、英訳作業に従事する。先ず、『般若心経』を訳出する。続いて『金剛経』など４経典を翻訳する。第２回探検は、寛の憧れていた玄奘三蔵、義浄のふるさとである西安府からシルクロードコースに向うべく、着々と諸準備を進めていた。

明治３３年５月１７日、打箭炉を出発し甘粛青海へ向う。成都、漢中を経由して６月２７日、西安に到着。臥龍寺、雁塔、興教寺に参詣する。７月３日、西安を出発。平涼府、蘭州、西寧を経由し２０日に青海に到着。２８日には旅館に預けていた旅行金品が盗難に遭い、止む無く帰途に着く。西寧から東南の方向へ進路を変え、楷州を経由して回教徒の都市を巡礼した。１１月４日、重慶に到着。第３次探検のための資金捻出に奔走していた。１２月３１日、本国あてに１７通の新年状を投函して正月を迎えた。この『第壱号』に記述されたものは、一日の行動記録の中で、最も印象深いものを表記している。この２年間の旅行中には、『進蔵朝佛記』、『飛越関碑記』、『参号』、『八号』など多数の詳細記録を書き残している。この『第壱号』は、これらのガイドライン的なものである。

33. **「進蔵朝佛記」**（Ｍ３３年）は、「一名汗魂録」のサブタイトルが付けられている。明治３３年５月１７日より記録が始まっている。１７日午前９時半に打箭鑪を出発。１８日には降雨の早朝５時２０分に発って第２次探検に赴くために西安へ向かう内容が記述されている。回りの山を見れば「一帯が白雪で足痛」と記している。１清里ごとに１０人平均の茶背の人に出会う。終日では１０００人にも達すと記している。６月２７日に漸く、西安府長安に到着する。「唐代ニテ空海等日本古師ノ入都セリアリ久シク邦人ノ足跡ナシ今ヤ予コノ故都ニ入ル６月２８日御命日勤行」と記している。

打箭鑪から濾定橋、雅州、叩州、成都府、漢州、徳陽県、羅江県、錦州、剣州、漢中府、岐山県、武功県、興平県、咸陽県、西安府まで２６１５里のコースであると行程記録を図式で詳しく記述している。この行程図は、日時、都市名、時間帯行動記録、戸数、気候、風土、寺院の内容、産業、史跡、気候、距離など詳細を記している。また、欄外上には三叉路などの詳細な拡大図や特産品名、行き先の方位が記されている。寛は、中国の８清里は日本の１里だとしている。したがって、１清里は約５００ｍということになる。

34. **「第六号」**（Ｍ３３年）は、「西蔵国地誌略」として明治 32 年 6 月 15 日に記録が始まり、第１章総論、第一節区域では、東西南北の経度、緯度、国境などを記している。全国を大別すると四蔵 69 城とし、頭蔵（八城）、前蔵（三十城）、後蔵（十八城）、底蔵（十三城）に分かれている。古来は、康（頭蔵）、衛（前蔵）、蔵（後蔵及び阿里）の三蔵と称していたとしている。また、近来は前

蔵、後蔵、阿里の三蔵としている。面積、人口、歳出入なども記している。

第２章では頭蔵地誌では、古属地は、四川所属（打箭鑪、裏塘、巴塘）、雲南所属（中甸、維西）、本地は、1 江卡、2 乍了、3 察木多、4 類伍斉、5 活隆宗、6 碩般多、7 達隆宗、8 拉里、9 江達としている。

第３章では、頭蔵古属地の項では、「地理、人種、言語、衣食住、宗教、風俗は、古来西蔵所属の地ありしも現今、中国の統治下にありしも」古属地は全く西蔵本地と異なることなく、中国本土とは全く異にする。

【参考文献】

「郷土史夜話・チベット探検家・能海寛」（「フォトしまね」所載・1982 年）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」①（季刊『なわて』第 7 号所収　1985 年 9 月 25 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」②（季刊『なわて』第 10 号所収　1986 年 10 月 20 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」③（季刊『なわて』第 11 号所収　1987 年 1 月 20 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」④（季刊『なわて』第 12 号所収　1987 年 7 月 25 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」⑤（季刊『なわて』第 13 号所収　1987 年 10 月 30 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」⑥（季刊『なわて』第 14 号所収　1987 年 12 月 30 日）

「チベット探険の先駆者『求道の師　能海寛』」⑦（季刊『なわて』第 7 号所収　1988 年 5 月 30 日）

「チベット探険の先駆者・求道の師『能海寛』」（波佐文化協会刊・1989 年 12 月 15 日）

「山陰美術館めぐり」～秘蔵の逸品「傳牌」（山陰中央新報・1994 年）

「ふるさと論壇」～旅行全容判明国際交流に弾み～（中国新聞・1995 年）

「『能海寛』生い立ちと業績」（『石峰』第 6 号収載・能海寛研究会刊・1999 年 3 月 20 日）

「チベット探険の先駆者『能海寛』の人と生涯」（『とんぱ』第 2 号所収　1999 年 9 月 19 日）

「世界の屋根を目指した『能海寛』」（「まんが『西蔵探検家・能海寛』」所収・波佐文化協会刊・2000 年）

「哲学館で学んだ『能海寛』の生涯」（東洋大学井上円了センター年報 Vol.9 収載・2000 年）

『金城の風土記』（波佐文化協会刊・2001 年）

「100 年前の知的国際交流に学ぶ」（「HEAL Sieht」第 3 号所載・県立大学北東アジア地域研究センター・2001 年）

「能海寛が教えるもの」～根底に生き抜く大切さ～（中国新聞・2001 年）

「チベットの夢雲南に消ゆ」（日本経済新聞・2005 年）

「『能海寛』西蔵探険行の源流を探る」（『石峰』第 11 号収載・能海寛研究会刊・2006 年 3 月 20 日）

「能海寛著作集刊行に思う」（中国新聞・2006 年）

『能海寛のふるさと』（波佐文化協会刊・2007 年）

「能海寛小伝」①～⑮（『能海寛著作集』第 1 巻～第 15 巻収載・能海寛研究会編・2005 年～2009 年）

「求道の師『能海寛』」①～③（「京都教区だより」第 257 号～第 259 号収載・2009 年）

「能海寛師の深層心理を探る」（『石峰』第 15 号収載・能海寛研究会刊・2010 年 3 月 15 日）

「能海寛著作集完結に寄せて」（中国新聞・2010 年 5 月 5 日）

「水野斉入あて書簡（大正 6 年）を巡って」（『石峰』第 16 号収載・能海寛研究会刊・2011 年 3 月 15 日）

『三伽会』~能海、子安、白山のこと~（『石峰』第 17 号収載・能海寛研究会刊・2012315）

「能海寛研究会学習会 100 回の軌跡『知的国際交流』」進む（山陰中央新報・2011.12.23）

「能海寛の『新仏教徒』運動の軌跡」（『石峰』第 20 号収載・能海寛研究会刊・2015 年 3 月 15 日）

【能海寛研究会での発表】

「能海寛の足跡をたどって①」幼年期～青年期の歩み(国内編)(能海寛研究会・1996 年 3 月 12 日)
「能海寛の足跡をたどって②」探検家としての歩み(海外編)(能海寛研究会・1996 年 5 月 13 日)
「能海寛の青年期について」(能海寛研究会・1997 年 11 月 9 日)
「『渡清日記』に見る旅立ちの記録」(能海寛研究会・1998 年 5 月 10 日)
「『官話記 1 号』に見る能海寛の行動記録」(能海寛研究会・1998 年 9 月 13 日)
「能海寛の婚約時代について」　(能海寛研究会定例学習会・1999 年 5 月 9 日)
「『口代』に見る能海寛の探険決意について」(能海寛研究会・1999 年 9 月 12 日)
「能海寛の幼年期・少年期・青年期」(能海寛研究会・2003 年 11 月 9 日)
「能海寛の巡礼探険行」(能海寛研究会・2004 年 1 月 12 日)
「能海寛の業績評価と最新情報」(能海寛研究会・2004 年 3 月 8 日)
「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』(大正 6 年刊) の出版経緯」(能海寛研究会・2011 年 7 月 10 日)

【能海寛関係講演記録】

昭和 56 年 11 月　1 日　演題「求道の師・能海寛」中国高校体育連盟・島根県高校体育連盟(弥栄中学校体育館)
昭和 57 年　1 月 26 日　演題「郷土の歴史について」金城町婦人学級(みどり会館)
昭和 57 年 10 月 21 日　演題「チベット探検家・能海寛」浜田市社会福祉協議会(波佐公民館)
昭和57年11月20日　演題「チベット探検家・能海寛」ギャラリー講演会(喫茶ギャラリー「草花舎」)
昭和 59 年 11 月　2 日　演題「求道の師・能海寛」浜田・那賀手をつなぐ親の会(美又温泉国民保養センター)
昭和 60 年 10 月 30 日　演題「郷土の先人に学ぶ」金城中学校(金城中学校)
昭和 60 年 11 月 10 月　演題「ふんばる旅・波佐コースの案内」金城町教育委員会(波佐公民館)
昭和 60 年 11 月 28 日　演題「求道の師・能海寛」二市二郡教育委員会連絡会(美又温泉国民保養センター)
昭和 61 年　1 月 21 日　演題「ふるさとの文化財に学ぶ」青年教室出夢出夢虫大学(みどり会館)
昭和 61 年　2 月　5 日　演題「金城町内の文化財について」金城中学校(金城中学校)
昭和 62 年 10 月 22 日　演題「石見波佐出身の偉人たち」浜田高等職業訓練校和紙工芸科(エクス和紙の館)
昭和 63 年　2 月 14 日　演題「金城町の歴史と文化財から見た観光マップ」社団法人活性活性かなぎ(国民保養センター)
昭和 63 年 11 月 25 日　演題「波佐の歴史・古代から近世まで」波佐高齢者学級・昔を語る会(波佐公民館)
平成　1 年　8 月 23 日　演題「チベット探検を先駆けた僧『能海寛』」浜田市・夏休み「ふるさと人物講座」(浜田市図書館)
平成　1 年 12 月 21 日　演題「金城に生きる『能海寛』」金城抱月ライオンズクラブ特別例会(金城町福祉会館)
平成　2 年　1 月 15 日　演題「チベット探検の先駆者・能海寛」(出版記念講演会) 波佐文化協会(エクス和紙の館)
平成　2 年　1 月 16 日　演題「ふるさと人物記」～能海寛・島村抱月～今福小学校家庭教育学級(今福小学校)
平成　2 年　2 月　3 日　演題「求道の師・能海寛」新任者研修講座(浜田教育センター)
平成　2 年　2 月 16 日　演題「チベット探検の先駆者求道の師『能海寛』」金城町校長会(波佐公民館)
平成　2 年　6 月　6 日　演題「ふるさと人物記『能海寛』&『島村抱月』」高齢者学級・婦人学級(今福公民館)
平成　2 年　6 月 19 日　演題「ふるさとカルチャー18 年～社会教育を媒体とした町おこしの実践」
ふるさと農業活性化事業研修会・島根県農政課(むらくも会館)
平成　2 年　6 月 23 日　演題「求道の師・能海寛」同朋会石東組研修会(天頂山浄蓮寺)
平成　2 年　7 月　4 日　演題「郷土の偉人・能海寛」生涯学習(校長・教頭)研修講座(浜田教育センター)
平成　2 年　8 月 23 日　演題「求道の師・能海寛」浜田ロータリークラブ(浜田ニューキャッスルホテル)
平成　2 年　9 月 19 日　演題「金城の人物伝『能海寛』&『島村抱月』」芸北町ことぶき大学講演会(エクス和紙の館)
平成　2 年 11 月　7 日　演題「チベット探検家・能海寛の生涯」浜田・那賀手をつなぐ親の会総会記念講演
平成　2 年 12 月　8 日　演題「チベット探検の先駆者『能海寛』」美又高齢者学級(美又公民館)
平成　3 年　1 月 13 日　演題「文化財と町づくり～社会教育を媒体とした町起しの実践」石見町故里を探る会(矢上公民館)

平成 3 年 1 月 16 日　演題「ふるさと人物記『能海寛』&『島村抱月』」今福小学校家庭教育学級(今福小学校)

平成 3 年 9 月　日　演題「求道の師・能海寛」シマネスクくにびき学園西部校ふるさと科(サンマリン浜田)

平成 4 年 5 月 30 日　演題「世界の屋根を目指した男・チベット探検家『能海寛』」島根県高等学校総合体育大会登山大会講演会(旭町民センター)

平成 4 年 6 月 15 日　演題「新劇の父・島村抱月～幼年期と業績～」久佐公民館(久佐会館)

平成 4 年 9 月 8 日　演題「チベット探検家『能海寛の足跡』」シマネスクくにびき学園西部校ふるさと科(サンマリン浜田)

平成 5 年 2 月 28 日　演題「文化財と町づくり」社会教育を媒体とした町おこしの実践(みどり会館)

平成 5 年 3 月 8 日　演題「歴史と文化財と町づくり」～いかに町づくりに活かすか～　むすびの会講演会(波佐公民館)

平成 6 年 1 月 25 日　演題「チベット探検の先駆者『世界の屋根を目指した能海寛』」くにびき学園西部校(サンマリン浜田)

平成 7 年 3 月 12 日　演題「能海寛の足跡をたどって～幼年期・青年期の歩み～」能海寛研究会定例学習会(ときわ会館)

平成 7 年 4 月 20 日　演題「チベット探検の先駆者『能海寛の足跡』」浜田ロータリークラブ(浜田ニューキャッスルホテル)

平成 7 年 5 月 13 日　演題「能海寛の足跡をたどって～探検家としての歩み」能海寛研究会第 2 回定例額集会(ときわ会館)

平成 7 年 7 月 30 日　演題「チベット探検家・求道の師『能海寛』」浜田市・光西寺研修会(ときわ会館)

平成 7 年 7 月 31 日　演題「金城に生まれた 19 世紀末の宗教家・能海寛」浜田地方会計事務研究会(浜田市・ジョイプラザ)

平成 8年 7月16日　演題「チベット探検家・能海寛の生涯」金城町校長・教頭合同会（波佐小学校図書室）

平成 8 年 10 月　日　演題「石見波佐地方の歴史と文化について」雄鹿原ゆうゆうふみの会文化講演会(芸北町民ホール)

平成 8 年 11 月 9 日　演題「能海寛の青年期について」能海寛研究会第 11 回定例学習会(ときわ会館)

平成 9 年 1 月 11 日　演題「能海寛の新資料の初公開」能海寛研究会第 12 回定例学習会(ときわ会館)

平成 9 年 3 月 8 日　演題「『甘粛論』に見る能海寛の中央アジア大旅行の意義」能海寛研究会定例学習会(ときわ会館)

平成 9 年 3 月 22 日　演題「能海寛の業績について」今福シニア郵便友の会総会記念講演(今福ごん平)

平成 9 年 5 月 10 日　演題「『渡清日記』に見る旅立ちの記録」～チベットへの旅立ち(故郷から上海まで)～
能海寛研究会第 14 回定例学習会(ときわ会館)

平成 9 年 6 月 5 日　島根大学法文学部・過疎を攻める―地域からの発想―
演題「ふるさとカルチャーによる町おこし」～能海寛・島村抱月を媒体とした国内・国際交流～
島根大学・講義室(非常勤講師)

平成 9 年 6 月 18 日　演題「能海寛の業績について」那賀郡校長会(ときわ会館)

平成 9 年 8 月 23 日　演題「能海寛の民俗と歴史観」 石見郷土研究懇話会年次大会(美又温泉国民保養センター)

平成 9 年 9 月 13 日　演題「『官話記』に見る旅立ちの記録」～チベットへの旅立ち(上海から重慶まで)～
能海寛研究会定例学習会(ときわ会館)

平成 9 年 9 月 30 日　演題「能海寛の業績と教育論について」金城町教頭会(雲城小学校)

平成 10 年 5 月 9 日　演題「能海寛の婚約時代について」能海寛研究会定例学習会(ときわ会館)

平成 10 年 5 月 28 日　演題「過疎を逆手にとる『地域からの発想』」島根大学法文学部講義室(島大非常勤講師)

平成 10 年 6 月 6 日　演題「世界の屋根を目指した男～能海寛～」島根県高校体育大会登山大会(波佐小学校体育館)

平成 10 年 6 月 12 日　演題「社会参加の実際」シマネスクくにびき学園西部校(国際短期大学交流センター)

平成 10 年 6 月 26 日　演題「能海寛の生い立ちと業績」浜田市教育研究会社会科部会(浜田市立第一中学校)

平成 10 年 8 月 25 日　演題「能海寛の生い立ちと業績」七条高壮年グループ(ときわ会館)

平成 10 年 9 月 12 日　演題「『口代』に見る能海寛の探検決意について」能海寛研究会第 22 回定例学習会(ときわ会館)

平成 10 年 10 月 6 日　演題「能海寛の生い立ちと業績」安来市教育事務所管内校長会(ときわ会館)

平成 10 年 10 月 17 日　演題「世界の屋根を目指した男」～能海寛～東洋大学アジア・アフリカ文化研究所(東洋大学甫水会館)

平成 10 年 10 月 31 日　演題「チベット探検の先駆者・能海寛」厚生省中国地区放射線技師会(石央文化ホール)

平成 11 年 4 月 30 日　演題「世界の屋根を目指した男」～能海寛～シマネスクくにびき学園西部校(国際短大交流センター)

平成 11 年 5 月 21 日　演題「ふるさとの偉人『能海寛』の業績」金城中学校ふるさと学習(金城中学校 2 年生)

平成 11 年 6 月 5 日　演題「能海寛の業績について」今福シニア郵便友の会(かなぎウエスタン研修室)

平成 11 年 7 月 7 日　演題「『能海寛』の生涯と業績」金城町小・中学校校長・教頭会(ときわ会館)

平成 11 年 7 月 8 日　演題「郷土の偉人『能海寛』の生涯と業績」美又公民館高齢者学級・婦人学級(ときわ会館)

平成 11 年 9 月 18 日　演題「能海寛の生涯と業績」(浜田総合福祉センター)

平成 12 年 4 月 27 日　演題「能海寛の巡礼と冒険」シマネスクくにびき学園西部校(国際短期大学交流センター)

平成 12 年 9 月 3 日　演題「私の地方史研究の方法」石見郷土研究懇話会(温泉津町コミュニティセンター)

平成 12 年 11 月 22 日　演題「能海寛の生い立ち」益田市白上町・松光会(浄蓮寺)

平成 12 年 11 月 22 日　演題「チベット探検家『能海寛に学ぶもの』」島根県立大学アカデミック・サロン(大学交流サロン)

平成 13 年 2 月 8 日　演題「ふるさとの偉人『能海寛』に学ぶ」金城中学校ふるさと学習・(金城中学校 2 年生)

平成 13 年 2 月 14 日　演題「ふるさとの偉人『能海寛』に学ぶ」波佐小学校家庭教育学級(波佐小学校)

平成 13 年 4 月 27 日　演題「社会参加の実践」シマネスクくにびき学園西部校(浜田市・いわみーる)

平成 13 年 7 月 13 日　演題「郷土の偉人に学ぶもの」～石峰と抱月～那賀郡教頭会(ときわ会館)

平成 13 年 8 月 3 日　演題「世界の屋根を目指した男『能海寛の行動から学ぶ』」今福小学校家庭教育学級(今福小学校)

平成 14 年 2 月 9 日　演題「能海寛を媒体とした地域活動の実践」異文化交差点・子供達の未来を考える会(浜田公民館)

平成 14 年 2 月 15 日　演題「郷土の偉人・石峰・抱月に学ぶもの」今福小学校家庭教育学級(今福小学校)

平成 14 年 2 月 20 日　演題「ふるさとの偉人『能海寛』に学ぶ」金城中学校ふるさと学習(金城中学校)

平成 14 年 4 月 12 日　演題「社会参加の実践」シマネスクくにびき学園西部校(浜田市・いわみーる)

平成 14 年 9 月 3 日　演題「世界の屋根を目指した『能海寛』」(美又温泉国民保養センター)

平成 14 年 10 月 23 日　演題「秋の史跡探訪」～石峰と抱月の里を訪ねて～浜田女性読書サークル(金城町一巡)

平成 14 年 11 月 9 日　演題「能海寛の国内での活動記録について」能海寛研究会第 49 回定例学習会(ときわ会館)

平成 15 年 1 月 11 日　演題「チベット探検の先駆者『能海寛の足跡』(M31 年～34 年)」(ときわ会館)

平成 15 年 2 月 15 日　演題「金城町の偉人『石峰と抱月』に学ぶ」今福小学校家庭教育学級(今福小学校)

平成 15 年 3 月 15 日　演題「『不惜身命』の生き方に学ぶ」 ～求道の師・能海寛～浜田市郷土資料館友の会(石見公民館)

平成 15 年 4 月 11 日　演題「社会参加の実践」～生涯教育による町おこし～シマネスクくにびき学園西部校(いわみーる)

平成 15 年 5 月 24 日　演題「チベット探検家『求道の師・能海寛』」退職者公務員連盟(浜田社会福祉センター)

平成 15 年 5 月 26 日　演題「社会教育による町おこしの実践」弥栄村教育委員会(やさか会館)

平成 15 年 6 月 10 日　演題「能海寛の生涯」広島女子大学OB(浄蓮寺)

平成 15 年 6 月 17 日　演題「能海寛の生涯」広島女子大学OB(浄蓮寺)

平成 15 年 6 月 18 日　演題「能海寛の生涯」曹洞宗ブロック研修会(美又・金城観光ホテル)

平成 16 年 6 月 19 日　演題「能海寛の生涯に学ぶ」三原市(浄蓮寺)

平成 15 年 9 月 28 日　演題「ふるさとの偉人・石峰と抱月」出雲市神門クラブ(きんたの里)

平成 15 年 10 月 28 日　演題「総合学習『能海寛』」金城中学校 1 年 2 組(金城中学校)

平成 16 年 4 月 16 日　演題「社会参加の実際」～生涯学習による町おこし～シマネスクくにびき学園西部校(いわみーる)

平成 16 年 7 月 27 日　演題「石峰と抱月に学ぶもの」金城町小中学校社会科部会(まなびや館)

平成 16 年 8 月 28 日　演題「能海寛の業績と評価について」広島ビーエス観光(浄蓮寺)

平成 16 年 9 月 4 日　演題「能海寛の業績と評価について」広島ビーエス観光・三原市浄念寺(浄蓮寺)

平成 16 年 10 月 9 日　演題「能海寛を媒体とした町づくりの実践」移動県民大学(ときわ会館)

平成16年11月29日　演題「能海寛の業績と評価について」広島ビーエス観光(浄蓮寺)

平成17年 1 月30日　演題「コミュニティー活動の実際」～生涯学習による町おこしの実践～
出雲市古志コミニュティーセンター(ときわ会館)

平成 17 年 4 月 15 日　演題「社会参加の実際」シマネスクくにびき学園西部校(いわみーる)

平成17年 9 月24日　演題「金城町歴史散歩『石峰と抱月に学ぶ』」山陰西教区臨済宗妙心寺派幹部研修会(美又センター)

平成18年 3 月 8 日　演題「チベット探検家・能海寛の生涯」波佐小学校5～6年生課外授業（波佐小学校）
平成18年 4 月19日　演題「能海寛の生涯に学ぶ」三保公民館・波佐公民館交流会（ときわ会館）
平成18年 7月12日　演題「能海寛の生涯」浜田市・浄慶寺一行(浄蓮寺)
平成18年 7 月27日　演題「生涯学習の今日的意義」～偉人の顕彰活動で学んだこと～浜田市旭町生涯学習講座(旭支所)
平成18年 9 月16日　演題「能海寛の生涯」ボランティアガイド研修（浜田市浜田郷土資料館）
平成18年10月21日　演題「石峰と抱月のふるさと」浜田国分公民館（浄蓮寺）
平成18年10月27日　演題「石峰と抱月のふるさと」益田句会（浄蓮寺）
平成18年10月29日　演題「能海寛の生涯」浜田視覚障害者協会(浄蓮寺)
平成18年11月16日　演題「能海寛の生涯」浜田市社会教育指導員（浜田市浜田郷土資料館）
平成18年12月 7日　演題「金城の三偉人について」雲城小学校3年生（ときわ会館）
平成18年12月18日　演題「金城の偉人（岡本甚左衛門・能海寛・島村抱月）」波佐小学校3・4年生（波佐小学校）
平成19年 4月 7日　演題「チベット巡礼探険家『求道の師　能海寛』」「五風」44周年記念講演会（石見公民館）
平成19年 4月28日　演題「チベット探検家・能海寛の生涯」広島シルクロードの会（浜田市金城歴史民俗資料館）
平成19年 4月29日　演題「チベット巡礼探険家『能海寛の生涯』」千鳥会（浜田ワシントンホテルプラザ）
平成19年 5月16日　演題「能海寛の生涯と歌碑めぐり」のばら会（浄蓮寺）
平成19年 6月14日　演題「能海寛の生涯」呉市善徳寺（浄蓮寺）
平成19年 7月 4日　演題「能海寛の生涯」千代田地方史研究会（ときわ会館）
平成19年 7月17日　演題「能海寛の業績」 広島郷土史の会（ときわ会館）
平成19年10月 5日　演題「能海寛の生涯」 善福寺護持会（浜田市歴史民俗資料館）
平成19年10月16日　演題「能海寛の生涯」 三隅公民館（浜田市歴史民俗資料館）
平成19年10月25日　演題「能海寛の生涯」出雲歴史巡検の会（浜田市歴史民俗資料館）
平成19年11月 8日　演題「能海寛の業績」正念寺御持会（浄蓮寺）
平成19年11月22日　演題「能海寛の生涯」三田郷土研究同好会（ときわ会館）
平成20年 3月12日　演題「石峰と抱月と浜田市」広島坪田会（ときわ会館）
平成20年 3月26日　演題「能海寛の生涯と業績」 BS観光（浄蓮寺）
平成20年 6月 6 日　演題「能海寛の生き方」雲城小学校 3 年生(金城歴史民俗資料館)
平成20年11月13日　演題「チベット巡礼探検家『能海寛の人生』」浜田市身体障害者協議会(ときわ会館)
平成20年11月17日　演題「聖地巡礼探検家・能海寛」石見公民館(浄蓮寺)
平成20年11月28日　演題「能海寛＆島村抱月のふるさとと自然を訪ねる」ひろでん中国新聞旅行(ときわ会館)
平成20年12月 4日　演題「能海寛の生涯と業績」広島県八千代町一行(浄蓮寺)
平成21年 3月 7日　演題「求道の師　能海寛の世界」 広陵東組仏教壮年・婦人合同研修会（西本願寺広島別院）
平成21年 9月25日　演題「能海寛の生涯と業績」 教職員退職互助会(浄蓮寺)
平成21年10月26日　演題「能海寛の生涯と業績」ふるさと学習会(波佐公民館)
平成22年 5月30日　演題「能海寛の生涯」親鸞聖人750回忌お待受け御遠忌法要（浄蓮寺）
平成22年 9月22日　演題「能海寛の生涯と業績」BS観光（浄蓮寺）
平成22年11月15日　演題「抱月と石峰に学ぶ」 退公連金城支部(みどり会館)
平成22年12月13日　演題「能海寛の生涯」波佐小学校3・4年生（ときわ会館）
平成23年 9月27日　演題「能海寛の生涯と業績」蒲刈島聴聞会（浄蓮寺）
平成24年 5 月 24 日　演題「能海寛の生涯」安佐町郷土研究会（安佐町公民館）
平成24年10月11日　演題「能海寛の生涯」波佐小学校4年生（図書室）
平成24年10月13日　演題「能海寛の業績」浜田図書館こども読書会(金城資料館)
平成24年10月24日　演題「能海寛の生涯」 いきいきサロン（金城資料館）

平成25年 1月25日　演題「『他人の教育と自己研鑽』～良師を求めて(幼・少年期) 」クレド・ゼミナール(広島クレドビル)

平成25年 2月22日　演題「『信後の行』～有言実行の生き方(青年期)」クレド・ゼミナール(広島クレドビル)

平成25年 3月22日　演題「『不惜身命』の生き方(海外編)」クレド・ゼミナール(広島クレドビル)

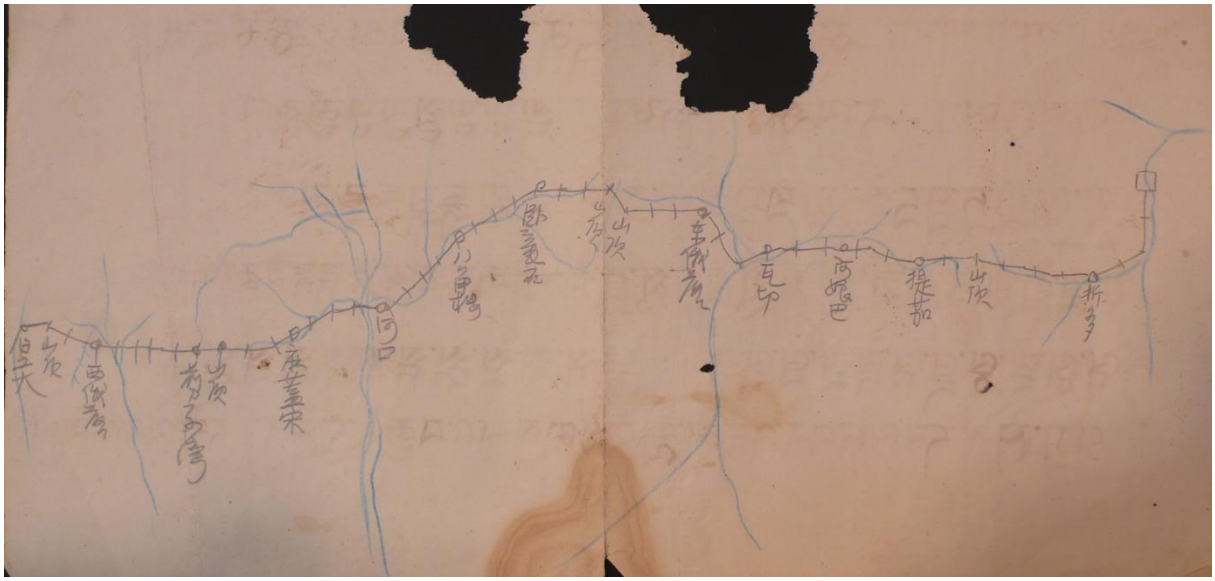
平成25年 4月22日　演題「『他人の教育と自己研鑽』～良師を求めて(幼・少年期) 」歴史楽会前記講座(五日市公民館)

平成25年 5月27日　演題「『信後の行』～有言実行の生き方(青年期)」歴史楽会前記講座(五日市公民館)

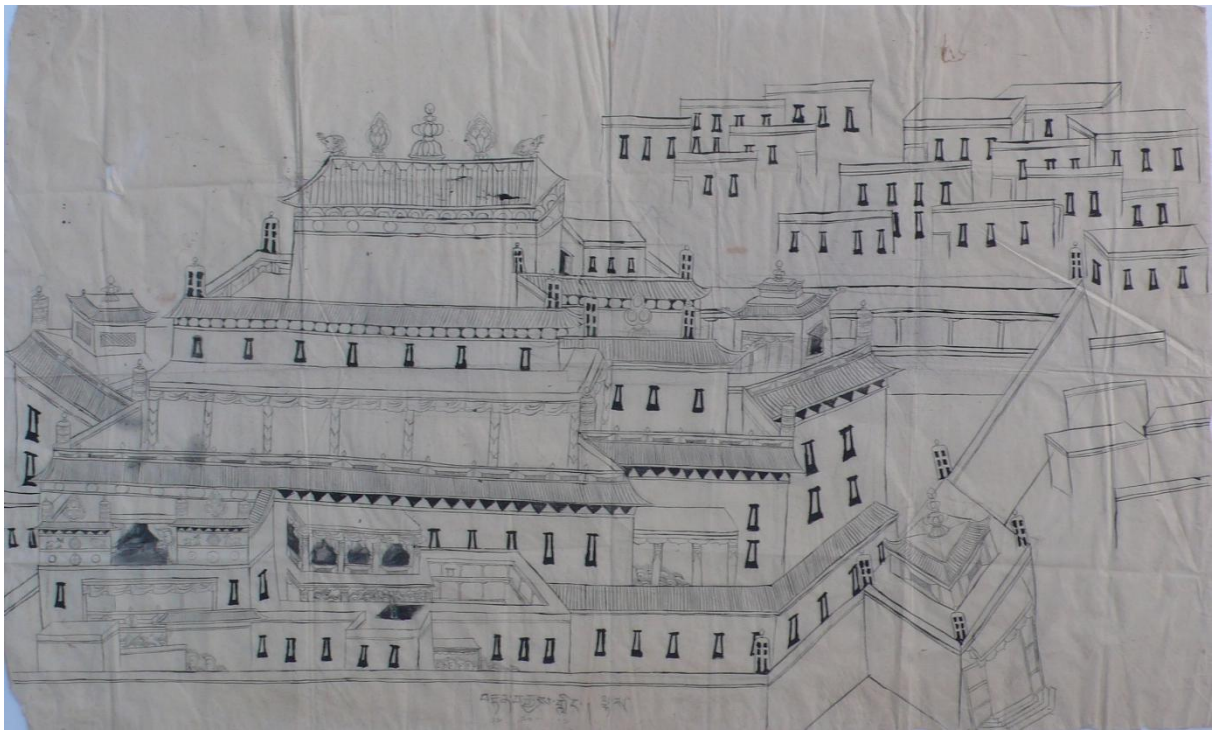
平成25年 6月24日　演題「『不惜身命』の生き方(海外編)」歴史楽会前記講座(五日市公民館)

平成26年 4月21日　演題「石峰・抱月のふるさと」佐野寿会（ときわ会館）

※ 著者が講演した能海寛に関係するものを掲載した。



第１回探検コースの折多から白ユ大までの行程図



能海寛直筆の西蔵テンゲーリン寺のスケッチ　(ラサ・1969 年に消滅)

Ⅱ　「口代（くちがわり）」

能　海　　寛

○　明治２７年２月２７日、剪髪其毛をば後のために紙につつみ箱に入れ置き、予無事帰国せば吉祥也。若し業のために死さば、遺体と思い御葬送を仕乞う。
２月２７日書きし置事。　　寛

１．西蔵国探検の必要は拙著中に大略論ずる如し。依って、これを略す。而して、予は、その蔵国探検を思い立ち候に付為に意を書に顕すべし。

２．予は、全く名利の為にあらず。愛国護法の精神よりして、この決心をなす。由て、一つは国家の為にして、一つは、仏法の為なり。この二大義務は成年にあらずしては、容易に成し得られず。由て、通じて国の為、法の為に為す。予の一生中の業は、只、この一事にして、その後に於けるは、一地方、一区域に限る国の為、法の為に尽力致す考えなり。

３．又一つは、この浄蓮寺の一大歴史に残るべき事越をなし、後来、当山の住職となる者の為に、この業を企てるなり。

４．予仮暫時にもせよ檀家諸氏を始め寺内一同の懇意によりて、ここに数年を学事の為に費す。少しくたりとも見学をば通仏法上、通国家上に応用して、其懇志に報い、一つは、拙著に論ずる愚見中、一ケ条たりとも実行して其論の至当なるを証せんとして、この業をば決心する。

５．予も、当時の悪弊たる学問をなして、其郷に止まらず、人の大いに嫌う所。且つ、檀家一統も、予に、如此事のなきを期す故に心中大いに悩やむ。然れども、予の赤心は、只悪心更になく、決して、この業を成就して帰国する後に於いて、他に去りて、この寺院を顧みさるが如き事は、仏に誓いて決して致すまじく候。定も疑うものあらば、実に仏法者にあらず。予の精神良心に訴えて、更に咎めざる所なり。故に、只この業、成就するまでの年月、予に自由を与えて仏法の為、国の為になすは、かえって檀家諸氏の本意なる事を忘る。この精神なきものは、獅子身中の虫と称して可なり。

６．予今、この業中差し向き、この寺の維持に因る事なき明らかなり。父老いたまいたりと言えども、未だ６０を越えず世話盛りなり。一身を法の為に尽す僧分何ぞ早く一身の為に、未だ隠居すべき時にあらず。躰太り舟重く歩行難しといえども、未だ名義上の住職、仕難き年齢にあらず。而して、兄のあるありて父を助け、御堂の事といい。法務の事といい。その他の庫裏に於ける世話行き届き、未だ、予の在寺せずは、必要にやれざるの時にもあらず。又弟皆乗は、殆ど、予の学資の高の半よりも多く費やして、学事に従事しつつあり。しかれば若し、必至しいうときは、弟帰りて、予の代理越なすべし。

　次には、他寺に入院するとはいえ斉入は隣寺に住職となり居り、当山の必至の時、兄加勢せざるの理あらんや。しかれば、予は、未だに家政の為に纏わるるの時にあらず況や。この大業の眼前に横り、予に好適の時業なるに於いておや。

７．予は、平素深く思うは、当山の住職たる身分は実に兄上なり。予なかりせば、必ず兄の学問に出て、後住たるや明かなり。しかるに、ここに兄は余り出家を喜ばず、所に、予は是非学をなしたきより独行にて、予のためたる金をなげうち上京、学問せり。而して、父は、予の志を見て加勢せられ学問なしつつありき所に、明治２２年秋、再び学問の為、出でたきより、遂に予は固より、その後僧となるの覚悟なり。しかれども、兄も学問に出でたまわば必ずや住職たる事を得る人なり。然

るに、兄も、予を後継たらしめんたまえども、予は、予の弟たるの義務を以ても、一応、兄の当寺の世話をせられて兄より譲り受けるの精神なり。仮令い何年立も、この順序を経すは、予は、譲りうけざるなり。故に、本山の表住職の所は、父上の名前にしても、実地の寺の世話をば一応譲られたまうこそ至当なり。法界師の真の孫にして、且つ、長男なりゆえに、予不在の間は、寺の世話は兄へ致さしめたまうこと偏に希望致候也。

８．予の業中の年限は確定し難きも３．４年間と大略心得られ可成短時間にすますべきも又左様ばかりゆかさる事あれば或いは１年と２年の猶予はなしたまいたし。

９．予も、この寺に就ての意見有之候へば。少々は話し置き、帰山次第には、漸々と着手実行致したく考え居り候間。３年、４年長き思いあるも、実に、一時の瞬間のみ。何卒暫くの所、自由運動なさしめて下さりたく伏して法の為、国の為希望候。

10. 予も学資の為に身を沈められたりと思えば遺憾千万に候へば、檀家氏は、予をば、余りに束縛なしたまわすして、この寺の為にならしめんたまえ。予は誓いて、一生は、この寺の、この我が生れたる寺の為に、尽力致し候間。余りに頑固に堅まられざる事を願い候。

11. 余も、如何なる精神のものかは 50 才を越え（寿命あるものとして）棺に入りたる後にあらずは評したまうな。決して、良心に問いて、檀家諸氏父兄へ対し不義なる事は致さざる考えなり。

12. 如此き事を分け理を尽して願い候ても、心に止めたまわず、婦女子の言の如く、もどらぬとか、内におらぬとか、学資金をばすてたる様なものとか如きひれつの言、仰られまじく、万一、然る事を仰せられ候に於いては、夫々応ずる考え有之候間。左様思被召被下されたく候。

13. 予の、この度の業に着手以来、その有様おば郵報に可致候間。それにて御承知下されたく、又郵状の出れざる地に入り込み候節は、詮方、これ無く候間。予の写真をば当寺に残し置き候間。夫れにて、予の健康を祷りたまい帰山の日を御待ち下されたく候。

14.　然れども、老少不定無常の風は誰に吹き来るやも知らされば、何卒御法義大事にして、未来の対面間違いなき様、くれぐれも申し述べ候。予の、この度の西蔵探検も檀家諸氏の予に、この行を許したまうも全く仏恩の御慈悲にありて起こる事なれば、この御法義の根本なきに於いては、徒らに、名利に走り、共に安楽の往生かない難き間。只要は、南無阿弥陀仏のことわりなり。

心だに共に信のもらせれば
　　いづくのはても同じ月見ん

心中充分に述べる事を得ず予の志大略如此

天頂山沙門　能　海　　寛

明治２７年１月３日書之

実は、今日に至らざるまでに、この話し致すべき所、申し出さば世人如何申さん。人に気遣はしめ。予も、その一時の不親切を見ん事長からんより笑話は帰国の上と、おもい今日まで延引せるものなり。

浄蓮寺檀家　御中

Ⅲ　能海寛チベット文献将来品

「滅十罪経」

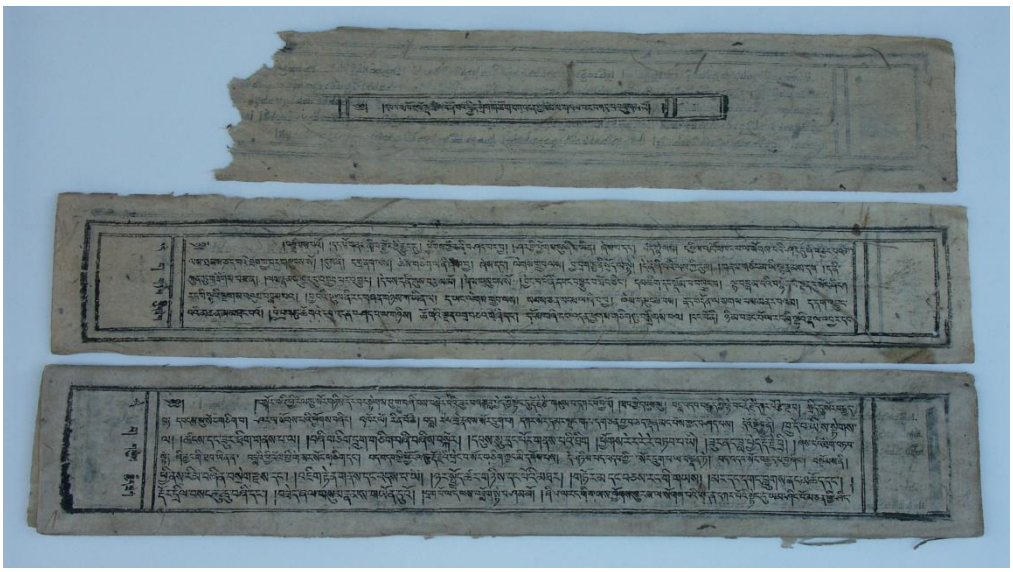
略号表：NH・・・・・浜田市金城歴史民俗資料館蔵『能海寛請来西蔵仏典目録』（島根．１９８９年）による表示番号。

P・・・・・・北京版『西蔵大蔵経総目録』（東京．１９６２年）による表示番号。

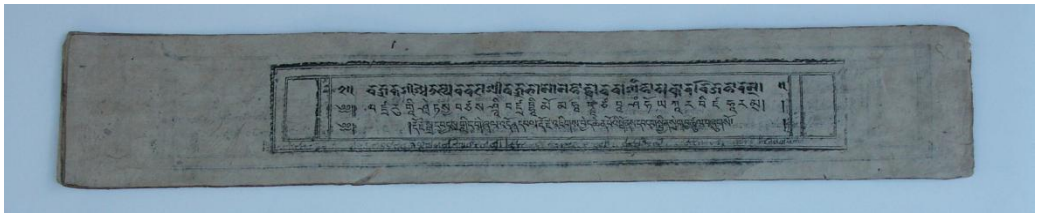
TH・・・・・東北大学蔵『西蔵撰述仏典目録』（仙台．１９５３年）による表示番号

NH. 1　dpal　'khor　lo　sdom　pa'i.　zhi　ba'i　sbyin　sreg　gi　cho　ga

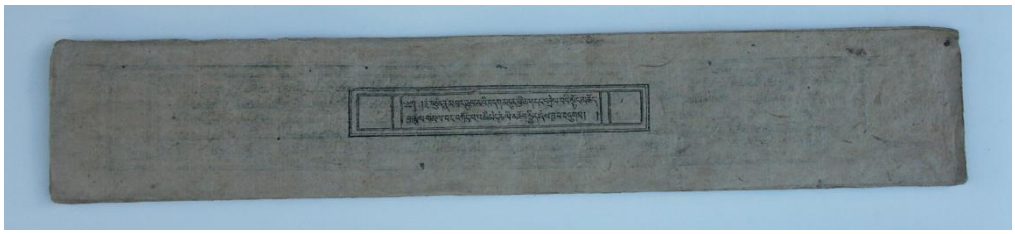
ngag 'don gyi rim pa gsal bar bkod pa. 11 fols. 完 (cf. P. 4620)



NH. 2 rdo rje sgra dbyangs gling gi zhal 'don dpal rdo rje 'jigs dyed chen po'i sgo nas dbang gi sbyin syeg bya tshul. 4 fols. 完

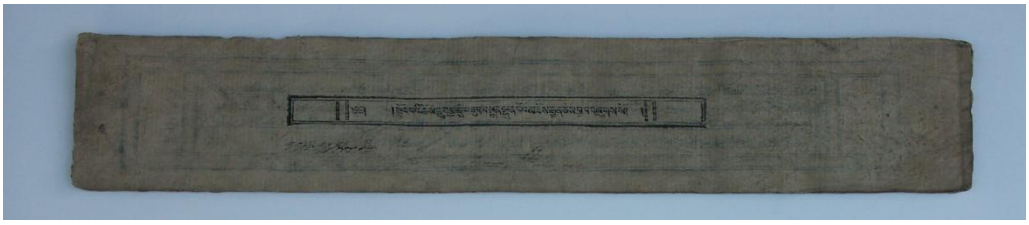


NH. 3 rje btsun rnam par rgyal ma'i bdag mdun gyi cho ga dang 'brel ba'i stong mchod bya tshul gsal bar bkod pa 'chi med tshe yi mchog sbyin. 18 fols. 完

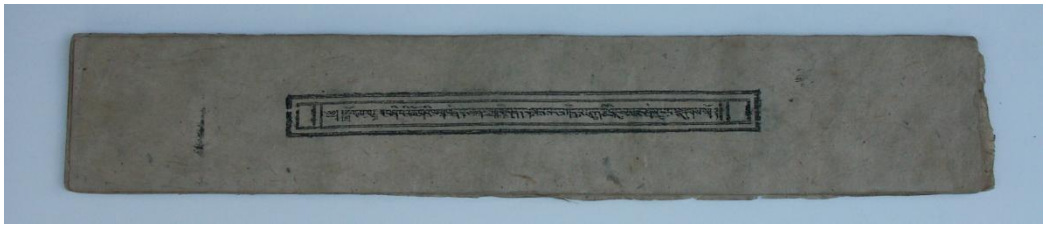


NH. 4 bsnyen yig dngos grub rgya mtsho sogs bsnyen yig gi skor. 30 fols. 完

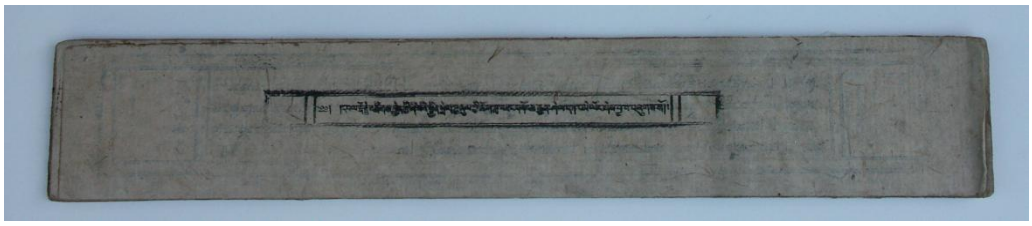
NH. 5 sbyor ba'i chos drug bya tshul thub bstan lhun po'i mdzes rgyan. 17 fols. 完



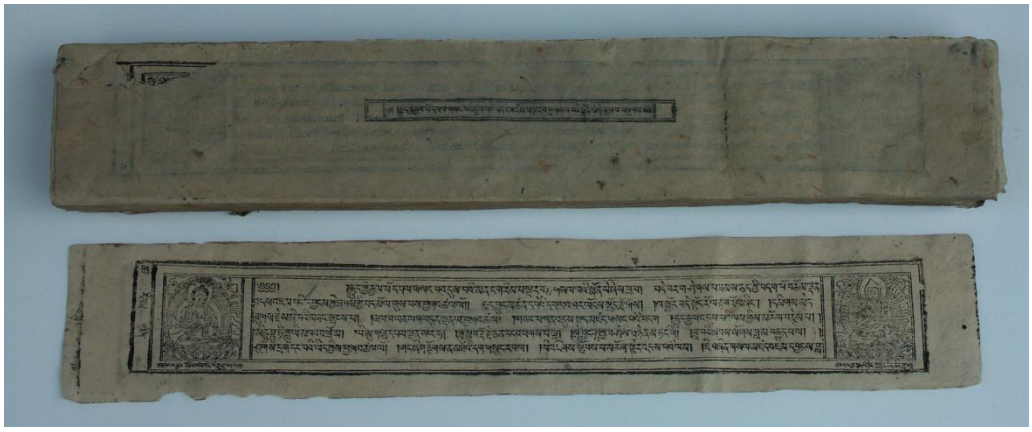
NH. 6 sgrol ma mandala bzhi pa'i cho ga'i lag len dang man ngag gi gnad gsal bar bkod pa bdud rtsi'i bum bzang. 15 fols. 完 (cf. TH. 6894, 6896)



NH. 7 dpal rdo rje 'jigs byed kyi sbyin sreg bya tshul gyi cho ga bla bzang dgongs rgyan shel dkar me long. 43 fols. 完

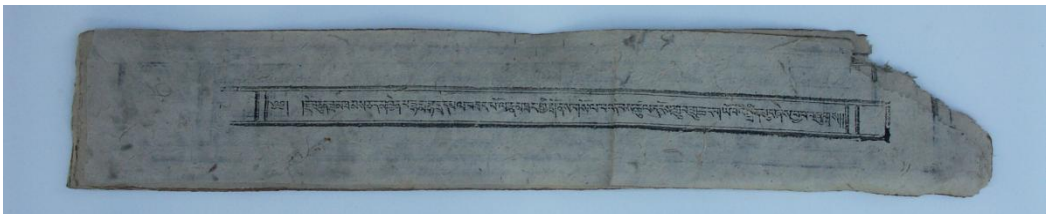


NH. 8 rgyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man ngag rim lnga rab tu gszl ba'i sgrom me. btsong kha pa. 完 (秘密集会タントラ秘訣『五次第照明燈』) 302 fols. dga' ldan phun tshogs gling (zhol) 版. (P. 6167)

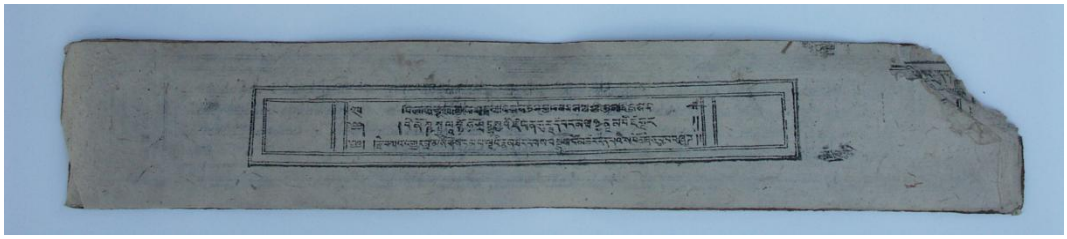


NH. 9 rje btsun thams cad mkhyen pa dharma bhadra dpal bzang po'i gsung 'bum ka pa'i dkar chag legs bshad rin chen 'phreng ba. 3 fols. ＋ 表紙 1 fol (TH. 6258)

NH. 10 rje btsun bla ma thams cad mkhyen pa dharma bhadra dpal bzang po'i rnam thar gyi sgo nas gsol ba 'debs tshul dngos grub gru char g-ro ba'i sprin phung. 5 fols. 完 (TH. 6259)

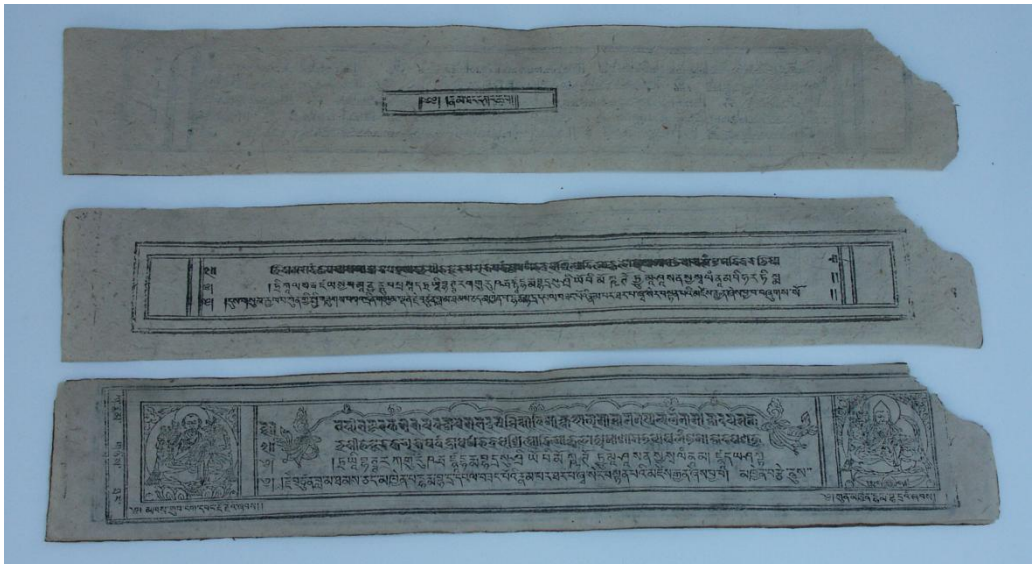


NH. 11 rje bka' 'gyur bla ma sogs dam pa lnga'i rnam thar rags bsdus ngo mtshar dad pa'i sabon. 5 fols. 完 (TH. 6258)

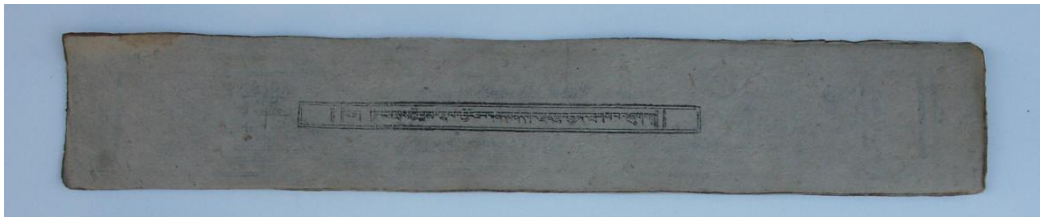


NH. 12 rnam thar dkar chag. 1 fol (TH. 6260)

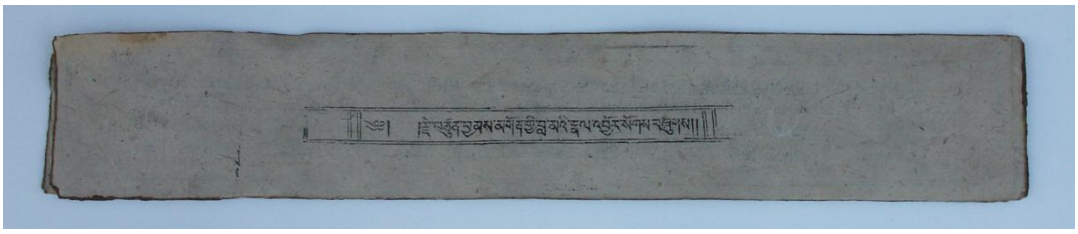
NH. 13 dus gsum rgyal ba kun gyi spyi gzugs bka' 'drin gsum ldan rje btsun bla ma thams cad mkhyen pa dharma bhadra dpal dzang po'i rnam par thar pa zhva ser bstan pa'i mdzes rgyan. 215 fols. (TH. 6260)



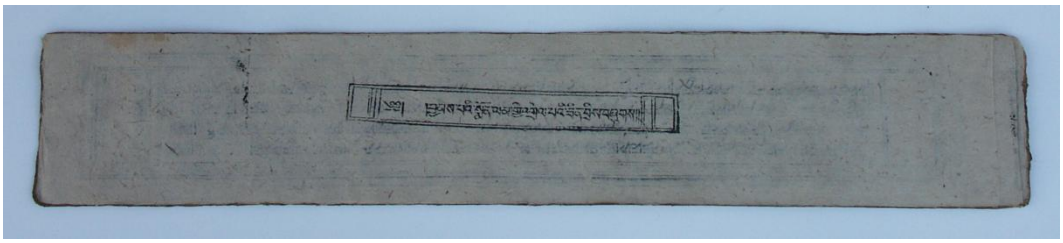
NH. 14 rje yad sras kyi bla ma'i rnal 'byor zab gnad can dga'1 dan 1ha rgya mar gtags pa. 9 fols. 完 (TH. 6261)



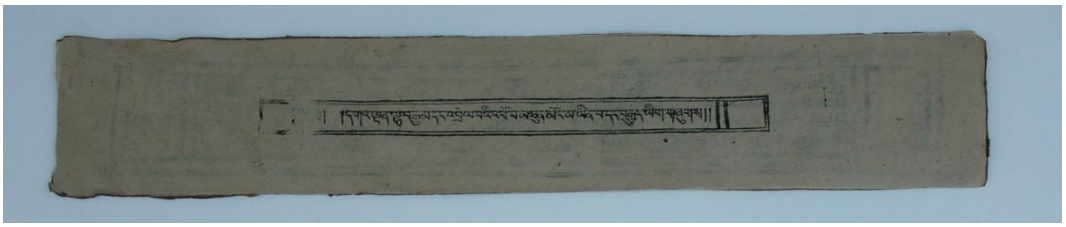
NH. 15 rje btsun byams mgon gyi bla ma'i rnal 'byor.
5 fols. 完 (TH. 6262)



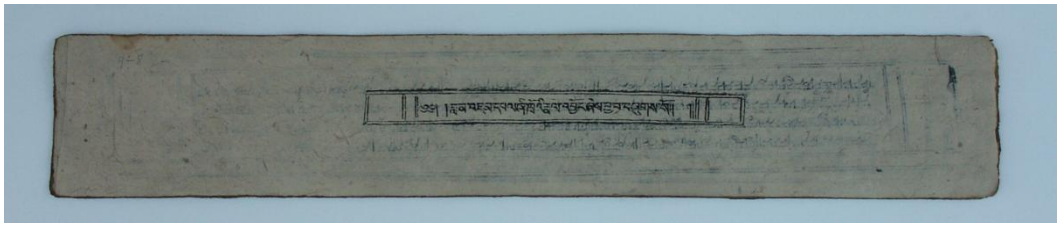
NH. 16 byams pa'i smon lam gyi 'grel ba'i zin bris.
8 fols. 完 (TH. 6264)



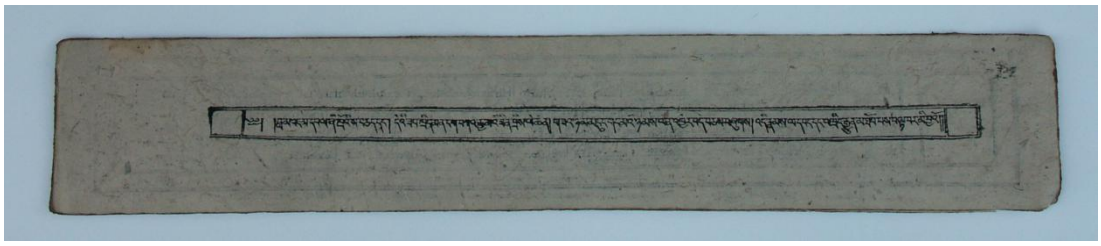
NH. 17 dga' ldan lha rgya ma dang 'brel ba'i 'pho ba mtun mong ma yin pa dang brgyud yig. 3 fols. 完 (TH. 6263)



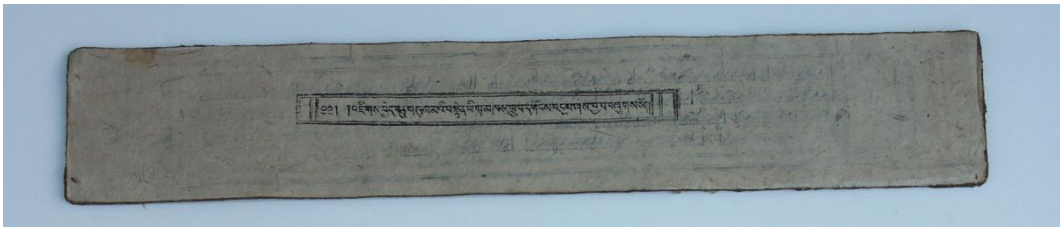
NH. 18 bla ma 'jam dpal zhi khro'i rnal 'byor.
6 fols. 完 (TH. 6265)



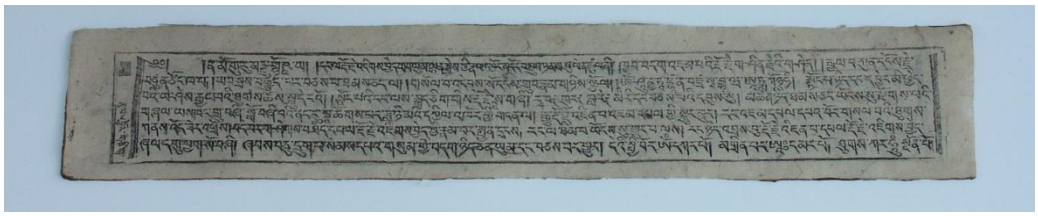
NH. 19 bla ma 'jam dpal zhi khro'i sa bcad dang [de'i zab khrid man ngag bka' brgya ma'i zin bris le tshan] gza' nyi ma mdung gang ma'i nyams len 'khyer bde bcas ('di rnams la dbang dang 'khrd rgyun ma thob pas blta bar mi bya'o.
「これらについて灌頂と秘伝を受けざるものは見るべからず」)
8 fols. (TH. 6266)



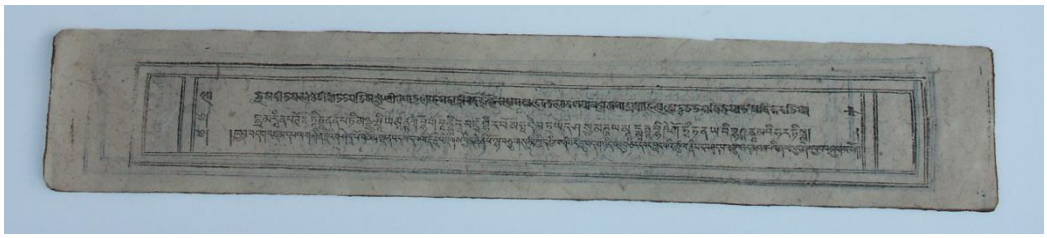
NH. 20 ’jigs byed bcu gsum ma’i bsnyen yig mkhas grub dgongs ’dus. 19 fols. 完（TH. 6267）



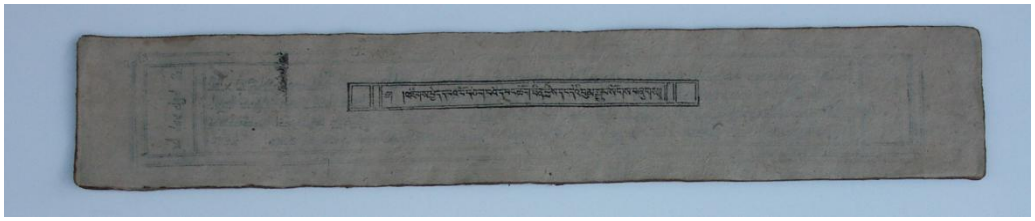
NH. 21 dpal rdo rje ’jigs byed yab yum lhan skyes kyi rnal ’byor mdor bsdus nyams su len tshul. 1 fols. （TH. 6268）



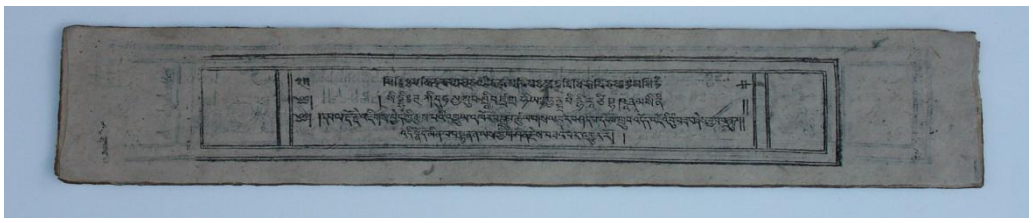
NH. 22 khyab bdag ’jam dpal gshin rje’i gshed po bcom ldan ’das dpal rdo rje ’jig byed chen po lha bcu gsum gyi dkyil ’khor du bdag nyid ’jug cing dbang blang ba’i tshul rnam par bshad pa ’khrul zad mkhas pa’i zhal lung.
56 fols. 完（TH. 6269）



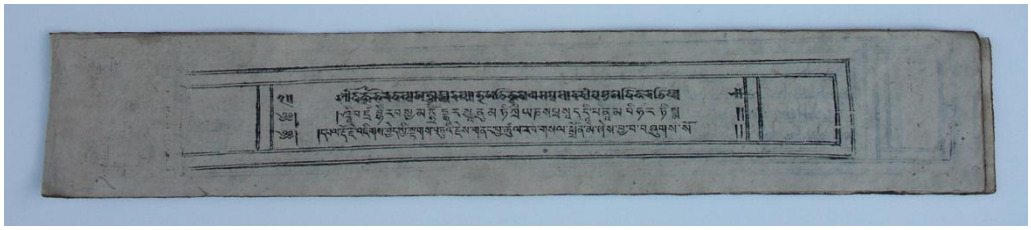
NH. 23 ’jigs bred dpa ’bo gcag pa’i dbang chog zin bris dang de’i bum sgrub. 8 fols. 完（TH. 6270）



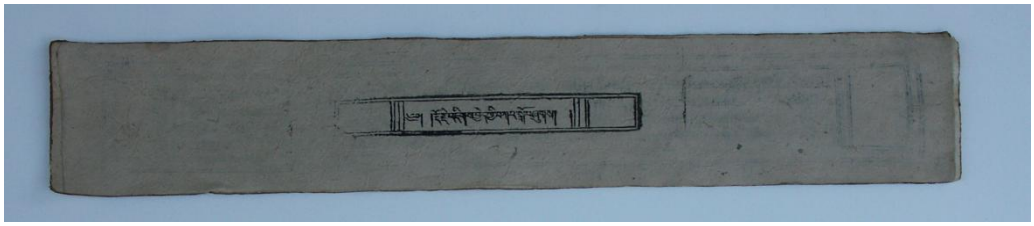
NH. 24 dpal rdo rje ’jigs byed kyi rgyas pa’i khrul ’khor bsgrub tshul gsal bar bshad pa dngos grub ’dod ’jo’i bum bzang.
7 fols. 完（TH. 6272）



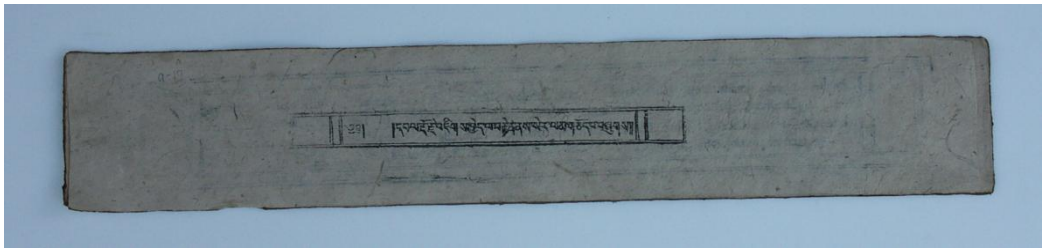
NH. 25 dpal rdo rje 'jigs byed kyi sngags btu'i rjes gnang bya tshul rab gsal sgron me. 7 fols. 完 (TH. 6273)



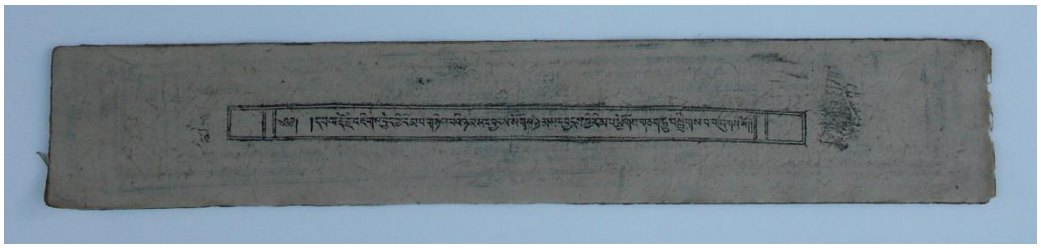
NH. 26 rdo rje 'jigs byed kyi bka' sgo. 4 fols. 完 (TH. 6274)



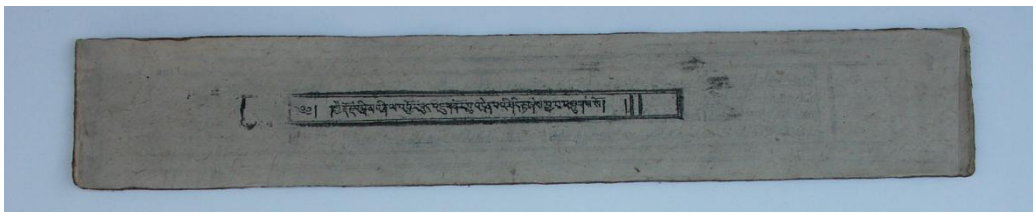
NH. 27 dpal rdo rje 'jigs byed la brten nas ser lam gcod pa. 5 fols. 完 (TH. 6275)



NH. 28 dpal rdo rje 'jigs byed kyi rim pa gnyis pa'i nyams dbyangs sogs nyams dbyangs kyi rim pa phyogs gcig tu bsgrigs pa. 5 fols. 完 (TH. 6276)

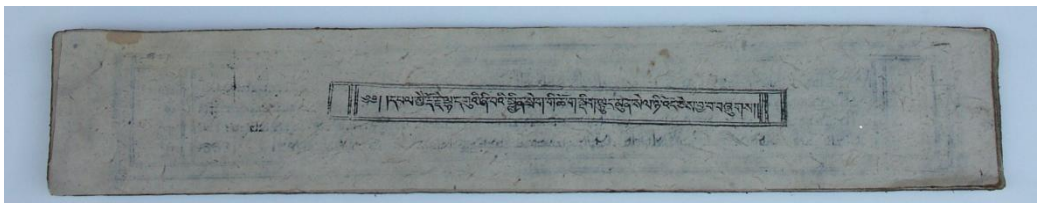


NH. 29 kyai rdo rje'i bla ma 'i rnal 'byor zung 'jug nor bu 'dren pa'i shing rta. 5 fols. 完 (TH. 6277)

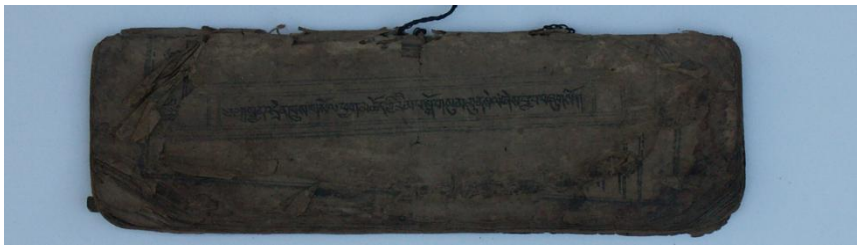


NH. 30 kyai rdo rje lhan skyes kyi sgrub thabs 'khrul spong snying po. 5 fols. 完 (TH. 6278)

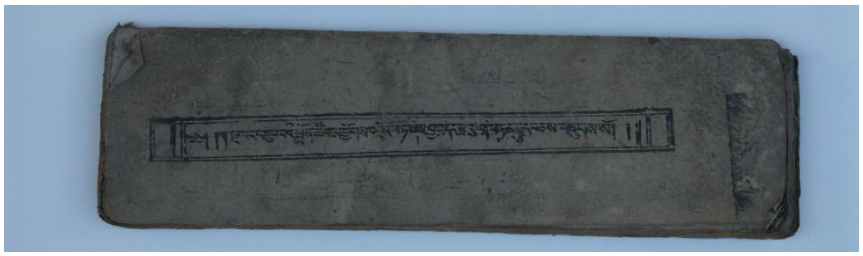
NH. 31 dpal kyai rdo rje lha dgu'i zhi ba'i sbyin sreg gi cho ga sdig lhung mun sel nyi 'od. 17 dols. 完 (TH. 6279)



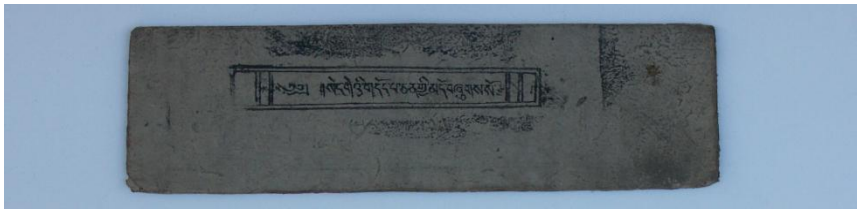
NH. 32 spyan 'dren khrus gsol phyag mchod rim pa sgo gsum mun sel. 25 fols. 完 (cf. TH. 6929) kun bde gling 版.



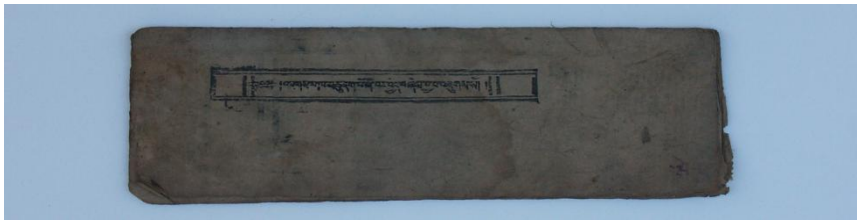
NH. 33 lnga par 'jug pa'i smon tshig mgyogs 'gro'i pho nya. 26 dols. (bkra shis lhun po 版 ?)



NH. 34 seng ge'i gdond pa cangyi mdo. 5 fols. (cf.TH. 6918, TH. 6919)



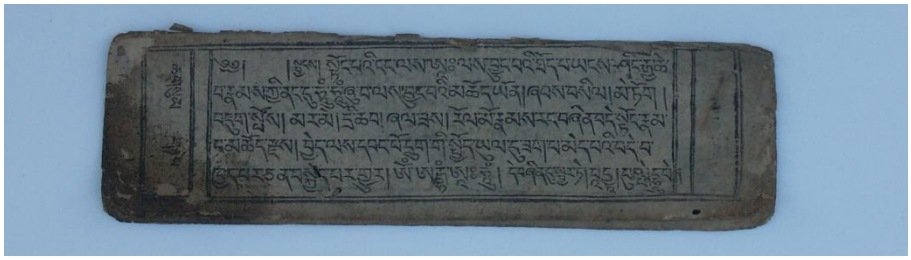
NH. 35 'phags pa kha mchu nag po zhi bar byed pa. 6 fols.



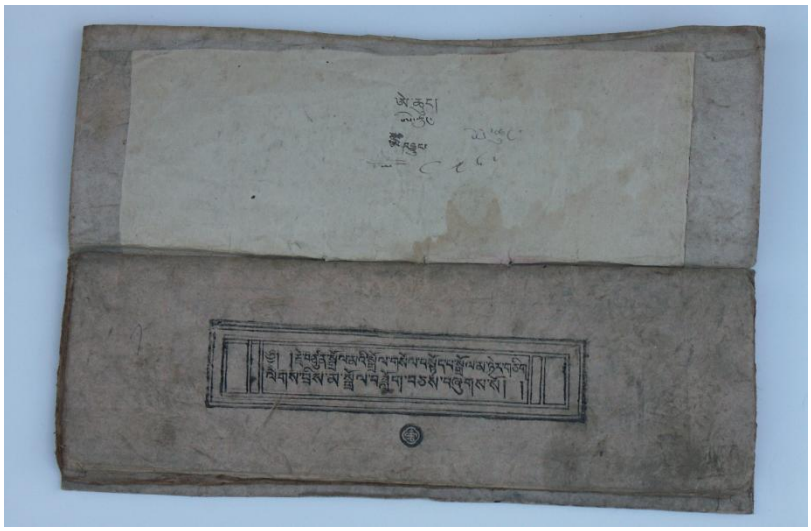
NH. 36 gnas brtan phyag mchod. (十八羅漢供養法) 9 fols. (cf. TH. 5561, 6332)

NH. 37 phyug nad rnag nad thams cad rab tu zhi bar byed pa'i gzungs. (畜類疫病治癒祈願陀羅尼)2 fols＋2 fols.

NH. 38 bsangs chung yid bzhin nor bu. (薫烟供養) 8 fols.

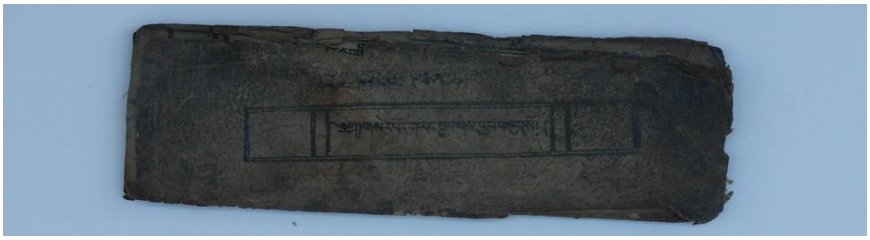


NH. 39 rje btsun sgrol ma'i sgrol gsol bstod pa. sgrol ma nyer gcig legs bris ma. (多羅礼讃) 18 fols.

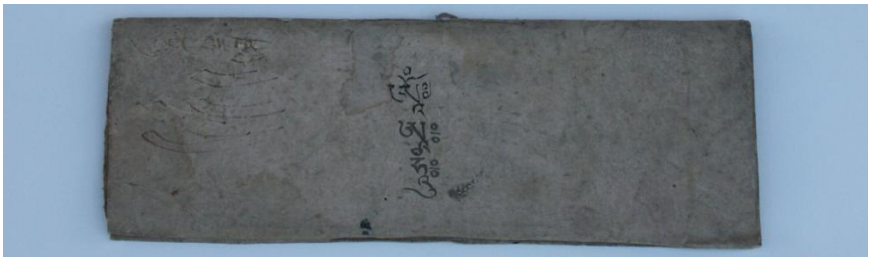


NH. 40 pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan (パンチェン・ラマ一世) kyis mdzad pa'i tshva bsur 'dod pa'i re skongs. (薫烟供養) (cf. TH. 5975) 5 fols.

NH. 41 gser 'od g－yang skyab. 28 fols.

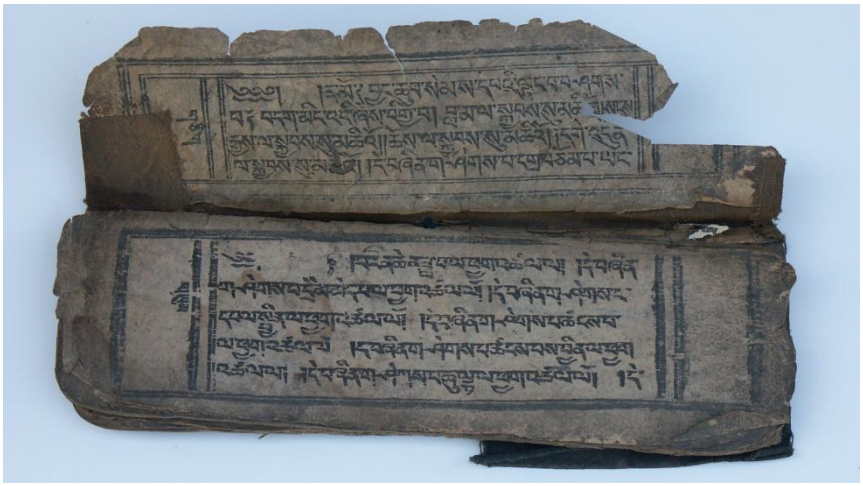


NH. 42 rta thugs dkar po la rten nas dgra lha gsol ba.
(戦神願文) 8 fols.



NH. 43 'phags pa de bzhin gshegs pa'i gtsug tor nas byung ba'i gdugs dkar po can. (怨敵退散供養 ルンタ用. 布製) 29 fols. (cf. p. 203, 205)

NH. 44 dpal gsang ba 'dus pa'i smon lam. (秘密集会願文) 8 fols.

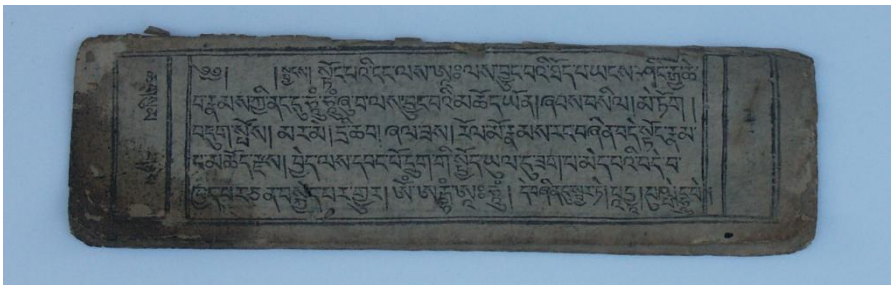


NH. 45 dge 'dun grub (ダライ・ラマ一世作) rgyal ba byama pa mgon po'i bkra shis. 51 fols. (fol. 2欠) (cf, TH. 5542−47)

NH. 46 'phags pa rgyal mtshan gyi rtse mo'i dpung byur rgyan. 1 fol. (cf. TH. 6913) (ルンタ用)

NH. 47 rlung rta. 1 fol.

NH. 48 gtor ma（施食供養法）（1 fol 欠） 7 fols.

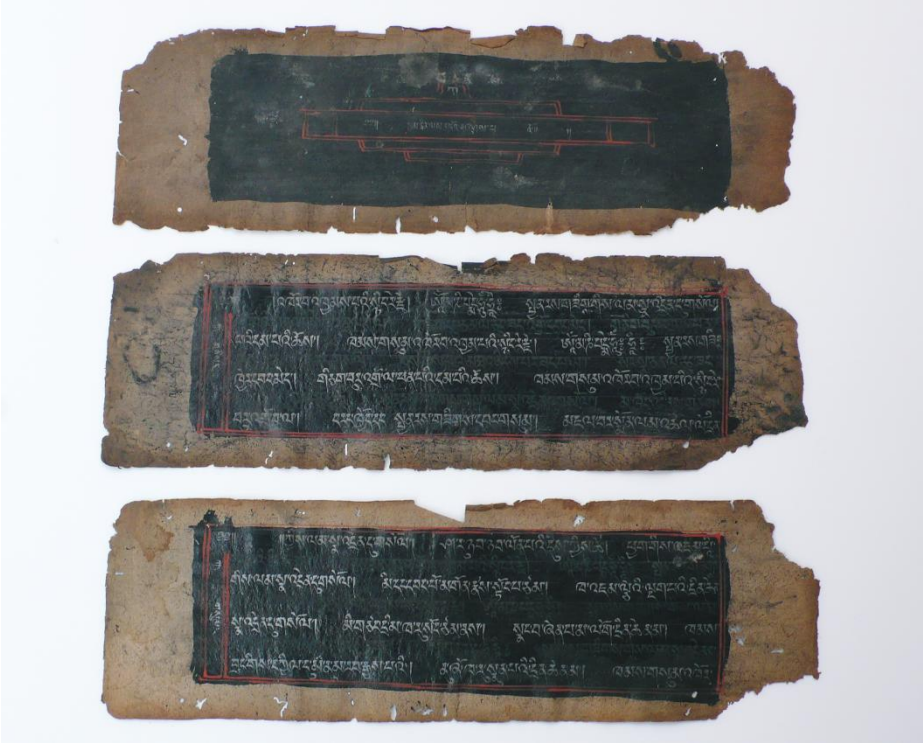


NH. 49 ’phags pa thar pa chen po phyogs bcu rgyas pa ’gyod tshangs kyi sdig sbyang te sangs rgyas su grua rnam par bkod pa zhes bya ba’i theg pa chen po’i mdo. 105 fols. (cf. P. 930)

NH. 50 sdig pa thams cad bshags pa’i mdo. 25 fols. (cf. P. 250)

NH. 51 sdig pa thams cad bshags pa'i mdo. 30 fols. (cf. P. 250)

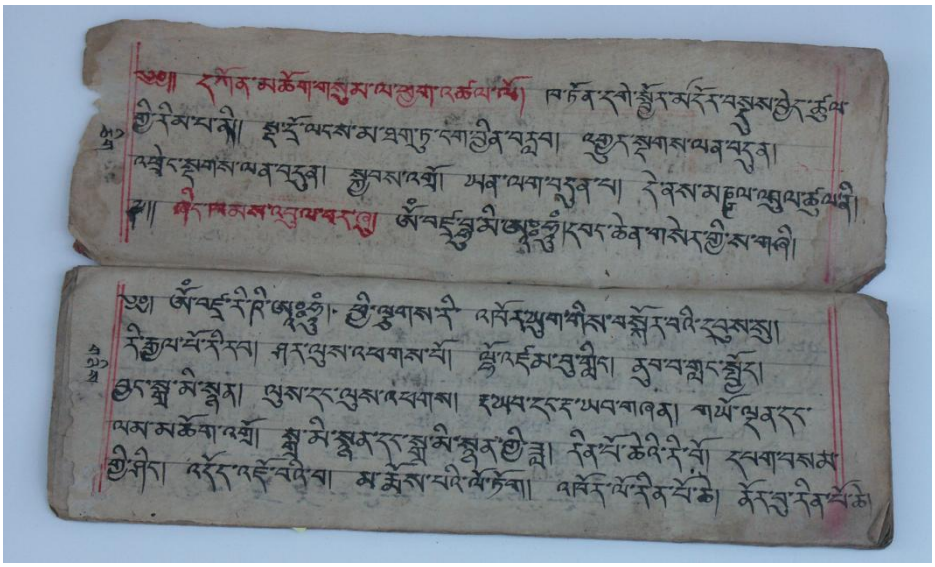
NH. 52 ma drin las mdo. 7 fols.



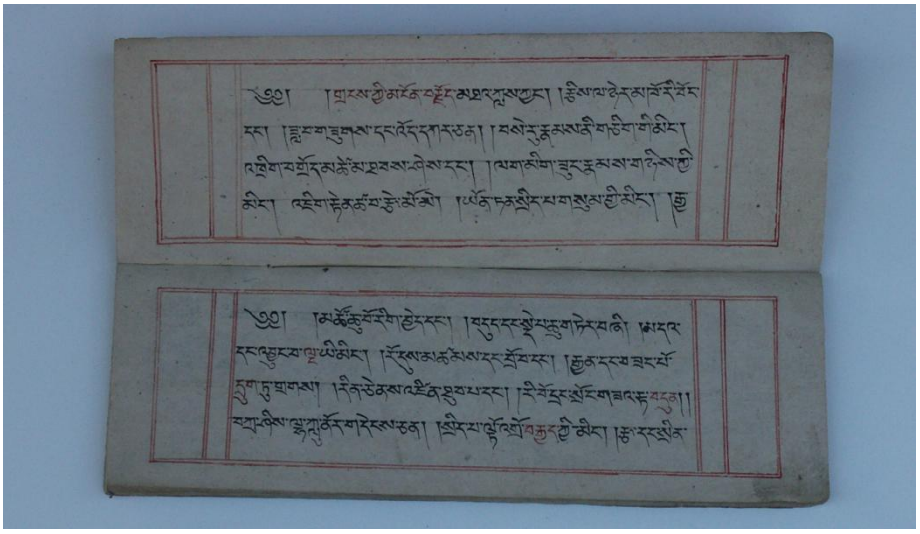
NH. 53 byang chub lam brtse, sdig pa bshags pa'i mdo. le'ur gnyis pa. 5+20 (−f. 12) fols.

NH. 54 ’phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa. （金剛般若経） 68 fols. 写本（cf. P. 739）

NH. 55 kha ton dge sbyor mdor bsdus byed tshul gyi rim pa. 14 fols.



NH. 56 grangs kyi mngon brjod. 7 fols.



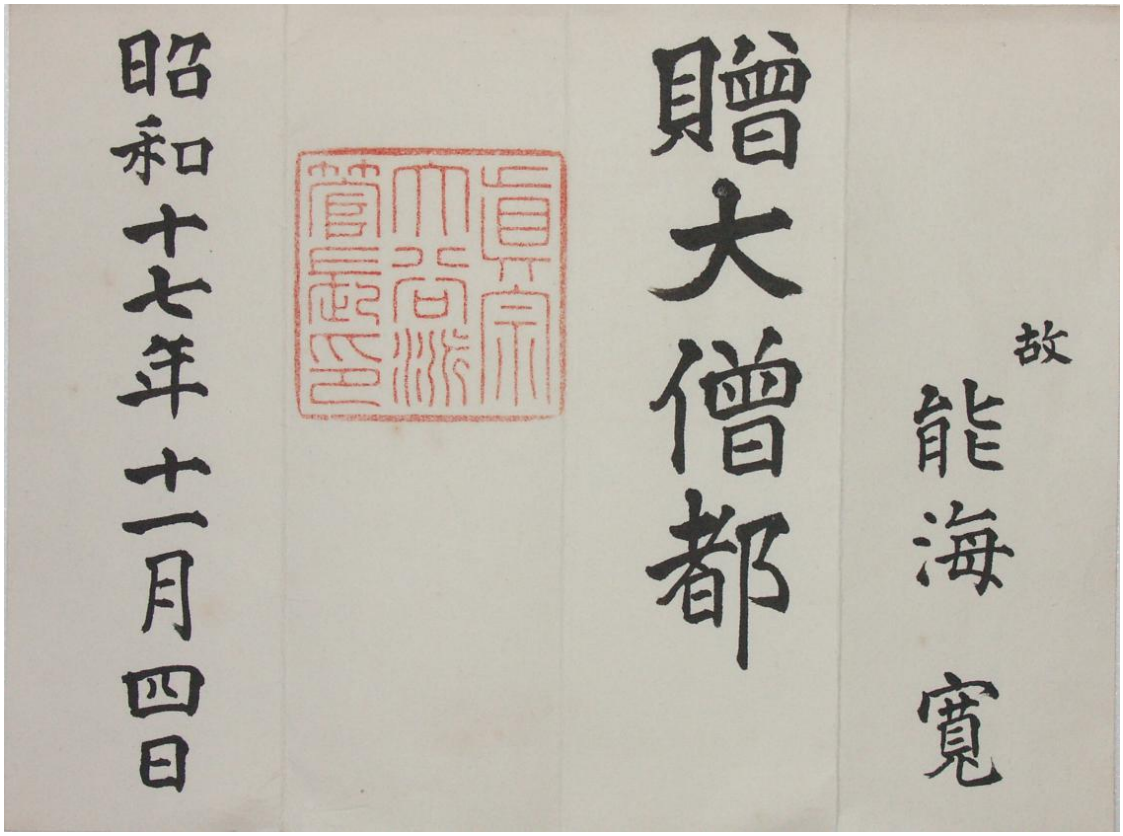
大谷大学博物館所蔵品目録(能海寛蒐集請来品)

1.『世界に於ける仏教徒』　明治２６年(復刻)
2. 書簡類
3. 木碗　高さ　5.7 cm　口径 11.4 cm
4. 茶碗　高さ　4.1 cm　口径　6.5 cm
5. 茶碗　高さ　4.7 cm　口径 11.1 cm
6. 釈迦牟尼仏像　胴造　高さ　9.4 cm
7. 釈迦牟尼仏像　胴造　高さ 10.7 cm
8. 釈迦牟尼仏像　塑造　高さ 12.0 cm
9. 釈迦三十五仏像　塑造　縦　6.6 cm　横　5.4 cm
10. 無量寿仏像　胴造　高さ 13.7 cm
11. 四臂観音像　胴造　高さ　5.3 cm
12. 緑ターラー像　胴造　高さ　3.7 cm
13. 緑ターラー像　塑造　縦　3.1 cm　横　3.2 cm
14. 緑ターラー像　塑造　縦　8.7 cm　横　5.9 cm
15. ヤマーンタカ像　塑造　像　縦　7.8 cm　横　5.9 cm
厨造　高さcm 10.6 cm　横　5.9 cm
16. ツォンカパ像　胴造　高さ　5.6 cm
17. ツォンカパ・釈迦牟尼・四臂観音・白ターラー・不動(cm紅袋入り)
塑造　縦　6.1 cm　横　5.8 cm
18. パドマサンバヴァ像(蓮華生)　塑造　縦 9.9 cm　横 10.3 cm
19. 舎利塔(納入物、能海寛自筆紙)　木造　高さ 12.2 cm
20. 阿弥陀如来及び二十八仏画像　画布着色
画寸　縦 84.6 cm　横 62.4 cm
21. 十一面千手観音画像　画布着色　画寸　縦 69.0 cm　横 46.2 cm
22. 財寶神画像　画布着色　画寸　縦 31.1 cm　横 25.8 cm
23. チベット文献　金光明経
24. チベット文献　パドマサンバヴァ(蓮華生)の伝記
25. チベット文献　賢劫経
26. チベット文献　金剛般若経
27. チベット文献　宝星陀羅尼経
28. チベット文献　マニカブム
29. チベット文献　チベット王統記

大谷大学図書館『能海寛生誕 120 年記念展覧』(S63.9.8-24)より転載

Ⅳ 補 助 資 料

能海寛自画像「東北紀行」より



真宗大谷派管長から贈られた「大僧都」の証（40 回忌法要時に伝達）

学資金募集に付訂約書

第１条　方今、社界の形勢を観察する既に憲法は発布せられ、将に、明年は国会開設の時期と成り、日に月に進歩して止まず。是に依って今１０ケ年の後を就察するに、今日と世を異にするの思ひあり。然るに、予は其時に際して、仏教伝道の任を帯たるものなれば且つ、この時を察して今日夫れに適するの勉強を致さずんばあるべからず。故に、檀家諸氏に、其事件を謀りたるに、諸氏は、護国扶宗の念慮より学資金課出承諾し玉ふこと誠に感謝に絶えず、依って予、学問成就の節は浄蓮寺後継と成り、仏祖先崇敬を始め、檀家布教を本とし寺内和合して、子弟の教育を尽力し、決して他に移転等の不道徳なること致すまじく盟言如斯候。

第２条　当時、私儀、京都大学林文学寮本科第２年生なるを以って、本年９月より、来明治２６年２月までには大学林高等科卒業の見込につき４ケ年半間、この学資金見込２７０円。檀家一統より募集被下る協議に候事。

第３条　学資募集送付付相成候金員は大学林文学寮会計部に預け置き、決して元金益に一厘も消費不候事。

第４条修学制限中といえども、不得止る非常の事件出来の節は協議に任せ運方可致候事。

上記は、今般、修学勉励の為め、被下前檀家一同協議件盟約の通り意義無之候に付為後証一書差入置候也。

石見国那賀郡波佐村大字長田
浄　蓮　寺　　能　海　　寛　㊞

明治２２年９月４日

浄　蓮　寺
檀家総代　御中

嘆　　願

恭しく本山執事閣下に申す。仏陀遺弟の盟主を以て、自任し、五億仏教者の覇者を以て、自負する。我々大本山は啻に本山維持の方策を講ずるを以て満足するのみならず。又以て、宇内宗教の大勢を鑑がみ、以て大いに奥学布教の基礎を立てざるべからさること。敢えて、野生の愚見を上申するをも要せざることに候へ共。

ここに野生仏教の大勢上深く必要にして時機、又切迫せるの故を以て、敢えて西蔵国仏教探検の任命を嘆願し保護あらんことを乞い奉る也。

仰ぐ西蔵国の仏教は、共に北方大乗仏教に属し、特に浄土門に縁深き教えなる事。これ迄の探検者か報ずるところに御座候。而して、その国全般は、この国教の本に立ち、一つの仏教国を以て独立して、未だ世界の潮流を知らず。

方今、各国競争の焦点たるパミル高原に関するも、未だ露英等の歯牙にかからざるは、全く天険に據り世界各国と交通遮断して国状通せず。幸に国家の独立を維持致し居ると言えとも風前の灯火の如く、早晩、各国の天戦場地たること明けし有識なる仏教者、特に仏教者の盟主覇者たるもの彼国の危急を度外視し、北方大乗仏教の最も有望なる□□国をぞ徒に西人耶教徒の跋扈蹂躙に任すること。

その仏教国民の独立を空すること見るに忍びさる所と存じ候。特に仏教、古来の経典は印度に存せずして、却って、西蔵国に望みを属し、大乗非仏説の盛んなるも、一つは、仏教史の材料の欠点より生するものにして仏陀の伝播の歴史、蔵国仏教の状態、弘教の国体ナドり、尚蔵国将来の方進等に関して、いずれの点より考うるも蔵国の探検愈々急々逼り。特に、又我が国戦後の餘勢として、世界に響き渡る新事業は勃然として振起するに戦勝国の仏教徒は、一つ見る壁新事業起こせさる慨難の至極と存せられ候。明治維新の仏者の大敗は、現今、僧侶の価値を下落せしめ仏教の真価を損じ世の潮流に巻き込めらるるの不運に及び候。

今日、第二の維新新事業振起の時代には何卒潮流を支配する上位にありて新事業の振奥希望の事に存知候。印度地方各国の仏教必要なる経巻等多く、西洋人の先鞭に任じ、常に、その挺を営むるが如き到底欧米の開教は期すべからさる事かと残念に存じ候。

何卒この西蔵国たりとも仏教者の手に由て完全に世界列国に紹介をなし得んこと希望の至りに御座候。特に、又社会全般の上より考うるも暗黒なる蔵国の社会、宗教、地理等の研究をなすは有益のことと存就いては蔵国の研究、到底一個人、私人の敢えて企て得べきことにあらず。

しかれとも、未だ、この国に就いて知識少なき。最も謀の大探検に着手すること得ず。故に野生は、先ず率先、如何しかして蔵国探検し得べきかと言う初問題に就き、ここ蔵国の地理、言語、国体、経典等大躰上の観察を試し民と浴して入蔵の義を発心せるものにこれ有候へば。別紙の如く多額の費用を要することにも、これ無き候へば我、大本山は微見を御採用ありて蔵行の命を賜わり保護あらんことを伏して泣願する所に御座候也。

明治２９年５月７日

浄蓮寺衆徒

能　海　　寛

本山執事

渥　美　契　縁　　殿

入　蔵　予　定

第１　方法

先ず、清国に渡り、凡１カ年滞在致し、西蔵に関する参考書を求め、又入蔵の手順を正し、同伴者を求め、喇嘛僧と成り商隊に混して進蔵致す準備致す目算御座候。

第２　順路

先ず、清国北京に着し、凡１カ年の後、四川省に入り。それより打箭爐、察木密多等を通過して前蔵、後蔵の首府に到着予定のことに御座候。

第３　年限

凡往復及び滞蔵合計５年の予定に御座候。

第４　目的

地理、国体、仏教、言語、経典、仏具等の研究を主眼に入たしり候。

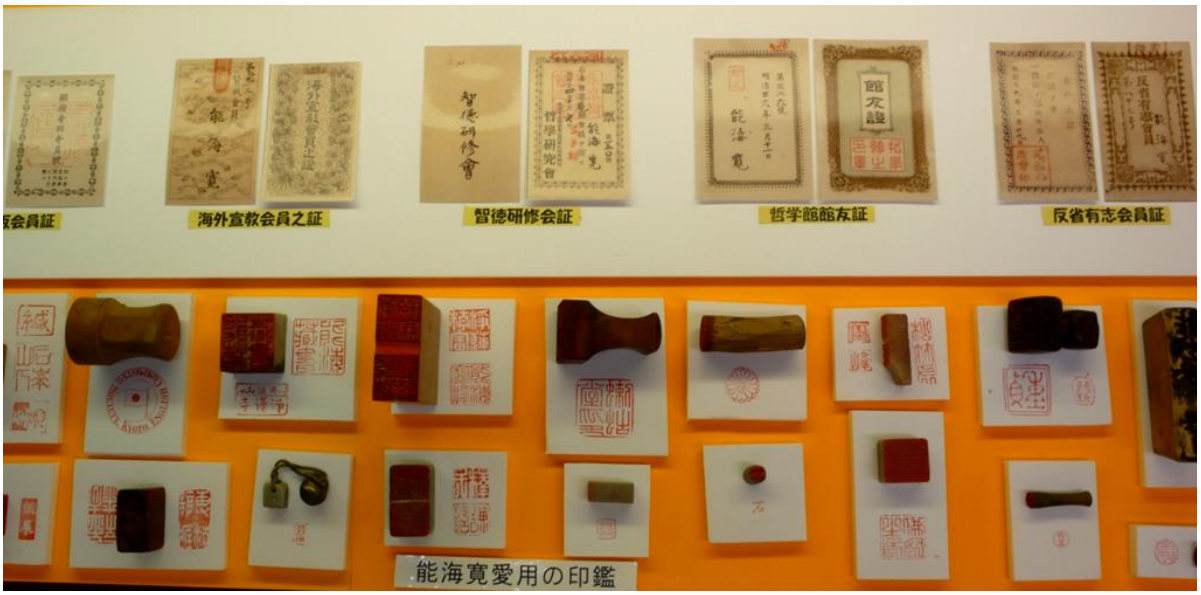
第５　入費

渡　清	１００円
在　清	１５０円
参考書	１００円
入　蔵	１００円
帰　蔵	１５０円
合　計	６００円

上記の通りに御座候。

附　言

野生入蔵発願の儀は、２６年曾て桑門氏を以て伺い無きたることこれ有候も、日清事件の為、途絶致し居り候訳に候。由て桑門氏、梅原氏へも御下問相成候はば存じ候間、何卒督と御考察の上任命御懇願候や。

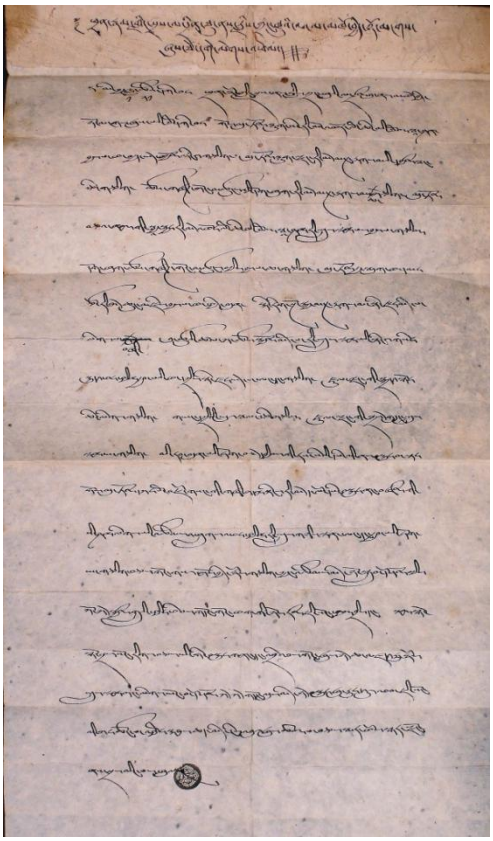


能海寛の所有した各種会員証と印鑑類

履　歴　書

島根県石見国那賀郡波佐村
真宗大谷派院家地浄蓮寺衆徒
院家　能海　寛
明治元年５月１８日生
一　明治１０年より１３年に至る広島小教校在学
一　明治１２年１０月２８日　得度
一　明治１５年、１６年、１７年、１８年、２２年、国元学場懸席致候
一　明治１８年８月、広島教校入学。１２月退学。
一　明治１９年３月、京都本派普通教校入学。爾来２２年１２月まで在学。
　　予科及本科２年卒業。退学致候。
一　明治２３年、東京哲学館入学。明治２６年７月全科習業。帰国。
一　明治２４年より２６年に至る哲学館余暇を以て南條氏宅に於いて哲学に
　　着手仕候。
一　明治２６年１１月、「世界に於ける仏教徒」著作候。
一　明治２７・２８両年在国。本山整理金の為に尽力仕候。
一　明治２８年５月整理献金に付院家出仕。御賞許払成日。
一　賞罰　別に無之候。
一　明治２９年３月上旬より、東京南條宅に於いて梵学及西蔵国文独習致居候。
　　蔵行発心は、明治２５年１２月にして爾来、東京図書館等に於いて調査致
　　居候次第に御座候。
右之通無相違候や。

※　この履歴書は、明治２９年に上申書に添付のため使用された下書きの履歴書の内容である。
　　この他に、6 種類の履歴書を残している。機関誌『石峰』第 15 号 30P－32P に掲載。



西蔵国の文字は他国の文字を借りることなく1400年前にインド字より製作され、経典は1100年～1200年前に自国語に翻訳された。
能海寛はチベット語大蔵経典の草書体文字を称賛していた。

能海寛が請来した書簡(チベット文字)

明治２７年１月８日調

遊　学　資　料　萬　覚

浄蓮寺能海寛控

明細録２冊

第１期学資金　第２号学資金受取払及び遊学雑費払

（明治１８年より２２年まで）

一金１６２円３０銭　　父より出学資

一金　３０円８８銭　　予及び叔母より出

〆１９３円１８銭

第１期分２２年より２６年まで　以上１期分

一金３１６円２０銭　　檀家より出

一金　４０円　　父上より出

一金　１９円４０銭　　予及び叔母より出

〆３７５円６０銭　　以上２号分

合計５６８円７８銭

この外、明治２３年７月分、同２６年１２月分まで１００円の利子５０円４０銭

及び為替及び書留料３円

〆　５３円４０銭

合計６２２円１８銭也

内２０２円３０銭　　父より出

内　３７円７８銭　　予

内　１２円７０銭　　叔母

内３６９円６０銭　　檀家より出

〆３６９円６０銭

内１１５円９４銭３厘　日別金

内　８８円６１銭５厘　永代経現金入

内米２６石２斗４升８勺　石６円に〆１５７円８銭８厘

〆３６１円６４銭６厘

差引　　７円９５銭４厘不足　但し永代経残高

一金　３４円６７銭

一米１０石３斗３合　石６円として　６０円１９銭８厘

合計金高９４円８６銭８厘　永代経残

由て差引８６円９１銭４厘

永代経皆納し時当寺へ残り高

上記は、明治２７年１月８日精算す。大略かくの如し。

６５０円　　学資１８年より９年間

内４００円　　檀家

内２００円　　父上

内　５０円　　予及び寺内

但し、内にて６０円は借金の利子、その他、入費５９０円真学資

以上

『阿里のまん満雲枕』の「発情歌俗作」より

明治３０年１０月２０日詠

冬の夜さむに門出て見れは
淋しき月かはたしをてらす
草木もこをる露夜の気しき
じっとまことが身にしみはたる

明治３０年１１月１３日・１４日詠

見ても見たいが吉野の桜
そばにうえおき詠めたや

はかない此身は川ばたほたる
露のおかげで夜をあかす

紅葉踏み分せしや泣鹿の
こがれ鳴声きかせたい

雪の下なる常葉の緑
色をかわささで春をまつ

明治３０年１２月４日詠

いつくとめども行く水の
流れも清きせど川に
うつるふたりのをもかげは
てらすふたりのこころなり
そらにかかれるをぼろ月

誰がかけさげしともし火の
ほそぼそあかるうらざしき
かたらふひまのみじか夜に
こころのたけをといかたり
すえのすえまでかえさじと
ちきりをむすぶ身の上は
朝顔日記のそれならむ
時節まつ外ぜひもなし

明治３０年１２月２６日詠

こころゆたかに気も静岡の
大東館でたびまくら
ふたつならべてねておれば
こそこそひきたるあのねずみ
今宵一夜は浦島の
明けてくやしき玉手ばこ

能海寛編纂浄蓮寺蔵書目録函記号

第壱　宗乗之部　天函　玄函　黄函丁段　之三函

第弐　餘乗之部　地函　黄函甲乙丙段　之二函

第参　漢籍之部　宇函　宙函　ヘ函　ト函　之函

第四　国典之部　壱函　弐函　参函　之三函

第五　宗乗末書之部　イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　チ　之六函

第六　雑書及勧化書之部　四　五　六　之三函

第七　當用書之部　龍　蔵　之二函

第八　附御堂用書之部

第九　石峰文庫　別冊図書目録一冊　可見

第十　別函文庫略之

能海寛参考図書類購入一覧表

真宗法典 2 冊 2 円、法苑珠林 2 冊 2 円 35 銭、日本外史 1 冊 1 円、韓非史 10 冊 1 円 30 銭、哲学講義録 20 冊 7 円、地文学（英書）1 冊 1 円 33 銭、生物書 1 冊 1 円 50 銭、地理学 1 冊 1 円、読本 5 冊 2 円、文典 3 冊 2 円、字書（英和、和英）2 冊 3 円、数学書（代数、幾何）2 冊 90 銭、物理書 2 冊 1 円 80 銭、化学書 2 冊 1 円 20 銭、植物書 1 冊 1 円 50 銭、動物書 1 冊 90 銭、梵文書 2 冊 2 円、仏教活論 2 冊 1 円 20 銭、雑誌 5 円、雑書 10 円。

能海寛参考図書類一覧表（在重慶）

支那疆域沿革略説、沿革図。蜀水攷。蜀故。天下路程。入蜀記。呉船録。中外日報。日本新聞。朝日新聞。東邦近世史。華陽国史。四川沿革。中等東洋史。隣邦兵備略。東洋分国史。清国通商総覧。和漢高僧伝。西遊記。外交時報。蜀碧。四川通志。支那地誌。南詔野史。便覧上・下。新疆賦。

「思想の変遷」　『在渝日記』(明治３３年１２月２２日)

１．　学問は、何の為に学ぶべきものや。
皆、人の学ぶ故に、己れ又学ばざるべからずと考えし時代。

２．　普通学の必要。
今や、世間一般の学をなす。我が仏教の布教に任あるもの普通学。即ち、小・中・大の学を学ばずは、専門の仏学も応用する不能べしと考えし時代。

３．　欧米布教策。
今や欧米、仏教を求めて止まず。これには、第一支那訳の経文を翻訳せずしあるべからずと考えし時代。

４．　英文研究時代。
同志を集めて「英作文会(イングリシュ・コンポジショナル・ソサイチー)」を結び「文学(レクチュアー)」と称する、毎週、『英作文集雑誌』を校内発行し、又朋友間、手紙に英文を用い、尚東京に移りても、『智慧と慈悲(ウイズ・アンド・マーシー)』と称する「英文集」を毎月、造りて英文に志し、又少々経文を訳せるの時代。

５．　翻訳には、梵学の必要を感じたること。
少しにても、英文に仏教経文を訳せんときは必ず梵音出て来たり。梵語を解せずは、第一、其綴すら困る。是非、この学は少しく学ばずは、目的達し難しと考えし時代。

６．　梵文経典の不足を感ぜし時代。
少しにても梵語を学び、梵文経を見れば、益々、其原文の多からんを望む。今伝う梵経は、僕が１０部ばかりに過ぎぬ。益々進んで求むるを要す。特に三部の一なる観経なし。量等の原本探るの必要あり。

７．　自動的東洋学研究必要。
西洋に東洋学ありて、東洋人よりも却って精し。特に仏徒よりも欧米学者、梵学に熱心研究せり。自動的東洋学研究必要なり。特に、仏徒には梵学の自動的研究を要す。然るに、甚数甚少し。又欧米梵学の大儒梵本を以て、漢訳経を批評す。自ら進んで彼を厭倒するに非ずんば、欧米に仏教の伝道困難なりと考え。世に伝う原書はニポールより多く出て、印度には、已に多く絶へたり。然らば、西蔵に入らば、古来数千年来、伝来せる、梵本経なしとせず。宜しく行て探索すべしと。

８．　西蔵行の感念。
東洋の秘密文庫。世間未知の図書館と望みを属せらるる西蔵国前後蔵より薩迦の経蔵には我々の求めて止まざる東洋学の古木なを秘蔵し居るも不計。今迄は友人に西蔵行を望み居りしも、今や東洋問題、特に中央亜細亜問題、年々通過し来る。我は不要多銭単奇旅行せんと。自ら企てたり。屑々と延引せば、却って外国の為に先をとられんと恐れたり。

９．　西蔵学の必要。
西蔵漠遊の途に上りて段々と土人等に遮られて。暫時、巴塘及び打箭炉に滞在。少々西蔵経文を得て研究せし処、宗外にも、其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は、英文よりも梵学よりも即ち、西蔵文研究の愈々必要なるを感ずるに至れり。

井上円了博士あて書簡

(明治 34 年１月１日付)

恭賀新年

博士閣下、益々御精健を慶賀候。小生渡清後甚だ無音にのみ打過失礼仕候。幸に無事消光罷在候間乍禅御安心奉願候。一昨年は、当地より 1,800 清里の内地打箭炉に至り暫時準備の後、更に 1,200 清里の西蔵部落巴塘に至りし処、土人の為に遮られ不得己打箭炉にまで引揚げ留まること半ケ年。昨年 5 月１７日打箭炉出発、甘粛旅行相企て、成都府を経て、剣門桟道を越へ、陝西省西安府に至り、一週間滞在致長安の故都終南山の古跡尤中玄奘三蔵、儀浄三蔵、慈恩大師の旧蹟塔院を御尋申候。

更に、甘粛に入り蘭州府に至り。新疆青海を平番県にまで相進み西折して西寧府に至り。更に青海に入り、漸く進蔵の方法相定め、暫く、タンガルに滞在中、不計も賊難に掛り路費相失候為不得己、又引返し申候。

帰途には甘粛名物の一なる回々部落通過致候。河州、狭道、岷州、楷州を経て嘉陵江を下り。11 月１４日重慶に帰着仕候。

西蔵開国の気運は年々、英、露、佛、清政治上の関係より切迫致来り候。何卒して日本仏教徒は、この法友国をして、印度の覆轍を踏ふましめざる様、御尽力あらんこと切望の至りに御座候。西蔵経典の研究は非常なる有望の事と存候。今日原本経文の多く発見せざれざる間は、西蔵経文の考究は第一位にある必学の者と愚考仕候。

当地至て、平穏にて、今回の事変に引揚げたる新教宣教師も続々帰来致候。天主教宣教師は一名も引揚げず熱心布教致居り、四川の如きは、天主教の一大根拠地に致して、或地方の如きは、数百戸の一村皆天主教徒にて村民悉くラテン語を話すの有様に御座候。又天主堂も夫々田地を有し貸屋を有し数万の不動産を有するもの多々有之候。

近頃、獨乙汽船初航の途につき 12 月 27 日、三峡まで来候処、遂に暗礁に乗り上げ沈没、船長も死没の由。昨年は、英国軍艦 2 双当地に来り、再び、上流 7～800 清里の叙州まで至り候。又英国汽船も当地、宜昌間 2 回、上下致、只今は、当地に碇泊致候に、今回の珍事は誠に残念に存じ候。

小生、2 月頃、雲南に向かい進蔵の御座候。先は、清年の祥啓に加へ右申上候。益々、博士の御健康を祈り奉り候。早々頓首。

明治３４年１月１日　　能海　寛

井上博士閣下

友人小林久太郎・酒井十平あて書簡

(明治 34 年２月１０日付)

拝啓　1 月 3 日、御両君御差出の御書面 2 月 4 日、落手拝見仕候。毎度、御貴問に接し、又村内の事寺務の事、御報道に預り大に喜読致候。御書面の趣に由れば御両君始め檀家総代、世話方各位無御変御消光の由先ず以て大慶至極に幸存候。小生、渡清以来、始終健康にて旅行致居り候間乍禅御安心相成下致候。昨年、5 月より 11 月までは、四川打箭炉より成都に出て、古来蜀道又は蜀の桟道と称する諸葛孔明などの旧蹟多き険路を渉り陝西省西安府に至り候。西安は、周時代より帝都たりし旧蹟にて唐の長安なれば玄奘三蔵、法顕三蔵、儀浄三蔵の古来、渡天に有名なる高僧の古跡あり。其他、周の文王武王の陵もあり懐旧の情禁じ難く候。

今や清国の皇帝はこの地に滞在せられ小生が長安に着せるの頃、丁度北京事変の起りし当時なれども未だ、様子も知らずして、西安の寺院にて、我は日本本願寺の僧なることを話し大方丈などと面談し、朝夕の勤行にも支那僧に雑わり繞道など致候。西安を立ちて 10 日目に於て、始めて北京騒動を聞きしも、まさかに各国連合殊に日本までが列国軍と同盟して北京に押寄るなどとは夢にも知らず、益々西北に向かい進み入り、甘粛省蘭州府を経て西寧に至り、青海、蒙古にまで進入致候。其地方は実に見ずんば形容も出来ざるの異風の地に候。但し、蛮人と支那人と雑居し、土穴又は土屋に住するもの多く、夏８月の雹(ひょう)降り、寒気強き地にして米はなく烏麦の粉、又は麺、焼餅、羊肉の類を常食とし、道中には、5、6 日間も清水なく、苦水(にがりみず)のみなれば呑むべからず。只天水を取り飲むの有様也。然るにこの近年、降雨少ければ水のなきのみならず畠斗りの其地方は大飢饉にて平年一斤の麦粉 20 文斗りのもの、今は 6、70 文以上と相成余程困難し居る様子に相見へ又畠と云えば其広大なること先ず、長田の一大字位いの畑有之牛にて鋤きかへすに一日に 2、3 辺往復すれば日が暮れると云う如き。到底、日本などにて見ることの出来ざるものに候。

扨(さて)青海には、喇嘛寺の広大なるものあり。塔爾寺の如きは 3,600 の喇嘛住し、寺も非常に沢山有之仏教盛大に候。青海滞在中、所持金を盗まれ、其地まで持行きし鍋、茶瓶、喇嘛服等、悉(ことごと)く皆売払い漸く路費を作りて、遂に不得已当地まで帰り候。途上、回々教の部落を通過致候所、回々は、又一種特別の人種にて、盗賊など多く人気荒く候へ共、我には幸に害を加えず無事通過致候。この半ケ年の旅行総計 8,910 清里にして日本里数にせば、1,200～1,300 里の旅行に候。扨当地へ引揚後、北京の事情も委細承知致し候。当地方に至て平穏にて日本人の気受け、甚宜敷、今年は四川の総督よりも日本へ学生を派遣すると云う如き好都合なれば、日清間の感情甚だ和睦し来り大慶の事に候。

小生は、2 月中、雲南に向かい西蔵旅行致す筈に候。明年には帰朝致度心底に候へば左様御承知相成と浄蓮寺世話の儀、小生留守中宜敷御尽力の程奉願上候。今回、北清事変にて第 21 連隊出征の由村内出軍の各位も無事凱戦相成事歟と御察し申上候。乍末筆御両君の御家族一同並びに浄蓮寺檀家総代、世話方、組内皆々様へ宜敷御伝言依頼申候。小生も無事在清致居候へば、御一同御安心の程御伝言奉願候。

御歴代様御申受御尽力の由誠に結構至極の御事と存候。其上に一切経は、是非購求致度ものと存居候。別紙、波佐八首、及び四風四景、いつか寸暇の時ものせしものに候。御笑い草に迄。先は、早々。

34 年２月１０日　　在清渝城　能　海

小林久太郎様

酒井　十平様

南條文雄博士あて「能海寛最後の音信」

(明治34年4月18日付)

拝啓　小生２月２１日、重慶を出発。界名、龍岡、綦江県、鎮子街、観音橋、松坎、山坡、桐梓県、泗渡站、遵義府、後覇場(鳥江過河)、美竹簀、息烽、札佐、貴州省域の十五站、９４５清里を経。省城滞在２日の後、３月１１日、貴州発、清鎮県、安平県、安順県、鎮寧州、坡貢、朗岱庁、毛口(邉河)、花貢、缶貫子窑、揚松、両頭河、赤資孔、(雲南省界、勝境関を経)、平彝県、白水、霑益州、馬龍州、易隆、(嘉利澤を過)、楊林、板橋、雲南省城の２０站、１,１６２清里を経、省城滞在４日、省城及呉三桂の修造せる金殿太和宮等を見物致し、更に、４月４日、省城発、(滇池の北を経)、安寧州、老鴉関、禄豊県、捨資、廣通県、楚雄府、呂合、(鎮南州を経)、沙橋、普湖、雲南駅、(青竜海を過ぎ)、紅厓、趙州、(洱海を経)、大理府の１３站、９２５清里を経、以上３計、４８站、３,０３２清里の西端に迄で相達し候。

途上、２、３の見聞を報道申上候へば、貴州の天主教の多きこと、殆んど、各駅、各府県に天主会堂あり。信者不少。仏人来り、教化致せること。又貴州は苗字と称する人種の所住地にて、貴州、廣西の両省に渉り、数百万、或いは、千万以上にも達すべき異人種、異風、異言語の種族の住せること。雲南省城、昨年、旧５月、暴民起こり、天主堂を一つは、焼き攘い、一つは、撃ち毀し、堪忍強き仏国宣教師も引揚ぐるに至りたること。其他、所々哥老会の閙事有ること。但し、仏人も小生滞在中、爾来、開教に着手被致候。

四川省永寧県に哥老会暴起有之しも、小生通過の地方よりは、７、８日も北方にして、尚通過、数日後の事件にて、小生は、幸いに無恙通過致候間、御安心相成下度候。

途上、貴州の飢饉と、毎日の降雨と雲南の強風には、少しく閉口致候。大理府は、東に洱海あり。西に蒼山聳へ。山水名美(明媚)にして、蒼山には、白雪を頂き、又山中、大理石を生じ、禽獣山水の形あり。光彩あり。城外三塔寺の近方１００余戸は、全く、この大理石の石工場にて、他地に輸送するもの甚だ多く、墓碑、石碑等、皆大理石を用い候。三塔寺は、大小二つの三塔有之。大塔、１５層約高１８０尺。塔基５間四方。頂上金輪あり。唐代、蒙氏、この地に帝国を建設の時、創立せるものにして、観音を安置し、唐代以来千有余年間不絶。毎年、３月１５日より２０日に至る、５日間、各省より参詣する者多く、これを期として、各省の物産を持来り、貿易するもの幾十万群集し、本年の如きも、已に其期日に近づき、廣東、廣西、湖西、江西、雲南、貴州、四州等より、来るもの日々増加し、繁昌致候。

洱海を渉り、２站にて、雞足山と称するは、雲南第一等の霊山にして、前山五大寺、後山八大寺。全山３６０庵。幾百の僧侶の住せる名山に有之候。

大理府には、目と歯のみ光り黒色なる熱帯人、西蔵人、銅色人及び漢人の数人種住し、西蔵人は、この内地より来るもの多く有之。就いては、殆んど、漢、蕃の境界の如き観ある地に御座候。提督軍門、道台衛門等有之。戸数不多。３、４千戸位と目計致候。

明日、出発、故麗江府に相向い候。重慶以来、連来りたる雇人を帰慶致候に付右相認近状申上候。

早々

４月１８日　大理府にて　　能　海　敬白

南條文雄殿閣下

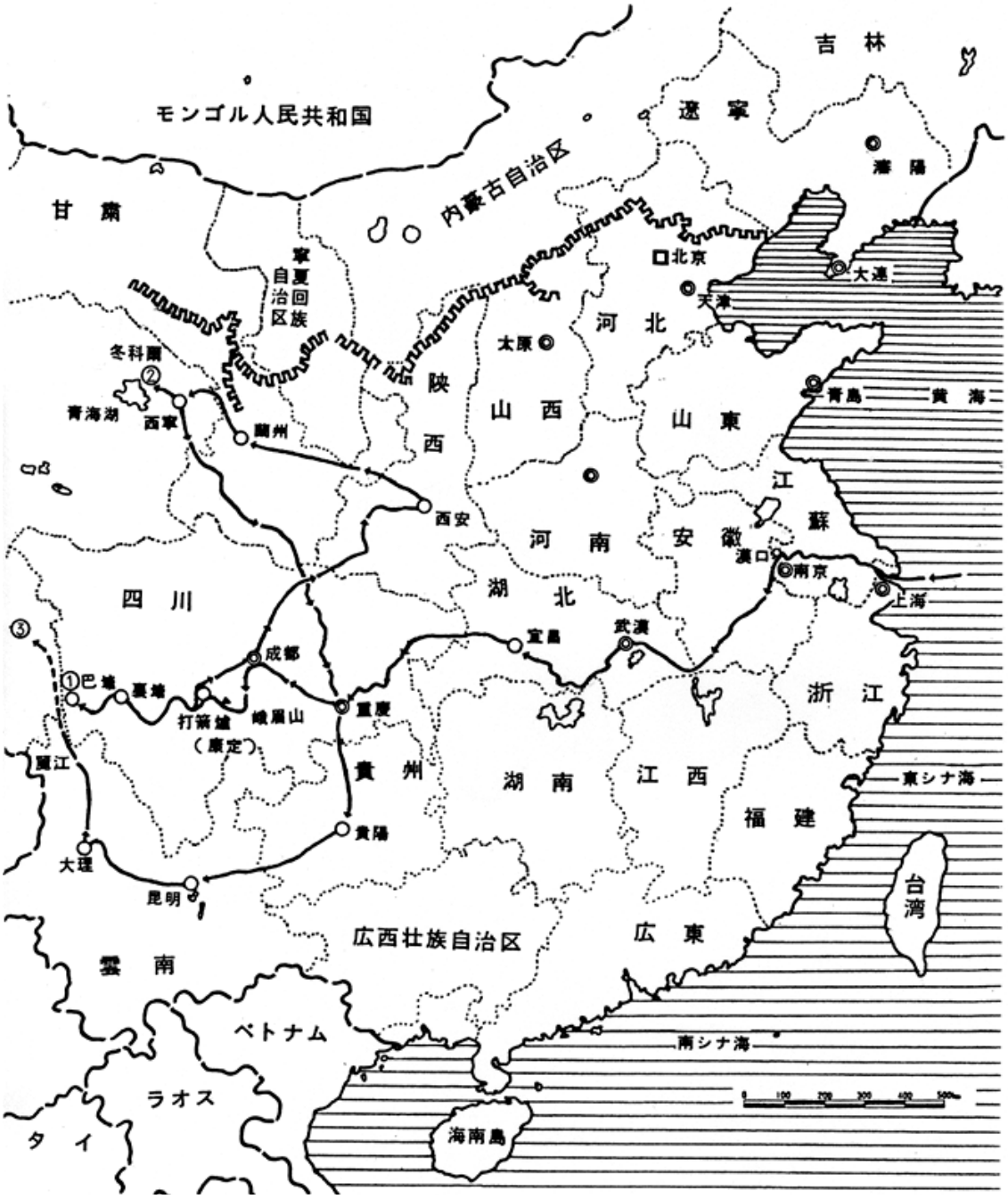
Ⅴ　能海寛中国大陸旅行地図

【第１次探検コース】Ｍ３１．１１．２１－Ｍ３２．１０．１

上海⇒漢口⇒沙市⇒宜昌⇒巫山⇒菱州⇒重慶⇒昌隆⇒筒⇒成都⇒嘉定⇒峨眉山
稚州⇒打箭鑪⇒裏塘⇒巴塘

【第２次探検コース】Ｍ３２．１０．１－Ｍ３３．８．２２

巴塘⇒裏塘⇒打箭鑪⇒稚州⇒成都⇒徳陽⇒剣⇒千仏崖⇒漢中⇒留覇⇒陽岐⇒
武功⇒西安府⇒長武⇒平京⇒蘭州⇒平番⇒西寧⇒タンガル⇒冬科爾（トンガル）



【第３次探検コース】Ｍ３３．８．２３－Ｍ３４．４．２１？

冬科爾⇒タンガル⇒循化⇒狭道⇒階州⇒臨江⇒順慶⇒重慶⇒貴陽⇒安順⇒赤資

曲靖⇒雲南⇒安寧⇒廣通⇒逍州⇒大理府⇒麗江⇒中甸⇒　？

【凡例】

ー ー 国境（未定国境を含む）。 …… 省境。 ⟶ 能海寛進蔵行程。

◻ 首都。 ◎ 主要都市。 ⎍⎍⎍ 万里長城。①②③ 探検コース。

あ と が き

能海寛師と向き合って４８年を迎えた。２６年前の平成元年に出版した『求道の師　能海寛』は、絶版となった。以来２０年の間にさまざまな新事実が判明してきた。昭和６１年８月３１日、浄蓮寺の別宅の回春堂（当時借家）が空家となり、「開かずの間」と言われていた押入れの調査の許可を得て、日曜日の早朝より資料の捜索を行った。８０年間も借家のため押入れは釘付けされており、開かずの間であった関係で、重要文献が死蔵されていたのである。

石炭箱１０箱に資料が約８００点、鼠の糞や８０年間の粉塵で取り付く島もない有様であった。しかし、一点一点の資料を検索していく内に、胸の高まりを覚えずにはおれなかった。それまでの空白時間を一挙に埋める第一級の資料ばかりであった。

チベット語・梵語・中国語の研究ノート、上京中の葉書・手紙、中国大陸旅行中のメモを書いた手帳、寛の学んだ図書類、寛の愛用した机等が含まれており、能海研究により深みがもたらされた。

その後、浄蓮寺住職・能海存氏の心温まる、ご協力の基に分類整理して、金城町歴史民俗資料館に公開展示したけれども、何としても、寛師の伝記と資料集を一体にして、公にしたいという気持ちから「求道の師『能海寛』」として発表したのである。

そして１０年後の平成８年１１月１０日、再び能海寛新資料が浄蓮寺本堂裏の書庫から２，０００点にものぼる大量の資料の発見であった。上海の櫃にギッシリと詰め込まれた中国大陸での記述された日記資料、地図類、地誌、翻訳文献、四川の草鞋、書籍類などであった。累計で３，０００点にも上る点数となった。爾来、１０数年間にわたり、資料の分類、解読を進め、平成２０年７月には、「能海寛歴史資料」３５７点が浜田市文化財指定となった。平成１６年から能海寛研究会で取組んだ『能海寛著作集』刊行事業５年の歳月を経て、全１５巻（１７冊）、別巻（「索引」、１冊）を完結することが出来ました。

『求道の師』出版以後、能海寛研究会機関誌『石峰』、同定例学習会での発表、雑誌類への寄稿した文献を集大成して、改定版として「チベット巡礼探検家・求道の師『能海寛』」と題して、出版しておりましたが、このほど PDF 版として更に改訂し、発行する運びとなりました。内容は、能海寛関係資料３，０００点に基づき記述したものであることを申し添えます。

なお、能海寛往復書簡データ、能海寛関係（市指定文化財・歴史資料）一覧、能海寛略年表、図版・スケッチ、写真資料 300 点等については、先に出版した「チベット巡礼探検家 求道の師『能海寛』」をご参照ください。

これまでに多くの皆様方に、ご助言ご支援を賜りましたことに対して衷心より厚く御礼を申し上げます。このＰＤＦ版を、遠く中国・雲南省の奥地で消息を絶たれた、能海寛師に捧げます。

平成２８年２月

隅 田 正 三

「チベット巡礼探検家　求道の師『能海寛』」
発行日　2016 年 2 月 5 日　(PDF 版)
発行者　波 佐 文 化 協 会
〒697-0211　島根県浜田市金城町波佐イ 394
e-Mail:bunka@hazaway.com　http//www.hazaway.com